

127
150

東 京 圖 書 館				
一 三 〇	二 九	三 九	四 九	五 九
冊	號	架	函	類 門

新編
史

至
目
十
九
七

久留米小史卷ノ十七

船 曳 鐵 門 校 正

戶 田 幹 編 纂



第 四

君 臣 言 行 ノ 三

有馬照長

有馬照長織部ト稱シ息焉ト號ス本姓吉田姓有馬氏ヲ賜フ

世國老タル四千石ヲ食ム性寛洪能ク衆ヲ容大乘大良義源

對鷗ノ四公ニ歴仕シ補弼誘導深ク信任セラル天保十年大

良義源二公父子ノ間嫌疑ノ生スルニ際シ照長有馬泰賢參

政岡田正明水野正芳等ト力ヲ盡シテ周旋調護セルヲ以テ

二公ノ間水釋レテ父子ノ歡從前ニ倍セレハ實ニ照長等ノ

力ナリ此ノ時忍ビザルモノアリ義源公既ニ其老ヲ愍ニ乘輿城ニ

有馬泰賢

登ルヲ許サル對關公ノ時ニ至リ命レテ相談相手トス蓋レ
深ク之レニ依頼セラレシナリ嘉永四年七月十三日卒ス年
七十一照長樺嶋石梁ヲ師トシ文學ヲ好ミ詩歌及ヒ書畫ヲ
能クス其江戸ニ在ル汎ク天下ノ名流ニ接レ文人學士ト布
衣ノ交ヲ結ヘリ菅茶山坂井虎山等ノ詩集ニモ有馬大夫ニ
贈ルノ詩アリ當時海内三賢大夫ノ稱アリ
有馬泰賢播摩ト稱ス初メ雄吉トモ又タ内藏内助トモ云ヒ
テ豐水又タ願齊トモ號ス寛正三年五月四日生ル性嚴毅方
正天保四年楮幣通用溢滯ニヨリ泰賢建議之ヲ豆津濱ニ於
テ燒カレム義源公ノ世子タル時泰賢ハ世子ヲシテ必ス讀
書ヲ好マセラレタキノ倦々ノ情ヨリ密ニ詩箋唐詩選解征
韓偉畧國朝諫爭錄等其他ノ書籍ヲ頻々獻セリ弘化元年英

艦ノ長崎港ニ至ル九州騷擾ス我藩ニテハ泰賢軍政ヲ司ト
リ内ハ兵備ヲ修メ外ハ騎士ヲ發遣レ長崎奉行ノ指揮ヲ受
ケレム皆泰賢ノ獨斷ニ出テタリ然ルニ公江戸邸ニ在テ此
變ヲ聞キ寢食ヲ安ンセラレス適泰賢ノ此ノ舉ヲ聞テ曰ク
國ニ人アリ我レ西顧ノ憂ナキナリトテ乃テ侍臣石野陸三
郎ヲ遣ハレテ手牘ヲ齎ラレ其功ヲ賞セラル公ノ中興多ク
泰賢ニ咨詢セラレ泰賢モ亦タ自ラ任レ凝思焦慮知テ言ハ
サルコトナレ言テ爲サレコトナカリキ而レテ同職ニテ
照長寛ヲ以テ泰賢ハ嚴ヲ以テ相合レテ職務協和封内
安泰ナリ嘉永三年六月十四日卒ス年六十泰賢容貌魁偉個
儻幼ヨリ武技ヲ好ミ壯年ニレテ初テ書ヲ讀ミ樺島石梁ヲ
師トシ道ヲ問ヒ事ヲ論セリ毎朝早起書ヲ讀ミ五鼓ニ至リ

結髮湯浴神拜終リテ初テ煙ヲ吸ヒ飯ヲ喫シ公務ノ處置ヲ
ナセリ登城歸家ノ後公務ノ暇アレハ讀書或ハ弓馬火技等
ヲ試ム夜ハ人定後ニ至ラスレテハ寢テス嚴寒ト雖脚爐ヲ
設ケス江戸往來ニハ輿中ニテ讀書紀行或ハ山川ノ勝景ニ
ハ詩歌ヲ賦セリ一日先考ノ忌日ニテ感冒ニ罹ラレシカバ
家臣辻太郎ト云者ヲレテ代拜セシメシ時泰賢自身ニ上下
肩絹ヲ着ケ一席ニ出テ來リ席ニ手ヲ下レテ代拜ヲ命レ其ノ
復命ニ至ルマテ儼然トシテ上下ヲ脱セストゾ且又君公泰
賢ノ門前ヲ通行ノ時ハ必ス家臣ヲレテ報知セシメ必ス坐
ヲ改メタリ平生ノ奉行見ルベレ其子ヲ要人ト稱ス性寛仁
親ニ事フル孝ナリ文武ヲ好ミ溫氏通鑑ヲ一年間ニテ一過
セリ細字ニテ數卷ノ拔萃アリ新田義貞ノ爲人ヲ慕ヒ夜會

有馬要人

課業ニハ天下古今ノ政教ヲ論議セリ其家臣ヲ遇スル新舊
ノ差別ヲナサス卒スル年二十二家臣悉ク流涕歎歎セサル
ハナシ義源公其計ヲ聞カセラレ索然樂マサルモノ久シト
ソ

今般異國船渡來の儀に付長崎奉行より達有之候に付俄に人數手當申渡
候處上下困窮之内不行届之儀も無之早速相整ひ候趣致承知候畢竟孰れ
も格別令出精候故と満足に存候士風武備之儀ハ國家の要務に付追々深
き存意も有之候條一統尙又氣節相勵決して不相弛候様可心懸候此旨一統
に申可聞候以上

八月朔日

筑後守

有馬播磨殿
有馬右近殿

能と申入候此度異國船渡來の儀に付追々申越候旨逐一得其意候當時一
人にて萬事指揮致盡丹精候事ハ其任とハ申勝手方致難澁候央整候ハ

全被入精候處と存候我等遠路隔り何分差圖不任心底候自今猶更委任致
候間萬端十分可取量候様存候○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
右委曲織部より可申遣候荒々申入候不備

初秋二十四日

筑後守

有馬播磨殿

村上量弘

村上量弘守太郎ト稱シ士精ト字ス父ハ量敏文太ト稱ス母
ハ松岡氏文政二年七月二十二日生ル幼ニシテ聰慧讀書ヲ
好ム而シテ外貌憐悃愚ノ如シ親族或ハ其ノ讀書ヲ禁セント
ス量敏可カスレテ曰ク兒性學ヲ好ム吾其ノ好ム所ヲ以テ
國用ニ供セントス益讀書ヲ專ラトシ其爲ル所ヲ縱ニス故
ニ博ク經史ニ涉リ年十一國校助讀ニ補ス成童ニ及ヒ群經
諸史國朝記傳略己ニ卒業ス敏捷人ニ過ク目ヲ過クレハ輒
ナ能ク誦ヲ成ス筆ヲ下セハ數千言立ロニ成ル衆頗ル之ヲ

異トス天保六年量弘年十七國老有馬泰賢其才學ヲ聞キ之
ヲ大良公ニ薦ム以テ扈從トス年十八九ニシテ政論十卷ヲ
著シ經國ノ要ヲ言ヒ又數々書ヲ國老ニ奉レリ講官ニ轉シ
扈從格トス命レテ遊學セシム乃チ昌平賢ニ入り且ツ松崎
謙堂ノ塾ニ居レリ天保十三年四月水戸ニ遊ヒ會澤正志齋
ヲ師トス其塾ニ寓レ年ヲ踰ユ遂ニ常總奥羽二野北越諸州
ニ遊ヒ見聞錄若干卷ヲ作り國老ニ呈出セリ其東遊ノ詩ニ
曰ク

東去四千三百里。纔知足跡半區寰。未看日本中央石。遼落
山川西向還。

量弘學承クル所ナレ少シテ陸王ノ書ヲ見テ之ヲ悅ヒ篤ク
良知ノ說ヲ信セリ乃チ松崎氏ノ門ニ入り復古ノ論ヲ聞キ

稍學ヲ所ニ疑ヒアリ既ニシテ會澤氏ニ從ヒ水府ノ諸名士ト遊ヒ講習歲餘學益々進ミ宋明諸儒ノ說且國儒ノ書窺ハサルナレ拘泥ノ見ヲ去リテ活潑ノ用ヲ求ム融會貫通能ク其衷ヲ折リ躬行心得レテ以テ邦家ニ施ステ期ス又々典章ノ學ヲ好ミ三代漢唐ノ制ヨリ皇朝律令格式ノ類ニ至ルマテ略其源ヲ窮ム士浦人長島祐卿ニ從ヒ田制ヲ講明ス頗ル得ル所アリ其水戸ヲ去ルヤ遠慮論一篇ヲ草シ諸友ニ與ヘ其藤田東湖ニ留別ノ詩一片丹心不言盡ノ句アリ蓋シ水戸ノ學術進取ノ氣勝テ持養ノ術疏ナルヲ諷セシモノナランカ義源公ノ世子タル量弘ヲレテ肥前秋月等諸藩ノ良法美俗ヲ輯録シテ報呈セシム公ノ襲封ニ及ンテ量弘ヲ納戸役格ニ進メ藩祖ノ舊典ヲ編輯セシム丙午春舊典編輯成ル十

八卷ヲ奉呈ス量弘值遇ニ感激シ納戸役今井義敬侍讀野崎教景ト夙夜公側ニ在リ大小事務知テ言ハサルユトナシ弘化二年夏公封ニ就ク是ヨリ先キ公病アリ途中劇ヲ加フ國ニ至リ未タ瘳エス而レテ治テ圖ルノ意益々銳ナリ乃テ量弘教景ニ命シ語言ヲ出納セシム老臣參政陳スル所アレハ亦タ二人ニ因リ之ヲ白ス號令辭命其手ヲ經タリ量弘既ニ深ク公ニ獲ラレ銳意輔翼其蘊蓄スル所ヲ展布セントス公モ亦タ待ツニ腹心ヲ以テス方ニ大ニ之レテ用ヒント欲ス然レモ文學ヨリ起リ遽カニ喉舌ノ地ニ據ル俗吏庸人或ハ陰ニ之ヲ忌ミ儒生負氣自好者亦タ頗ル異議アリ量弘已レカ故ヲ以テ公德ヲ累ステ恐レ要路ニ居ルヲ願ハス公時機ヲ察シ量弘ヲ出シテ先手物頭格郡上奉行トス七月公薨ス

頼成公新ニ立テ未タ幾クバクナラス幕府ヨリ精君夫人婚
 嫁ノ議アリ殿宇ノ新築大禮ノ用途費ス所鉅万國財殆ント支
 へ難ニ參政馬淵直道江戸藩邸ニ居リ首トレテ其事ニ任ス
 拮据甚タ勤ム諸老臣相議シ更ニ量弘ヲレテ江戸ニ趣カシ
 ム四年三月量弘江戸ニ至ル四月遂ニ側物頭ニ轉シ參政ニ
 任ス初メ量弘大婚ノ命下ルヲ聞キ深ク財用ノ給セス先公
 ノ遺法或ハ壞レシヲ懼レ日夜憂慮ス嘉永三年六月十四
 日政府ニ坐ス適馬淵直道老臣局ニ就キ有馬知一ト事ヲ議
 ス量弘其後ヨリ直ニ刀ヲ以テ直道ノ背ヲ刺ス直道驚キ伏
 ス知一量弘ヲ捉フ有馬主膳之レヲ刺殺ス年三十二澁谷祥
 雲寺ニ葬ル直道ヨリ直道ヲ刺セシ事ハ世人ノ疑ニ付ヲ上申セシニ公他
 出中書齋ニ於テ嘉永二年五月十二日納戸役今井義敬近侍衣笠正己等竊カ
 ニ秘函ヲ開キ閱セルニ其上申書ノ文意大儉ヲ弛メ奢修ヲ導クノ趣意ナリカ

ケレハ二人共ニ密ニ反對シテ同志ノ事ヲ許キ至レテ反對黨ヲ陷憤
 切齒セリ而シテ同志ニ密ニ反對シテ同志ノ事ヲ許キ至レテ反對黨ヲ陷憤
 トシモ要領ヲ得ラレハ必ス以テ極ヒテ國老ニ命セラルハ至レテ反對黨ヲ陷憤
 破始一衣笠正己等ハ以テ嫌疑ヲ以テ憤懣憂愁ノ餘變儀ニ大疑獄ヲ醸サント思按スル
 直道ノ爲人學識ナキモ性磊落剛毅有爲先公資ヲ抱キ先公願命ノ趣旨ヲ遵奉
 サルヲ以テ時勢ニ應シ對公ノ時ニ奉呈セルト見エタリ其跡ヲ見レハ君意ヲ達
 ルヲ以テ時勢ニ應シ對公ノ時ニ奉呈セルト見エタリ其跡ヲ見レハ君意ヲ達
 迎スル等悉ク士精ノ手ニ成リ中興ノ事業漸ク先公股肱ノ際ニ至リテ其改革
 ノ草案等悉ク士精ノ手ニ成リ中興ノ事業漸ク先公股肱ノ際ニ至リテ其改革
 公ニハ損館セラモ士精等志ニテハ一痛悲歎ノ情ニシテ先公ノ遺志ヲ繼封セラ
 ルニ及ンテ念ハ晝夜寝食ヲ安シテ終始變セザル所ナリ言然ルニ直道ノ舉
 シ任ヲ盡サントハ晝夜寝食ヲ安シテ終始變セザル所ナリ言然ルニ直道ノ舉
 ノ如ク此ニシテ熱心ト雖心トハ終始變セザル所ナリ言然ルニ直道ノ舉
 固ヨリ訓トステベカラスト雖心トハ終始變セザル所ナリ言然ルニ直道ノ舉
 埋没スヘアカラ著書復古論革弊論海防治標法語叢書七十五卷
 サルモノアカラ著書復古論革弊論海防治標法語叢書七十五卷
 詩文遺稿等アリ會澤氏深ク量弘ヲ信シ書牘往復國事ヲ論
 セラレタリ土浦ノ大久保要及ヒ船橋亘等トモ往復ノ書翰

數篇アリ

野史氏曰野崎子高ノ士精傳ハ恐クハ爲メニスルアリテ
書セシモノナランカ紀傳ノ体裁ヲ失ヘリ余往年江戸ニ
在リシ時北精變死ノ事ヲ論シ今井堯夫ニ與フル書ノ略
ニ曰獨以其死爲非徒死者當國家多事先公之遺緒將墮之
際士精職在下流陰贊默助爲其難爲行其難行然先輩大臣
漠然不爲意不盡將順匡救之力陽爲諛々之言陰有諂諛之
事是士精憤惋激怒遂至如此者其事固雖不可爲訓推其心
有不可止者是僕所以與他人之喪心轉倒錯亂妄殘害傍人
者不同日而論也且僕深疑而不可解者野崎子高著士精傳
曰可以君臣之公義滅朋友之私情夫五倫之道父子之親君
臣之義夫婦之別長幼之序朋友之信人道之大者也可以輕

重前後論而不可以公義私情論子高之於士精朋友也其於
國家君臣也士精之死非殺身爲仁者國家亦非清明資治之
時其事之是非得失蓋有難辨明者矣然則爲子高者不辨之
而可也天下當有公論矣不辨之所以深辨之也然子高欲強
辨明之者後世將疑其諛與諂矣是僕深疑不可解者也云々、
又曰士精ノ死固ヨリ身ヲ殺シ仁ヲ成ス者ニ非ス然レモ
此ノ時ニ當リ嗣君年少壯ニシテ幕府婚媾ノ議アリ幕府
婚媾ノ爲メニハ藝長ノ大國ト雖モ往々疲弊ニ陷レリ況
ンヤ我小藩ニ於テチヤ士精ハ其疲弊如何アラント深ク
焦慮苦惱レ其ノ四年前出京ノ際意見書ヲ奉リ且ツ出京
途中ニテ筆記セシ詩文等ニテモ決死セシコトハ見エタ
リ今國家累卵ノ危生民塗炭ノ患ヲ免レ先公ノ遺法ヲ永

遠ニ維持スルモノハ大臣ノ協力同心如何ニアルノミ然
 ルニ同僚大臣ニテハ反テ密ニ諂諛逢迎先公ノ遺法殆ソ
 ト地ニ墜ントスルノ機アリ其變死十日前六月六日便藩ノ國老
 中へ與へシ書牘ニテモ鍵紛失ノ一件ヨリ君臣嫌疑アリ
 テ朋黨ノ禍ヲ胚胎スルヲ憂へ漢ノ巫蠱明ノ妖書挺擊二
 獄ノ禍ニ比シテ書載アリ憤懣憂鬱一死以テ國ニ報シ君
 相ヲ醒覺セシムルモノ如此カ然リ而シテ爾來君相警惕
 戒懼先公ノ遺法永ク地ニ墜テサルモノ士精決死ノ功與
 リテ力アリト稱スベシ噫
 又曰横井小楠ノ藤田東湖ニ與フル書ニ曰ク久留米村上
 守太郎一件眞ニ悲痛ノ至ニ奉存候捨身刺姦或ハ過タリ
 ト雖必竟是赤心報國可敬可仰爲同藩モノ其志ヲ繼キ是

非共君ノ非心ヲ正レ先公ノ御遺志ヲ奉達ヘキ事ニ候處
 國論顛倒大抵村上ヲ非付致レ甚敷ハ喪心人ノ様ニ唱候
 由ニ承リ申候叔々無是非次第ナカラ憤怒ニ堪申サス小
 生ハ村上ハ知音ニテハ無御座候得共其人物追々承リ去
 年書狀遣ハレ通問仕且御歸郷後他所御取遣モ不苦候様
 承リ申候間村上ニ相頼一封差出申候處無程變事出來心
 事達不申別テ感歎千万ニ奉存候志士一人ノ喪亡ハ實ニ
 天下義降カケ候様ノ心地仕可惜ノ至ニ御座候其列國見
 聞書中久留米ノ部ニ曰ク村上守太郎事處々ニテ承リ申
 候處此人爲人敏捷ニハ有之候得共本心紫肝ニテ陰嶮ナ
 ル生質ニテ御座候由筑後守様御逝去後本相ヲ顯シ殊ノ
 外我身勝手ニ相成リ一切同志ノ切磋ヲ用ヒ不申此前下

國致レ候節木村三郎眞木和泉守列四五輩嚴敷及苦口候處目前ニテハ程能申置退テ他人ニ對レ右ノ面々ヲ誹謗仕候此事相顯候間木村列最早是切ニ存レ其次第ヲ以テ及義絶是ヨリ書問ノ取遣モ不仕候處大變ニ相成申候馬淵貢事ハ差テ學問ノ力ハ無之候得共生質剛直者ニテ身ヲ以國ニ許ス心ハ一藩中ニモ推レ許サレ既ニ筑後守様願命ノ一人ニテ御座候右貢平生守太郎ノ心底ヲ能々見拔居候間兼テ貢ヲ憚リ心苦敷存居候ヨリ何様論談ノ末及刃傷候モノト相聞候右論談ハ馬淵節儉ヲ弛候主意ニテ不得止勢ニ相成及刃傷候ト初發ハ一旦相唱候得共決レテ左様ニハ無之必竟守太郎一身ノ私ヨリ及大變候者ニテ其跡聊差障ノ儀無御座候野崎平八モ村上同腹ニテ

我身甚敷御座候間木村列ヨリ村上一同ニ義絶仕候國論ハ裏ハラ成ルモノニテ一概ニハ受取レ不申何分外ニ宜申人ハ無御座候其外様々承リ候得共總テ誹謗ノ事共ニテ略仕候

小楠ハ天下ノ英傑ナリ然レモ其書牘ト見聞書ト前後相反シ其見聞書ノ論スル所奇怪謬妄悉ク事實ヲ失エリ小楠ハ士精ニハ一面ノ識ナク其死歿後我藩ニ來リ應對面接セシ者ハ皆士精ノ反對黨ナリ其論スル處欺罔纒誣眞僞顛倒セリ然ルニ余カ友西村希陶ハ小楠ノ弟子ニシテ朝夕小楠ニ親炙セシモノナリ其小楠ノ門ニ入リシハ小楠我藩ニ來リシ後ノ事ナリ往年余カ爲メニ小楠ノ士精ヲ論スルヲ説ク詳カナリ曰僕小楠先師ノ門ニ在リシ時

先師ヨリ村上ノ事ハ時々聽聞セリ村上ノ人物始メハ欽慕セシニ貴藩ニ遊ヒ諸子ニ應接セシニ悉ク村上ヲ毀ルヲ以テ一旦ハ疑惑セシモ今日反對黨ノ改革ヲ圖リシ舉動ヲ以テ考レハ先キノ村上ヲ誹毀セシモノハ悉ク黨派論ヨリ出シ私論ニテ公論ニ非ス村上ノ一死晴天白日其報國ノ志一國ノ爲メノミナラス天下ヲ聳動スルニ足レリトソ余此ノ言ヲ聞キ始メテ疑念氷解セリ此ノ見聞書ハ一時反對黨譏誣ノ言ニレテ小楠豈ニ終身偏聽ニ陰蔽セラル、モノナランヤ記シテ後人此等ノ書ヲ閱シ疑惑ヲ抱クモノ、爲メニ辨明スルコト如此

謹て申上候貳ヶ條

上の在方御出の節組村失費御供衆の賄の事
御郡中より願出の受締の事

先公御仁徳の御趣意被仰出一國中民心感戴仕氣前格別引立居候處當公御繼立被遊御様子如何と御國民相伺罷在候儀お候得り御行事の是非得失に因て民心の向背氣前の引立候乎折る乎瞬息の間に分れ可申誠以御大切の御時節と奉存候萬一小事にても先公の御代に無之して當公の御代に至り下民の難儀に相成候儀有之候得り民心渙散氣前相折け可申可畏事に御座候勿論當公之御美意萬事先公の御趣意を被爲奉諸大臣御忠誠を以御夾輔被爲在候儀に候得り御政務大体に於て先公の御在世に少も不異御儀と奉存候得共在方に掛り候小事萬々一君相御思慮の所不及にして上の君徳に係り下の民心に係り候儀可有之と愚陋の過慮仕候儀に御座候尤御入國の上の御儀にて御座候得共前以御議定お相成居可申候儀と奉存候付此節奉申上候其事の上の在方御出の節に組村々失費並御供衆の賄在方より差出候儀お御座候大良公御代御野出御雜用並御供衆賄等在方別割賦お相成年々別段お申出承届候由御中年の頃御鷹野繁々被爲在候節の在方の失費隨て相増大造の高に及候由餘り相増候に付右御入費上よりも御渡に相成候御定も有之哉お候得共先づ下より差出候由暫は右御鷹野お付ての割賦高貳百貫目にも及候由後

被相減五拾貫目よて相濟候様御定有之由候得共夫にて相濟兼別
 段方に承届候伺面右高候得共内實の倍まるに至候由御野出御供衆
 の賄の儀御臺所より仕出し取計も有之哉の由に候得共在賄相成上
 に御恤民の思召有之候ても御供衆末々至候ての間々心得違御威光
 を假り下とおとし酒食豊満無之候得の難題を申掛け候様の儀有之候
 お付大庄屋村役人共相恐供給を盛にし古人所云師行而糧食勞者弗息胎
 々胥讒民乃作惡方命虐民飲食如流と申又宿州行威福官吏所過鶏犬と申
 様弊も有之由且右御供衆の賄差出相濟候後村役人共右御用に假託し私
 に飲食を放ふする事甚敷候由上の御身の儀に無之して御供衆の爲御
 供衆の儀而已に無之して村役人私の飲食の爲大切成御國民の膏血を涸
 らし候の可悲事に御座候前文武百貫目の割高ふも及候得の在方衰弊候
 も宜也と奉存候公の御末年に至り御恤民の思召を以御野出御度敷も
 格別被爲減先公其後を被爲承御仁澤一國に相被り民力次第に蘇息に
 打向ひ候又御病氣の故を以御野出等曾て無御座候當公御入國の上御
 大儉御年限中の儀御鷹野の御有無等は奉存候得共孰れ在方御出は可
 被爲在儀と奉恐察候万一其節に至り在方失費相應組村割賦筋相増且又

御供勢多き内に下の難儀を不思者有之隨て前日の弊習復發し候得は
 則所謂先公御代に無之して當公御代に至下の難儀に相成候筋にて
 民心の向背氣前の引立候と折け候とは是等の處より分れ可申と奉存候
 儀に御座候惣て廻在の諸役人並供の下々等心得方不宜下の爲に不相成
 有之候ても下民怨謗致し外類の畏る内心に悔り申候上の御身の廻御
 召連の御供に右様の儀御座候得此節の儀在方一統失望解体にも至可
 申候且又先公の御趣意を以廻在諸役人も格別相慎在方よりの仕向
 も追々質素に相成音物賄賂相止候も上の御廉直御仁儉に被爲在故に御
 座候是迄廻在諸役人の心得方賄賂の御禁止等毎々御戒令有之候得共兎
 角繕り衆候の他の故ふ有御坐間敷畢竟上の御供廻等より不慎の儀有
 之故と奉存候先公の御代に右様の儀少も無之故漸々に相繕り居候處
 此後上の御身近に右様の儀有之候て諸役人の放逸私曲有之候ても
 何を以禁可申哉千丈の堤の蟻穴より壞る、と申如く一國に引渡候御殿
 密の御趣意或は是等の儀より壞れ可申と甚以所可慮に御坐候私を以勘
 考仕候所は御出先御用御供衆賄等先つ上よりの御仕出にて在方失費
 不相掛候様御規格可被相立儀と奉存候私儀先公御座に被爲在候内御

小性相勤罷在高輪御下屋敷御供相勤候に江戸にての儀に候得り勿論御
臺所よりの御仕出ふて私体御供の面々への切飯と申物に相添益に盛候て
賜り候其砌 大良公御供衆賄方の儀委細儀に難申上候得共勿論江戸に
ての儀に候得り全く 上より御仕出しに御座候全体江戸にては 上よ
り御仕出御國の御領中なれば逆下に被相懸且又 上よりの御仕出は儉
薄を被用下よりの賄には豊備を求候儀君子待下仁恕之道に無之と奉存
候先公御家督被遊候上月一度つ、歎高輪御下屋敷へ被爲入候私儀御供
相勤候儀の無御座候得共御下屋敷ふての御都合誠お御儉薄ふて御供衆
茶賜り候迄にて御酒宴等の曾て無御坐由御入國以來の御病中而已にて
在方御出に被施候御事實不得奉伺候得共其御蒞著の思召の乍恐被奉推
測候儀有之其事の去る丑年 御名代御在國中御野出ふて五郎九大庄屋
へ被爲入候節の御供衆への供給等甚豊備に有之候ふ付必竟御緩々御休
被遊候に付ケ様の弊も有之との御儀にて其後ハ御緩々御休等不被遊候由
承り候是其思召有て未だ御願し不被遊時の御事に御座候昨年御入國御
道中水口細工之辨當を多く御求めにて爲御持被遊右は御野出の節御供
の面々へ用ひさせられ候思召の旨嘗て御近臣へ御意被遊候由是等の御

儀を以見候への必思召被爲在候哉と奉恐察候儀に御座候當公御部屋住
の内且御家督被遊候ても御在府中御出先きの儀ハ前文の通 上より御
仕出と奉存候然ハ此上御國ふての御出先の儀も大要右御在府中同様
上よりの御仕出ふて可然哉と奉存候尤在方御道筋御休所等掃除の儀ハ
江戸内の儀と事体不同に付在方よりの人夫にて爲仕可然哉御出先へ御
一宿之儀は 大良公御代にも先は無御座儀にて此後被爲在間敷候得共
遠方御出等にて御臺所よりの仕出と申候ては些少の御失費は相立可申
江戸内にての便利成様には有御座間敷候得共右些少の御失費を以一國
民心向背ふり易へ難き儀と奉存候

付紙

當時御國用大切之御時節に候得共御野出御入費 上より御仕出に相
成候とて何ぞ御國用に關係仕候程の儀は決て無之と奉存候御勝手方
相勤候衆孰れも 御遺志と伺居候人に候得者此儀異論無之ハ勿論御
評議の赴候への隨て善き所置の方も出來可申候惣て其等の儀 上よ
りの御仕出に候得り些少にて相濟候も在方より差出と相成候へと其
中間ハ弊生を候て莫大之失費に相成ものと奉存候

右の大意を論之候儀に有之候猶御明慮御熟議の上委細御詮議に相成御
出先御雜用御供衆賄等嚴密御規格被相立候様奉存候右の通御出先の儀
ハ上よりの御仕出にて下へ難儀不被相掛候得ハ他事を假に不及即此
事を以 當公 先公の御趣意を被爲繼候御實事相顯れ唯民心渙散氣前
相折け候患無之のみならず是迄になき處の御仁術御美事あて彌此心の
感戴氣前の引立を相増可申候且 上の御野出も御雜用御仕出ハ相成御
身近の御供衆あても在方へ迷惑を掛け候儀不相成候得ハ廻在の諸役人
並小役人に至迄不令して畏れ慎可申敢て在方へ迷惑を掛或ハ賄賂音物
を受候者有之間敷候万一心得違の者有之候共上の御身近の所前文の通
あして後賤賤有之候ても人心眞實に畏服可仕候然ハ此事にて屹度一体
の御趣意を維持せる一宏綱ハ相成申候此節右之通被相定永久之御法に
も成候ハ長く御家におゐて 君上の御遊豫を以民怨を招き民力を疲ら
し候弊無之國家無窮の福と奉存候此事利害只兩裁に有之其宜を得候へ
ハ民心の感戴氣前の引立を相増候而已に無之一体の御趣意を維持せる
に足り永久の福とも可相成候其宜を失候得ハ民心渙散氣前相折け候而
己に無之一休ハ御趣意を破壊し無窮の害を胎し可申候此一事を以民心

を固結奮起せしめ御趣意を維持せる事に候得ハ今日賢相國家の爲御忠
誠被成候に不可失之一機會と奉存候此儀被相定候に大小の臣先公の御
趣意伺居候人ハ必異論有之間敷異論をなし候迎其辭も有間敷候得共萬
一異論を唱諸役人の廻在にてさへ在賄に候得ハ 上の御出且御供衆に
付ての入費在方より可差出と申者も可有之敷是忠臣循吏の言に無之
先公の御遺意に不相叶と奉存候諸役人の廻在ハ皆在方の事に係りて勤
筋あて罷越候故在賄の筈に御座候夫あてさへ度敷多く成候得ハ 上よ
り被相渡候儀 大良公御代にも有之候在方の事不相掛諸役人の在賄に
て無之皆 上より被相渡來候 上の御野出ハ公事に無之御慰の事故
大良公御代にも 上より御渡の御事も有之唯々 上よりの御仕立に不
相成分ハ下情不上達之故にて夫あ依てこそ前文許多の弊ハ生し候然る
に廻在の諸役人の在賄に有之を引立て 上の御出御用御供賄在方より
可仕と申ハ不當の曲説と奉存候殊に在方より仕候儀 上の御身に掛り
候儀ハ先つ無之重もハ御供衆の事に候得ハ不待論儀と奉存候昔 瓊林
院様御代御庭野の節御供衆泊り候屋家の租賦を被免候様 御印書の寫
奉拜見候儀に御座候其頃の御事休詳ハ不相分其事ハ今日の宜にハ不相

叶哉と奉存候得共其民力を被重候の意可法事に御座候 慈源院様上妻
山中御出の節道作軽く仕候様被仰付候處人夫多く使候ふ付御沙汰の趣
は近年民力窮候ふ付 御城御普請さへ被差延置候處御自身の御國廻り
み民力を勞候段不堪の御咎よて大庄屋逼塞御郡奉行遠慮被仰付候是
上の御野出を以公事に比せられざる 祖宗の美意後世の法則と奉存候
付右在方御出に付ての御入費等前文の通御定有御座度奉存候此事の關
係如斯に候を存付候て不申上候ての不相濟と奉存候に付不願狂妄此段
奉申上候執事の御賢明を以宜御裁斷被爲在度様偏に奉仰望候
一右に類し候儀小事に候得共 上の御行事の得失に相係り夫に因て民心
の向背ふも係り候儀有之と奉存候付左に奉申上候其事の皆惣郡大庄屋
より受締願出申候緒方の儀の御郡奉行加役にて且御目付中より相預り
私共司り申儀無之候得共右之關係有之候に付申上候儀に御座候一休人
君の民心を失ひ國力を弊し候本の物欲の好に在て物欲の好多き由禽荒
を以尤古今の通患と存候經史の所載不可枚舉候賢君之仁政の澤梁無禁
と申又不敢盤于遊田と申又苑圃無增益有不便輒弛以利民とも有之候暗
君之稅政の遺宮園以爲汗池民無所安息棄田以爲園圃使民不得衣食園圃

汗池沛澤多而禽獸至と申又方四十里爲阱于國中民以爲大とも有之候然
の君徳の明暗民政の得失多くの此所より分れ申候 御當家の儀も以前
締方に付在方の失費多有之候所因て天明の比より受締に相成居候處
大良公御代御鷹野御好被遊候より受締相分川澤は一切 上の御私物も
相成一旦御野出繁敷時分の夫に付て上下の失費莫太に至り國家の基本
も關係仕候様も相成且隨て種々の弊も生し候て民間の害に相成候儀
前條の論に御座候 公にも追々御恤民の 思召被爲在候處右の通も至
候の畢竟下情不上達故と奉存候又川澤の禽の禾稼を害候事の中々手
に難及ものも候由夫故鳥追賃とか申候て民間には諸割賦ふれ成居候所
も有之由殊に川澤 上の私物も成候得は鳥雁良由の禾を食候ても手さ
しも出來不申所謂狗彘食人食而不知檢と同意にも至候或の其事に預り
候役人輕きもの等間に心得違御用を假りて私意を逞うし又所謂禽獸の
故を以人を苦しめ候様にも相成候締方の儀御目付中より預り候儀も恐
らくの官職の紀綱を得候儀とは難申是其由來の不奉存候得共もしくは
先 御代川澤を上の私物と罷成候より始り候儀に可有之哉と奉存候右
御代の御末年に被爲至御仁儉を御務被遊御野出等格別に被爲滅 先公

其後を被爲承御恤民の御仁徳一國も顯れ 當公又其後を被爲承候に付
萬民の心相伺罷在候段前條に論候通に御座候御大儉に付御鷹野も不被
召置所にてハ御年限中御鷹野被爲在間敷哉と奉存候得共其後にてモ御
鷹野の故を以民の害に相成候儀萬々一有之候へハ民心の向背も係り
可申甚可畏事に御座候全体大臣の君を被輔の道は其欲生して後諫諍し
て是を止メ候ふハ無之無顯に見無聲に聞其未萌の前に深慮致し其欲を
被生候儀不出來様被成置候に有之と奉存候川澤の禽ハ御家中公共の物
と被成候て 人君御一人得て被爲專候私物に無之と相定候得ハ永々禽
荒の御過失生候道ハ無之候執事の御賢明を以右等の處御熱慮相成此節
惣郡より願出候機會を以御評議に相成天明の故事を被尋御目付の其職
ハ非候事に預り候を被止候て緒方より專々掌り川澤 上の御私物に不
成して御國民と公共にし是を以永々君を無過に致し民を無怨に致し覺
雁の禾稼を荒し候害を除きて彌百姓力作の氣を被引立候ハ誠に國家無
窮の福と奉存候尤右の通に相成と申て永々人君の御遊獵一切被相止候
と申候にてハ無御座候一遊一豫ハ諸侯の道にて鷹野ハ民家の常行に候
御年限中の格別御平常ハ御國中御巡覽御慰等に御遊獵も可被爲在儀と

奉存候受締に被仰付置候とて川澤の禽を一ツも不殘取盡し候物にてハ
無之と奉存候受締に相成居候ても御慰に相成候丈けの御鷹野ハ隨分被
爲出來候儀に奉存候右の通にて御獲の多少に不被抱候てこそ古の所謂
遊獵と中にも可相叶候扱又御國民と公共にせると申て御國中誰もてモ
肆に致獵候を可被免儀ハ勿論決て無御座候孰れ惣郡より願出候通受締
のもの可被相定儀と奉存候尤是迄ハ 上の御私物に相成居候を受締に
被仰付候へハ自然と遊獵筋獵に相成儀可被出來勢に付御郡奉行御目付
中評議も右受締の儀在方耕作の爲ハ宜候得共遊獵の不締りに相成儀
難計との趣に有之候此處ハ猶御詮議ハ相成候様奉存候愚意ハ寶曆十
年二月天明七年八月被仰渡候通御扶持人等ハ勿論御家中たり共御制禁
の地遊獵のものハ其所の村役人百姓より姓名承札申出相隠候もの見送り
且受締のものハ不及申廻達て諸役人も見當り且申出候様嚴敷被仰渡候
ハ右の弊ハ有之間敷奉存候假令小弊有之候とモ前に申候大關係の儀に
ハ難易可有之處其弊を防候儀ハ如何様にも致方可有之と奉存候受締の
もの被相定候上ハ勿論舊法の通馬運上可被仰付儀と奉存候尤 公義御献
上 上の御臺所御用諸方ハの御音物等の大數を被計候て其分現物運上

に被相定其餘は代銀ひて運上被仰付少分ふても右銀の在方の爲と御手
當に被貯置候ても宜敷儀と奉存候全体 先公以來御恤民の思召被仰出
上の御物好無之して専ら下民を被爲惠候御趣意奉承知候故惣郡よりも
右受締の儀願出候と奉存候然るに右願の通被仰付候得は彌上の御趣意
御恤民に有之儀を奉承知氣前も引立可申候若願の通不被仰付候得は上
の御趣意を相疑候て又々此後又先年の様御鷹野等の儀可有之と存候儀
此節の人氣にては難計奉存候殊に此節受締ふ被相定永久の御法ふも成
候は永々御家おおひて 君上の御物好を以民心を失ひ國力を被弊候儀
無之國家無窮の福と奉存候此事の利害亦唯兩截ふ御座候是又一事を以
民心を固結奮起せしめ永久の福とも相成候儀今日賢相不可失の一機會
と奉存候付此段奉申上候宜御裁決被爲在候様奉仰望候
右二ヶ條の儀民心の向背國家の基本に關係仕候と奉存候に付奉申上候
一体今日御政治の大休唯専ら 先公の御趣意を被爲守ふ在て別に増益
をもるを不待儀と奉存候右二ヶ條の如き 先公御病氣に被爲在候て 先
公の御趣意に關係仕候儀に候得の必御裁定可有之儀と奉存候今日君相
の御當務只 先公の御趣意被爲守候儀其大本ふ候得共事に因り偶 先

公の御處置を經不申事ふ被當候ては御裁斷の其宜と得て彌其 御遺志
を被爲守候御儀誠實顯れ候程に有之候てこそ人心にも徹し可申と奉存
候 當公萬事 先公の御趣意を被爲奉執政方並參政の人々孰れも御趣
意を被相伺居候儀に候得の右二ヶ條の儀執事より御唱被成候の必異論
の有之間敷と奉存候明者の事を行ふ時に乘するを貴ひ申候 今君上新
に御繼立執政參政 先公の御趣意を遵守の意功に有之時を以一たび此
事を被定置候の誠に永久の福と相成御國中萬民長く執政の賜ものを受
可申候且 先公の御趣意必増益するを不待と奉存候得共其御趣意を維
持するの術の必可被相盡儀と奉存候在方の利害得失論候の彼是可有御座
候得共 先公の御躬化の通 君上の御身に本つき不申候ての徳より出
る政には無御座と奉存候今日在方の儀先づ大小の所より被相止候て其
他御趣意を維持するの具も得て施可申儀と奉存候愚意御照覽奉願候以
上

十二日

村上景弘謹上

豊水大夫下執事

別啓弊邑の儀追々御承知の通去夏以來の次第臣民一同誠お懼懼戰栗仕候處仲冬に至り先々少しく致安堵候乍去新君幼冲の故を以て支封三候政事を接行の儀今以て同様に有之老公の冤も雪候様には候得共一層の雲霧未霽盡候段闔郷憂黒不替候一休弊邑と事情の御遊寓中兼々御熱視被成候通天下の爲に忠誠を被盡候赤心より被發候儀にて縦令一二の過舉等有之候得共心緒曖昧なる儀の誓天地而毫釐も無之候段親しく御目撃の事お候得の固より辨論を不待候然處不圖も如此の變を生候次第何故と申儀不相分候得共寺社の儀に付蓋正被成候儀杯を付徒致怨望浮説流言等申觸候よりして禍變を生候様申者も有之實に左様の次第に候哉否不可知候得共此外に禍根に可相成事不相見候様被存候寺社蓋正の儀も世俗にて如何批評有之候哉不存候得共一昨年於營中庶政行届候旨御褒美被爲在候節義源殿遺志を被繼候様御直お被蒙 台命候故を以義公の遺志繼述推廣被致天下の爲に人心の惑を闢候の 公邊への忠節と被存候儀おて禍端と相成候筈も無之候得共衆口銜金の勢おて如此相成候哉と士民となく吞恨痛哭不安寢食候得共老公小心翼々戒懼修省

被致萬一國中動搖之儀も有之候ての奉對 公邊不相濟候段精々被申含候故士大夫の憤と抑へ忍居候得共庶民迎も右之如く老公憂慮被致候を傷候に不忍鎮靜之令に従ひ居候事には候得共衆庶之儀にて忍兼候者も有之衆人中より一兩人を推て總代と申出府哀訴等致候者も有之微賤之身にて耕耨を輟め産と敗り妻子を不顧身と抛候有様誠に不忍見候事共に御座候其上政事向之儀庶流より後見と申儀三藩お是迄例も無之此度初て簡様之儀出來雲霧未霽候ての民心所詮治り不申萬一騷擾之様にも聞へ候ての此上之禍も難計寒心之事に御座候然處貴藩之御儀の此節明君御戮封維新之御政四方拭目候事お御座候所幸お笠間侯への御姻屬に被爲在候處長岡侯も笠間と御同宗お御座候得の我納言公最初より赤心を以天下之爲忠力を被盡候處一層之雲霧未霽臣民悲歎之次第等何卒折を以長岡侯杯へ貴藩より被仰通被下候儀の相成間敷哉足下御事も此節風議之任に御當り被成候由之處幸に老夫儀乍不及束脩之儀を忝致候事お候得は右之段御深思被下候様千萬御託申度く至囑此事に御座候此上支封より接行相止老公にの既に退隱被致候上の庶政聰斷之儀固より被厭候事お候得共有司おて難決候儀杯事により添心被致候儀も不苦候様

相成候得の上下安堵國中靜謐に可相成と至願不過之候委細之儀は筆紙に難盡候間猶又杉復堂より口語にて御詫申等に候間宜敷御承知之上可然御周旋被下候様奉願候多年之交誼此節と存候間無伏藏得御意候事御座候區々之至情御究察可被下候以上

二月廿四日

安拜

村上秀才 足下

別啓弊邑之儀前書に相認候越委細御承知復堂口語も御聴被下候儀と遙察仕候其節も得貴意候通納言公心緒清明之段の御遊寓中御熟知之通り一點之疑いも無之筈に候處前書之通り僧徒之浮説且庸人俗吏等の奢情と去て勤儉に就候事固より悦不申退隱罷職等之者も冒嫉之意より流言飛語致搆成候者も有之猶又間牒等入込候ても國惡を探索候には大抵姦民共と致譖誘候事と相見候得の誹謗之語のみ致信用候勢旁にて眞之情實の隠れ謗張爲幻候事抔致上通候哉と被存候十六ヶ年來天下之爲精忠を被盡親薄之儀に候得の幕府之御爲に可相成儀と被存候儀は嫌疑と不避存分ふ可被取行との至誠の天地鬼神も照覽可有之候處中には却て忌諱に觸候事も有之哉難計候得共嚴謹之旨深く被相愼候故を以御有免

被仰出臣民一同致扑腹候事に御座候依ては國政之儀も老公一己之意にて被致候儀は不被用候儀御指圖も御座候得の左様之儀幾重も被致候事ふ可有之候所其内公邊伺濟にて被取行候儀の一己之意とも申にも有之間敷既に一昨年御褒賞をも被蒙候程に候得の其儀迄も一切改可申との儀にも無之哉と奉存候東照宮御祭儀も一休當地之儀の威義而公神儒之道を尊崇被致廟祭等も佛事を不雜候風化年久敷被行候て士民共に神儒を致崇敬候故東照宮も神道御祭式の士民之崇敬彌増候様可相成との儀且東照宮久能山へ御葬送之節も神道御用被遊當時も船橋の神道之御祭式之趣に候右等之故と以て神道に被致一等手重も相成候趣承及候處此儀も役人評議之上此節復舊も相成候瓜連村常福寺之儀最初の瓜連村一ヶ所に候處原齋殿之節向山村へ別に建立一寺兩所に相成候處源義殿代之通り瓜連村一ヶ所に復し稻木村久昌寺之儀の源義殿所生谷氏之爲めに建立被致候處源武殿之節谷氏をも源威殿之廟に配享に相成以前より手重之扱に相成候間久昌寺の廢候て可然候處二ヶ寺共新築に候得共此度は迄之通居既に相成如右筋道相分候事をも盡く本之儘に被致候程も候得の此上公邊より御沙汰等有之候御次第も無之

哉と奉存候扱又此外政績士民致成候儀不少候處此節之姿も候間此上如何程變革も可相成哉難測少將殿孝心に於ても不安事に候間士民致憂懼國中治り不申候是等之事情委細復堂より御面話申候事と奉存候得共前書未及此候間大意得御意候何卒右之意味御合御周旋之儀至願此事に御座候言不盡心事御熱思可被下候以上

御一覽後御投火可被下候

二月二十九日

安拜

村上秀才 足下

三白一昨年民間喪祭之法申介有之候所此節付徒より彼是と妨候様子に御座候當地之儀は源義殿以來喪祭之禮都て儒法被用候は御承知之通り候處諸士之喪祭も喪祭儀略と申書施行被致年久敷儒法用來候事は又御承知と奉存候佛寺之儀は寺院多く候てハ渡世難成無智無下之愚僧法外之營仕民を迷し國之費風俗の害と成との儀にて二千餘區被廢又僧徒之貪欲無道ハ非佛法との儀にて施物之員數をも被定候所近來僧徒之風儀甚相亂破戒濫行風俗を傷候ハ勿論貪欲無厭之僧徒喪家之愁傷をも不願様々難題申掛施物を賣り平日迎も勸化儀之儀種々申懸ケ承知不致候

ハ怨を合喪など有之時恥辱を與へ候間不得已其請ふ從ひ候類もて貧民致難儀候所一昨年源義殿遺志被繼候様御直に台命を被蒙候付愈右之遺志に本き不如法の僧徒追放等被申付此末修葺等届兼候寺々ハ疊置候様相成喪祭の禮ハ儒法久敷行れ來候事故庶人もても願候者ハ許候様相成全く源義殿遺志と被繼候ハ即台命を遵奉被致候儀も有之且儒法相用候者迎も夫々菩提寺有之年々付届等も致し公邊御制度ハ觸候儀ハ無之只諸士の風を庶人迄も及候迄の事ハ候所僧徒ハ何か讒訴等致候由ハ候間世間ハ如何聞へ居候哉萬一行違候事杯御聞及被成候ハ右の意味御合置被下候様致度存候右喪祭の儀只今もてハ大ハ民心ハ染み込致悦服居候間此上變革も相成候ハ民心動搖難計苦心仕候前書も得御意候通りの交誼も有之候間無伏藏布腹心候御讀過早速御丙丁可被下候以上

二月二十九日

安拜

村上秀才 足下

先日復堂迄一書相附候所復堂へも御越被下候趣申來猶又此度委細貴書の趣千萬奉成謝候猶又御別紙ハ委曲被仰下候趣縷々詳盡毎々御厚意の

段不知所謝候實不貴地へ罷出候事も相成候へり處々奔走四方俊豪の○
○をも求候儀の可有之候所御承知の通此節南上等被禁候事おて窮郷の
僻在仕固より井蛙の見四方の事情お聞く只々餓狗の食と求候如く理勢
の見分も無之癡情陳説御心配相懸候段不勝汗面候仕合奉存候畢竟闔境
の動搖悲酸不忍見候故之儀何分御諒恕可被下候御別紙おも被仰下閣老
衆への御姻戚お被爲在候ても從容御參會も無御座由左様の御儀おてり
御寛頼の御談話被遊兼候の勿論の御儀お御座候間全く田舎翁の愚言不
足取事に御座候尤愚意迎も閣老の故を被仰立候相願儀に無之御姻戚
に被成御座故を以奉願度と奉存候所右の御譯に御座候てり有害而已無
益無御心置御放念可被下候是迄相認候處只今發書不致候てり刻限と失
ひ候間草々閣華万期後信候以上

四月廿四日

安拜

村上秀才 足下

尙々御別紙被仰下候上中策の儀至當の御論敬服仕候紀公の儀の随分
手を盡し大抵事情も通し候様奉存候宍戸の白石又右衛門の説先入と
相成居少々六ヶ敷奉存候尤白石北歸に相成候間此上何とか納約も出

野崎教景

來可申のとも奉存候猶又投藥の方君而不在相の儀當局にて分り兼
候事も有之旁觀の言服應可仕奉存候草率書不盡言

野崎教景平八ト稱シ子高ト字シ習堂ト號ス江戸赤羽久留
米藩邸ノ人ナリ爲人剛毅直諒事ヲ謀ル正ニシテ迂ナラス
斷シテ空カラス其人ニ接スル矜飾ヲ喜ハス常ニ曰ク士ハ
燕居獨處ノ時ト雖モ中心愧ツルコト無ルヘシ故ニ其ノ行
事表裏一致親戚故舊コレヲ稱ス義源公ノ世子タルヤ常ニ
經筵ニ侍ス公甚コレヲ親信ス教景モ亦タ心ヲ盡シ獻替ス
公苟モ過テ有レハ必スコレヲ諫ム直切周到盡サレコト
ナシ公襲封銳意治ヲ圖ル教景乃チ上書八策ヲ獻ス公深ク
コレヲ納ル村上量弘ト待ツニ腹心ヲ以テス凡ソ變革スル
所二人隱讃シテ默助ス是ノ時ニ當リ庶政悉ク張り一藩大

ニ振フ二人既ニ遽カニ要地ニ居レリ因テ内外異議アリ是
ニ於テ二人君側ヲ去ルヲ請フ公已ムヲ得スコレニ從フ蓋
シ待ツ所アリト云フ未タ幾ハクナラス公薨ス對鷗公繼立
首トシテ教景ヲ側物頭格ニ進メ輔導職トス後々量弘ノ事
ニ坐シ幽囚殆ント一年然レモ胸中泰然日ニ經書ヲ誦ス時
アリテ吟哦ス嘉永五年九月二日病沒ス享年三十六麻布谷
街善學寺ニ葬ル幼ヨリ學ヲ好ミ弱冠昌平覺ニ入り又々松
崎謙堂ニ從學ス刻苦勉勵晝夜講誦ス經史百家研究セサル
モノナシ好シテ文章ヲ作ル雄渾ニシテ確實ナリ筆ヲ下セ
ハ立ロニ成ル常ニ心ヲ實踐ニ存ス晚ニシテ得ル所益深シ
著書三十卷アリ往事ヲ追思シ感泣ノ餘先君ノ嘉言善行ヲ
編述シテ感泣淚餘ト云ニ卷アリ

上豐水有馬執政書

私共淺學非材の者にて不計も非常の御恩眷と蒙り格別親密の地に被召
仕重疊難有仕合唯々日夜盡心竭力仕御厚恩の萬一をも奉報度心掛候外
無他事御座候然所近頃之勢と熟察仕候に誠に國家の御爲不輕次第に奉
存候儀有之種々心胸を苦しめ何方へ可申上と奉存候處竊に惟に執事
碩學賢明の御身且御當家に於て格別の御家柄殊に當時上にも別段御信
任被爲在柱石とも被相成候御儀に付孰れも此度の儀執事迄奉申上候外
無御座と存定候に付私共胸中有之儘左に奉申上候間狂愚狹隘とも可被
思召候得共何卒篤と御熟覽の上國家の爲め長大深遠の御思慮被有御座
候様にと奉存候抑去々辰年 太守様於江戸表御家督被遊早速私共兩人
共御側近相勤候様被仰付日夜讀書御討論不及申和漢古今の治亂得失
等御咄の御相手仕尤守太郎儀の其節より當御役被仰付候に付其御用も
有之候扱其頃より 上にも追々御勵精にて御政事向御聽斷被遊日々御
用席へ被爲臨第一に非常御大儉被仰出諸事嚴密お御取締等有之誠に以
難有結構の御事に御座候然所衰俗の習にて是迄の安佚奢侈を以常々心
得候人心に付間に御大儉御取締等の儀究屈難澁の様存候輩も有之且

追々被仰出候儀も無學の俗吏抔の驚候様の事多く夫より去て色々風評も起り畢竟は私共日夜御談話等の節種々の儀御勸め申上候抔と申唱候族も有之候由御承り又被仰出候儀におゐて下情不被達候儀も有之候に付ては孰れ私共にては下々の儀籍に見聞仕何事も申上候抔と申立隠目付抔と稱候者御座候右様の儀其御承候に付第一奉恐入候は此度の儀御新政に於ては實に以上上の御誠心にて上下の困窮如此にては國家も難被立行を御憂勞被遊候より出候儀に候を數ならぬ私共共の御勸め申上候事と下々にて存候様にては返々も不相濟儀且又私共非常の御恩眷を奉蒙御側近く罷出候に付ては乍不及御修徳の御工夫治國安民の道理等兼々學置候丈の處に申上君徳の萬一をも奉輔度とこそ存候上にては私共の愚癡を御近被遊候も此御趣意に可有御座と奉存候然を隠監告訢之徒と被稱候ては下に光明正大の君徳を害候儀と其節も相考候得共右様僻事申立候も中以下の役人中並に末々の者計にて其頃御詰合の執政は不及申上諸大臣參政衆も孰れも格別の出精にて一途に御趣意被奉受繼被相勸候事故假令暫くの中以下如何様存候共追々上と奉始諸大臣勵精の御誠相其候者私体の小身の風評へ自然消へ失可申と存候

お付少も不願相勸來候事に候然處意外の大患ひて昨年御就國前より御大病被爲受御道中以來諸名醫の説孰れも御思慮を御政務に被勞候事御禁し申上候然るに御國元ひては既一統江戸表の御様子承知仕御入部の上へ早速被仰出も御座候半と相待居候様子上ふも亦御大儉等の儀の早々も被仰出候思召の處御病氣ひて被差延候ては一國士民の望も如何と御心に被爲掛却て御思慮に相成被爲障間敷哉と私共体も竊に御案申上居候處去七月中不存寄平八儀當役被仰付且兩人共執政參政御用御取次相勸候様被仰付候難有仕合奉存候右ふ付熟々相考候ふ前文の通り兼々私共儀の衆人の疑念も御座候處御入部の御初々様の儀被仰付候ては爾以衆人の所存如何可有之萬一是ひて君徳を奉損候様ひては不相濟と奉存候得共又考直し候ふ其節の執事も別段御改革御下調被蒙仰候由且私共右様被仰付候の乍恐御趣意奉察候に必竟上に御病中御思慮を被勞候御事不不爲在候様乍去御政事の共儘に被差置候ては又御心掛ひて却て御障も可有之と申より右の通被仰出御平臥中ふも御心易くして御用辨候様にとの御儀可有之哉と存直し候に付其儘相勸罷在候然るに元來上と執政との御間御用御取次は參政職掌に御座候處忽と私体

右様被仰付候に付諸參政何との無心元被存候哉にも其節粗承扱又江戸表にての上にて日々御席へ被爲臨候付參政衆より伺候御用も定て速御聽斷も被遊候にて可有御座候處御着城以來は御臥病而已に付被伺候御用も江戸にての通り速に不被決或は口を経て被仰出候事も有之哉にて且私共の御徒然中故別て不絶御側に罷出居候に付其間におゐて自然疑念と起候様にも被存物事に付言語容貌に其意相見候儀間々有之扱又御病氣別て御不勝の節の執事と奉始諸大臣方一同御憂思被成私共も至候ての實も痛心疾首區々の情にて更に名醫御招有之候様にと一途に存込其節の儀の勿論上にて難申上此事を御事斷被成候は唯執事に有之と存且執事並息焉公の以前より私共御懇意を蒙り候付旁以前後を不顧彼の通り種々申上候處區々の愚哀御採用被下執政方御裁斷にて參政衆へも被仰合追々御取計有之右の御力を以漸々御快復被遊恐悦至極お奉存候乍併其頃より參政衆の氣向猶更何となく宜からぬ様相見へ其上十月中御大儉の儀都て執事より被仰出私共下案差出執政方御衆評の上參政へも議下り又右の節被仰出方等の御直の御意を受私共執筆にて出來候書付も有之又御借居被仰出候節杯も參政より被差出執政方御取調の

御下案に思召被相加節も全く私共執筆に被仰付又足輕目付類心得方被仰出候節も思召を奉伺執筆の私共相勤申候右等の都合にて參政衆の彌胸中に不平も有之哉お被察候右等一体は御直書にも可被遊御儀の處御病中勿論其儀も不被爲出來乍去上の御氣質にて思召有之候を其儘被差置候て又大に御心に被掛候事故大意を私共へ被仰聞文字の間宜様取扱認候様被仰付候儀誠お無御餘儀御事と奉存私共も分を忘れ執筆仕候是も全く御病氣の御爲めと奉存候然に連々右申上候通參政衆心元なく被思居候處に右等の次第積成候付彌不自安の意御座候哉下々の風説にての參政衆近來の人々外轉の恐れを被抱十分踏込事お被任候氣色無之と申候由肝要の御役さへ箇様に候得の其下々諸役々お至ての猶更危懼の意有之中に屬精して御趣意を受候存念の少き様承り申候間に此度の御趣意の上の思召より出にあらすして別に本原有之杯と申者も有之扱又一統の衆人のいつとなく私共儀をの御役名の字義も不考只々機密の職と心得其意にて萬事應對仕候輩も有之候お付一々辨候ても中々聞不申心易さの杯の御仕置等胸お不落儀も有之節の私共へ難問らしく申掛又格別の親友杯は私共唯今の様に居り參政始不自安不任

事様にての不宜と告吳候者も御座候是畢竟前に申上候事勢の成行にて
簡様に相成殊に意外の御病氣に付一旦御用辨權宜の御處置御座候より
從て弊生し且衆人注目の儀に此度の御新政は迄の儀に相替候事多く
私共相勤候御役儀是迄無之して此度新に被相立殊に格別親密の地に被
召使又私共疎賤の者追々御恩眷と蒙り人の耳目にも相掛り候儀に付右
御役儀の字も不相考何となく此度の御新政に私共の預り候事居多の儀
に存候も衆人の常にて家毎に辨し候事不相成事御座候況して參政衆
の所さへ右の通の様子にて其儀を下々風説仕候儀御座候得は一統の
注目は不足怪事に御座候是迄被仰出候は御新政の端緒も候哉の處
最早右の通に付此上退々御平快の上被仰出候儀候は定て別て衆人駭目
の儀も可有之左様の時と至り只今の儘の人氣も折角の御趣意をも
下々奉疑衆人私共へ注目仕候様の儀萬々一有之間敷事おも無之左候て
の實に御新政の大宮君位の御瑾に可相成ると甚以恐入罷在候殊に參政
の儀に執政に差繼候大臣に付國中の人も畏服敬重致候てこそ廟堂の勢
重く國家の御威光も有之事御座候然も前文の通參政不自安不任事し
て其儀と下々風説仕却て卑少の私共へ注目仕候様もて信任大臣而不

使小臣秀焉と申清明の朝の事体と相反し可申候是迄衆人注目の儀微積
爲小々積爲大の成來を以向後の儀を相考候も萬々一卑賤の小臣專國事
を取扱候杯申唱候様相成候ての不容易儀可有之此儀相考候得何とも
不被申上次第にて身の置處を不辨日夜暫も不自安儀に御座候尤追々御
病氣御全快の上日々御用席へ被爲臨御直に御聽斷被遊候様相成候て
參政衆の疑心衆人の注目も薄らき候様も可相成哉と此所も幾度も思
直し見候得共先入爲主と申古語の通人心と申物一旦存込候儀に決て不
變物もて却て日々御聽政も有之様相成候得勿論萬事被舉行可申付て
人の注目の有増無損御直の御指揮も先つ内々申上置候者有之様可
存候殊に此度の御病氣御思慮大禁の旨諸醫の說に御座候得今暫の日
々御臨政と申様に相成間敷夫迄の間に不被舉行して不相成事も可有
御座候得向後一日一日と右の弊に次第に深く相成候事と奉存候元來
封建の世の風儀に引地と重んじ候付上君公諸大臣の御熱議より出候と
申儀下へ徹し候得難有事別て威嚴仕又難澁の事も慎て相守候得共
一つ間違小豆共緒御勸め申上候事と疑候得難有事も左程に不存色
々と評議仕難澁の事も有之候得大に不服を抱き候事當然の儀も御座

候況や此度の御新政遅々衆人の爲にも相成候ても當分の舊習を忘れ兼
難澁を可申事も可有御座譯故別て上御一人より執政參政御協和より出
候事と申儀下へ徹し不申候ての不相成事に御座候處實以此度の御趣意
は根元 上の御胸中より流出執事奉始御同列方並諸參政の御義定に候
を前文の通の勢おて私共体に衆人注目仕大小の官吏不自安と申候ての
誠以一身の恐愕の扱置爲國爲君甚如何敷此儘にて被差過候ての大に御
新政の御妨と奉存候此節の時此度の政と被行候に右様の妨有之十分被
行兼千歳一時の機を被失候ての返々も恐入不輕御儀と奉存候此所にて
御座候右に付唯今に於ての計は右の勢を被轉候外無御座其勢と被轉と
中て外ふ仕方無御座唯々私共兩人儀御親密の地に不被差置様被成外有
御座間敷と奉存候是迄私共相心得候所御學問の儀別て御肝要の儀と奉
存日夜御咄の御相手仕候も聖經の本旨歴代の治亂等愚見の事共常に申
上罷在平八儀の數年來御讀書御相手被仰付置且又昨年別段の思召を以
侍讀被仰付候儀ふ御座候得の此後とても御學業御日新御大成の儀伺途
け申度愚念に御座候得共只今の通相成候上繼令御政事の末にも係候事
には一切不相與御讀書計の儀相勤候共一旦右の通存込候人心の解ち可

申にも無之今日に至候ての所詮御側に罷出不申様相成候に無之候ての
人の疑の解申間敷と奉存候守太郎儀の御幼年の節より御近習相勤平八
儀も御座に被爲在候節より數年御相手相勤殊に御家督以來の前に申上
候通兩人共格別の御恩命を奉蒙候儀に付倦々の恩情にては一日も御側
を不奉離して犬馬の愚哀と効度心底の萬々お候得共今の勢にて國家
の御爲に公視平觀深思遠慮仕候に右の通奉願候外無御座と存定候付此
段申上候執事の御賢明能々此處御深察被成下人情に被原事實に被引合
篤と遠大の御思慮被成候様爲國家奉禱候尤申上候迄も無御座候得共此
等の儀執事より諸參政衆へ御尋問等御座候ての決て宜ある間敷其故の
段々申上候諸參政疑念不平等の儀皆心中の事にて勿論外お顯して可被
申理無御座況や執事方へ被對ての猶更の儀に御座候夫に執事より御尋
にても御座候ての決て色おも言にも右様の儀の不被顯の必定にて心中
に益甚と申姿お可相成と奉存候付此儀の必御無用と奉存候私共數年
讀書仕治國の要は祖宗の法を守り老成歴任の人と用ひ新進喜事の士を
不用學問の要は德行と先にして事功を後にし候と申儀兼て講居候事に
御座候得共此度變更の際お當り身自ら厭候て彌以會心仕候儀も有之候

お付不明の私共執事の御賢明に奉對申上候も奉恐入候得共此上御爲と
 存付候次第左に申上候前段にも申上候通兎角封建の世の門地を重候事
 に付此以後とても非常の大賢英才の格段の儀左も無御座候の必其門地
 の人の中の賢たるを御任用と申様御座候こそ國家安泰人心服可申お
 付此上の何事も執事上との御深謀にて諸參政衆の氣前引立鼓舞して被
 張込候様御取扱被成一人を用ひ一士を被擢候も此御勘考肝要の御事
 と乍恐奉存候寒微殊に少壯の者杯容易に親密の地要劇の職に被用人の
 耳目を驚候儀有之候得の必其害不少事にて其段の此度の事おて可推事
 に御座候且右の通に候得は年少銳氣おて經濟を以自負仕候者杯染瀆躁
 進の念を萌し大に人心風俗を破學術の弊おも可相成お付此段も執事の
 御胸中お被納置其弊の路と御塞き御座候様にと奉存候此段執事の御深
 慮有之儀に付申上候迄も無御座候得共國家の御爲肝要の儀と存付候付
 申上置候事に御座候扱此一儀私共存念にての愈簡様と見定候に付勿論
 御前へも極内に漸を以御病氣を不奉驚様申上御裁斷を奉願候心得に
 は御座候得共當時 上にも實に柱石と御頼の執事の御儀故委細の儀の
 執事迄申上候能々御明察被下呉々も國家の御爲長遠深大の御謀慮を被

運候様奉存候私共區々の愚性明りに恩遇を奉蒙候て不計もケ様の次第
 に至候段幾重おも奉恐入候間身分の儀如何被仰付候共固より甘心罷在
 候儀に御座候萬一出格の御評議を以疎遠の地おおるて私共相應の御用
 をも被仰付候の猶又乍不及愚力の届候丈の粉骨碎身し平生奉蒙御大恩
 の萬分一とも奉報心願に御座候此段偏に執事の御明察を奉仰候儀に御
 座候君恩を恐ひ國家を思坐に涕泣仕候次第に御座候萬々情意御諒察被
 下候様奉存候以上

此書村上量弘野崎教景兩人にて上りしものおて教景の執筆に係る弘
 化三年二月の事なり蓋し 公の封を襲き給ふより諸政一變皆二子
 の不與事なし則此に至て書中所言の如きお至るも又不得已の勢な
 り此時豊水此書を得即ち 公に呈しけるに 公思ひ給ふの小臣お居
 て竊に大臣の事お任るの則不在其位而議其政の儀おて此の勢に至る
 ぎ尤なり二子を使ふの体改めさるへからず教景の如きお暫く我の側
 を可退量弘の即ち參政の官に擧んとて命出るの前日徹しく其意を以
 て二子に告給ひし其明日命出んとするに及て量弘俄るに病を稱し
 て引込しに 公竊るに量弘の意と問ひしめ給ふに量弘謂自ら君側を

退き要地と去らんことを乞て彌要路に被擢るゝ是れ退を求て却て進
むなり若し予漫然此命と受る時は豊水に上る一書皆虛妄とあり不信
此より甚しきはなし且君子の進退不可不正遂ふ其内命を受けさりし
かゝり公も亦た早く其意と察し遂ふ御郡上奉行御先手物頭格被仰付
教景の其三月八日公子の御附役被命侍讀の如故にして四月内命の事
ありて江戸へ差歸さる嗚呼二子の於公水魚とも可謂して此等の事あ
るお及ふの何事をや然れども當時新政の行はれしに公意中の萬一
にも及び難く繼るに其端緒を出し給ふのみなれり若し公病平癒し
給ふ時に及んで其所懐を出して舉行ひ給ふこと不可測者あらん其
時に至り二子の進用せられんこと又言を不待ものあり惜哉公無程
群臣を指て遂ふ其盛事を望こと不能豈千歳の遺憾にあらまや

友人今井義敬記

答下問奉政府書

去秋以來當御地にて天保學と一種の異學流行仕候由沙汰有之當夏御
歸國の頃迄其沙汰不相止其後も絶へ不中趣に付迨々心掛右學風評諸方
にて聞合委敷摸樣も承知仕候處教主と被指候者の皆私儀年來の親友に

御座候付右の者共へ熟談仕其見識心事をも承り且右之者共へ從學仕候
若年の輩へも追々接見仕其學術風采心得方等迄漸々探索仕其上にて篤
と相考候處一統より譏候も大お尤の事も有之候得共能々察候得の頗る
其實を失ひ肯綮を得不申儀も有之又天保學教主と被稱候者共に於ても
實に宜敷處も有之無據心存も御座候得とも又大お一統の譏を取候程の
過も有之候然處一統の譏り其肯綮を失ひ實にも有ぬ事を申候に付右學
者の心を服するに足り不中又右學者の實志の所可取は一統へ見へ不
中其粗跡計り見へ候に付益譏と申成行と被存候畢竟右様の間違にて情
實解け不申より別に一種の學有之様に申唱候得共能々其實を尋候得の
學問の根本お於ての孰れも相替りは無御座候一体古今共に學派同異の
議論盛にて末計りを相咎相視ること仇敵の如く有之朋黨分れ風俗敗れ
衰運の基と相成候事の史冊に相望み人口に傳説仕候事にて甚可恐儀と
奉存候殊お乍恐當時上にも御好學の思召より一統を風化せられ候御
時節に當り御家中にて僅々の讀書人の内右様の風評有之萬一學術の譏
論より黨與分れ御風化の害にも相成候ては甚以恐入候御事と奉存候尤
唯今何を朋黨立分れ候と申摸樣の決て無御座候得共此通行違の儘にて

押移居候ての先々如何可相成哉と被相考申候何卒此間違消融仕御國中
あて荷も學問心掛候者の相互に無被腹議論講習仕各同心戮力して後進
子弟をも誘掖仕一統共に大道の中に游泳仕候様相成度事に御座候此儀
に付ての私儀幾應も平心易氣にて相考見込の處左に申上候
一天保學教主と被指候者の心事を精々承り候處元來右の輩は實小學問の
心掛厚く何卒朋友相切磋して聖賢の大道を一國に被行候様仕度心存に
御座候然處一体御國許ふての學問と申は是迄一種の弊風有之學問を仕
候と申は先づ讀書の上にて古書の文義にても能解し詩作文章杯相應に
仕候を學問と心得吟花詠月の風流と弄を學者の所業と仕候風儀に相成
其末弊に至り候ての大道の肝要忠孝大節倫理綱常等の事は自然漫お相
心得世務の事の連も學者に出來候事に無之と自畫候姿に相成一度讀
書人と成候得の書物扱又の詩文等お計り精力を盡し通例の人と同一種
隔候様成行間に心得違大本を取失不行跡にて身を誤候者も御座候夫
故追々上よりの學問筋御引立等御座候ても兎角一統の人心學問の今
日士分たる者日用切要の事と申儀は知り不申學者と士と別物の様に存
候學者と申物に陷候得の武藝を廢し迂遠の空理計り申常用の勤方杯疎

く罷成何の用にも立不申人品お成候と心得候風に罷成偶學者と被稱候
者へ當世の事杯尋候得の一向に存し不申輩而已に御座候右故士人より
の彌學問の無用の事と見捨候に付家柄人品先々屹度御用をも可相勤者
も實の學問を知候者一向無御座候此儀を右の者共深く相歎き學問の人
の人たる所以とこそ學候事お候を右様別物にて無用の事の様人々相心
得上よりの折角御引立御座候ても素論而已繁昌にて實學仕候人無之
との可歎事に付何卒我も人も此儀を見破り倫理綱常忠孝大節を専らに
押立其講究仕候事も皆日用當行の實理を致修行度と申合相勵みて切磋
仕居私儀も右の段の至極同見にて先年より志を同して議論仕候儀に御
座候右の通にて修行仕候内近年お至り遅々若年の輩より會設等願候者
有之候得は勿論志有之候者を可斷譯も無之に付引受指導も仕扱書解等
も少々つ、進み候得は其程に従ひ學問の主意の箇様の物に候と申儀申
聞兼々存込居候處を以相諭候事お御座候由扱又爰に一種御座候は是迄
學問の教方に又一風有之詩文風流にの踏不申候得共學問と申せは始よ
り性命理義の微妙を説示し毫忽の末に學術の異同得失を争ひ古來宿儒
の白首迄研究仕候様成六ヶ敷道理を専らに申聞候お付初學の者杯承り

候ては何事の相分不申唯其難解且日用に切ならぬ様にも覺へ退屈畏難の念生し學問は究屈に六箇敷事にて我々には容易に不出來事と存切候風も有之候に付右の者共の夫をも相愛彼の通ふての縦令道理の宜候ても人々學に向ふの念退易く候ふ付此時に當り候て一人も多く學に志し進立候者出來候こそ御國の爲めにも候に存候より考定孰れも今日教學の大弊の人々學問の風流無用の事と存候其根本忠孝大節士分當用の儀と申事を不知と又學問は六ヶ敷理屈にて容易ふ難入と存候との二つみ付第一に此處を打破り人皆學問の根本と知り且格別六ヶ敷事に無之と振起仕候様に致候の、自然と道に向ひ候者多可相成其上ふて段々練磨講究仕組より精に入大中至正の場にも可導と存候より可成丈け人々忠孝大義の學問の本なるを辨へ易く且學問の坦易にて易入物と申儀を分明に可申論と申合候由且又二百年太平打續自然と士氣も萎靡柔弱に罷成身命と塵芥よりも輕んし捨生報國の念一刻も不忘と申様に氣節の乏敷様にも有之に付此氣節を第一に引起候てこそ忠孝大義も實物に可相成と申處へ目當を立夫より専ら武士の學問は君臣父子の大倫と押し立忠孝の大節を稱へ棄生報國の志を堅くすると大本と申儀を主として

唱へ又人々畏難倦退の念不生様に存候より讀書も章句文字之間の大略にても其大意を傾解候得の先夫にて宜様申聞平生の躬行も少年の者杯一々規矩繩墨に叶候様とても左様おの難參に付先づ右の大節をさへ立候得の小徳の出入にても可也と申位お教へ候由さて又少年の輩杯風と學に志候ても前文申述候通一統の人心學問は無用の物ふて唯賣風の人物に成候事と存居候事故偶志候者有之候得の其親族或の仲間中杯より且戒め且譏りて止め候に付無據夫に引られ又止候類も有之に御座候夫故右の類を引起すへき爲めに猶更忠孝大節を守り中無愧を必何憂人言と申様成意味を以相諭世上の毀譽等に不動と志士の操に候と申儀を申聞候事の由に御座候右の通にて引立候ふ付少年血氣英發にて忠義に奮候質有之者杯の退々感發仕從學も多く相成就れも學問の士分當用の事と申儀相弁へ忠孝を重んじ棄生報國の念は凛然相立柔弱萎靡の風を脱し世間の毀譽杯の少も不動と申様の場の出來候様子に御座候さて指導仕候者の心得にて右の通仕立置根本定り候上の漸々裁正仕中道に歸候様との見込に御座候處其者共迎も元來一國に師表たると中程に成就仕居候ふも無之に付右迄引立の出來候得共裁正等の儀に至ては

思ひしく力に不及處有之且の銘々も英氣以衆に先んし少々の過失は
不免候に付尙更裁正の場にも至兼候さて又右指導仕候に付て水戸の
學風忠孝大節を押し立氣節と勵し外寇を拒候事常々の論も付近年外寇の
恐も有之時節旁右學風は我今日の士氣を起候に可宜と申より水戸遊
候者得來候彼の藩人著述の書杯授け候事も有之處少年の者大に信仰仕
候央に去秋長崎蘭船の一騒にて人心戒懼仕候故水府學を信奉し後に
却て指導者の意よりも厚く信し實の水戸の風にも違ひ候に至り且追々
讀書出來誠力も長し其眼にて世上の人を見候得の流俗に安んし氣節も
なく或の輕薄の行ひ又の射利も流れも有之候に付自然と已の大本正敢
と頼み少年英氣にて人を蔑視仕候様の儀も有之且又小徳の出入可也と
申意にて引立候弊にて平常動作飲食の際等も粗暴の爲体は不免も付衆
人追々譏候由然所右の通我守大節無愧干心何願衆俗の器々乎と申様の
意を堅め候者共も付讀等にの少も頼着不仕同學の友の彌親結仕以前よ
りの友あても凡俗の人品の斷然と交り不申と申様の儀も有之哉に相
成又指導者二三輩の處の追々年久敷修行も仕居に付博く有用の書をも
學候積みて二百年來熊澤蕃山物徂徠近世の蒲生秀實頼衰杯の著書も取

扱其説の面白き處をも折々談し實用の學を示し候處少年の徒は一途に
其處を學問の至當と思込深く解も不仕候て高論を出候様に相成年少第
一の心得恭謙温和と申處を失ひ前文の通不願人譏と申様に罷成候に付
世間の譏は彌甚敷相成候後には種々の浮説も興り候も付右年少の父兄
杯は譯は不知心配も仕候哉に相聞へ候夫も付指導仕候者共も近來に至
り候ては殊の外心痛仕次第に申論候は大節は本にて細行の末なるより
最早には専ら大本を押し立て論候得共追々進候も付の細行も不可不慎且
細行を不慎して今日の如き風説を來して父母に憂を掛候様も相成且又
今公御新立御好學の時に當り學風異説有之様に世上に被指候て浮説起
り候ては戸曉人噂は出來不申中にの浮説を信候徒も可有之左すれば我
黨の學術もて一種の風俗を成候様相聞御風化の害も相成候ては大に
不相濟儀もて則大本も外れ候と申意を以追々説諭に付當時は孰も次第
に其心得に相成候方の様子に御座候右の通の次第にて全く是迄の學弊
を矯候心得にて指導仕候志の實に無據譯にも有之又丈夫に人々實心も
忠孝も振起候と申効の御座候様も相見へ申候但其矯候仕方不得宜處も
有之より其内も又弊を生し其弊を救候候手も餘り候と申成行もて無餘

儀時宜と被存候夫故當時は指導仕候者の唯々漸々力を盡し裁正して大
中に歸せしめ候儀を專一に心掛罷在候事にて別段に教の儀有之譯ふて
無御座候

天保學を讒候方を段々心掛承見候處讀書人中より讒候と常人一統よ
り讒候と二様に御座候其次第左に申上候

一讀書人中より天保學を讒候辭ふは右學の唯功利の學と申物ふて躬行心
得に本つけ自修の工夫杯と申事の少も無之飲酒放縱禮節を廢し詭激の
行而已致其主とせる處専ら經濟と唱へ近世取難家の著書杯重もに取扱
四書の文義も一涉せずして等を蹴へ周禮杯と討論し妄りふ高く構へ天
下國家の己等の手にて如何様にも成候如く心得甚者の孟子杯は排擊し
眼中如無人滿心致し且同學朋黨を促し充塞仁義其心術不正聖賢の大道
修已而治人の意との背馳致候に付彼様の學長し候ては異端害道士風ふ
も拍り學術破壊大に可愛事に付唯今撲滅可致杯と相聞申候

右ふ申候飲酒放縱禮節を廢し詭激の行而已致眼中如無人蔑視し候儀
又其學等を蹴へ四書の義も解し不申して最早周禮杯講して經綸を談
し近世諸家の著書を取扱候て經濟を論候杯は實ふ其通の事ふて病ふ

中り居候様御座候是の前段に申述候通指導者の致方無據譯より右の
弊を生候事と被存候但其功利の學にて躬行心得に本つけ自修の工夫
全く無之聖賢の道との背馳し朋黨と結ひ異端の類にて仁義を充塞す
る杯と申の過甚の論ふて其實ふは當り不申候前段にも認候通右學の
大目當忠孝大節ふ有之事君致身事父母致力等の事の實に深切に勵ふ
染込居一と通の書生漠然たる者よりも可取處も御座候ふ付大道の主
意に於ては決して失ひ不申候但其末弊の不宜にて御座候此處と不察し
て一偏に過甚の論ふて讒候ては右學者の心を服するふ足り不申候
一常人一統より天保學を讒候辭ふは右學を仕候者は一体書物の解し方も
替り候由にて通例の學者との違候由第一其讀方も不作法にて寢轉の儘
にて讀ても不支と申様子且飲酒等に慕り不行儀至極にて人を輕しめ己
を高慢に構へ何の一風異り銘々ならは御政事にも出來候様の心得に
相成居常体の人との咄も合不申如何にも怪敷風ふ有之且何となく徒然
の摸様も相見へ候杯と申甚者の異教を奉居候杯とも申觸候事も有之由
其外種々跡方もなき事柄杯申唱浮説殊の外多候由是等は犬吠て萬犬
應するの類にて御座候と相聞申候

右に申候書物の讀方不法法に有之飲酒に募り不行儀にて人を輕しめ一異風有之と申様の儀の實に其通の事衆人の申處尤至極に御座候是全く前段に認候通の末弊にて右の次第に至候事と被存候御政事も出來候心得にて居候と申の彼の諸家經濟の書を讀候儘めて粗心を以憚る處なく制度施爲の事をも論候と聞て常人の右の通存候も其善の事に御座候但徒黨を組と申の是亦矢張同學の友格別親密に仕突立氣象に相成候に付たとひ以前よりの附合にて讀書をも不知人なれば修飾して意を枉て交候と申様の事無之より右の通見へ候事と被存候異教を奉する杯の説は申迄も無御座妄説に候得共其所由を考候に右學心掛候者の内巫祝を不信より佛刹の札杯川へ流し或は新に家を起し候者杯佛壇の代り祠堂の形取拵神主も儒制に仕魚肉等備候輩も有之哉にて右様の儀婦人庸人等見驚候都合も有之殊に右の通異風の様子と目を被附居候時節故右の事杯を以て怪敷教を信するならんと申の凡俗の卑見にて常人中にも少々有心者の不取申位の事の由に付弁候迄も無御座候

右者私儀追々心掛承合候處お御座候さて双方を酌合平心易氣にて相考

候處天保學と被稱候者何そ別に敷有之にて無御座其押立候大本の即聖賢の大道お御座候但是迄の弊風を一掃せんとの心より餘り大聲疾呼して風聲と樹立し枉を矯て直に過更お大弊と生候事お御座候然處候方にて其弊風を見て即夫を咎め毀り其根原と不推察して排候に付彼方にても動き不申動き不申に付尙更強悍の異學と見込撲滅せすん風俗の害お成候と一途に存候も此處全行違と被存候尤天保學の方根本は大道に候得共外人の目おは其心中の所備は知れ不申其形に顯れ候平日の事に施候と而已を見候に付其弊風を以て則其學の流儀と見候に是又無餘儀譯めて尤の事に御座候但人の意中に染込候事の意端にてさへ威力にて撲滅と申事の難成事にて况や右學の末弊こそ有之候得共其本は人々忠孝大道を踏へ居候事の然を末弊と惡むの餘り撲滅せんと存候は迎も出來候事にも無之又可爲の理にても無御座候殊に天保學と稱られ候輩も此節の其弊を心付専ら論度存居候儀に付此處にて能々双方より熟談を遂け其行違と合し正敷に歸し混融爲一孰も學問の忠孝を重んし倫理を教し忠信を主とするを目當とし殺身成仁棄利取義の志を勵し平生の行の温良恭謙を専とし讀書講學の次第は循々古賢の矩に従ひ自選

往遠自卑登高經に本つけ史ふ參へ追々從序而進候様相心掛蹶等の過等
決て無之様相戒輕噪粗暴傲慢の氣を除候様にて修行致候様可相輔事に
御座候夫より次第に進候ての剛柔の性各其禰を變て中に歸候爲實材幹
各其質に從て器を成し國用に供候様にと可導事と奉存候其上にて上達
の場に至り候ての理義性命の奧妙又制度文爲事務設施の方等に各得
力の程ふより見聞も出來自得の處も可有之事にて此處の強て一方に限
り切揃候様可致迎も左様に成候物に無之と奉存候要するに徳性堅定
器識深遠粹然君子人と成候の、宜候事と奉存候御國中讀書を以人に教
候者の僅の人数にも有之此御時節に當り色々分れ候様ふての決て不相
濟事と奉存候一体天保學を識候者も皆私師友に有之又天保學と被指候
者は年來の親友に御座候に付孰へ偏頗有之ても不相成但其中正平實を
得可申と公平の心にて考候處右の通に御座候何卒双方申談是迄の儀渙
然氷釋仕候様有之度事に御座候尤左様に成候の孰れも好み候處に可有
御座候お付一旦行違の處解け候の、次第ふ混融可仕と被存候間深く
廟堂の御思慮を被勞儀程の儀にて有御座候敷候此段申上候以上
愚案するに此一書は誰の筆記せしものなるを知らされども天保學の

事情を記し政府お出せし者にて當時の事情の明瞭なる議論の正確な
る野崎子高に非すんハ筆記するものなし是を以此に附載する者なり

今井義敬榮ト稱シ堯夫ト字ス江戸赤羽久留米藩邸ノ人ナ
リ胸襟豁如喜怒哀色ニ顯ノス古今ニ通曉シ事体ニ練達シ志
ヲ立テ變セス大良公ノ近侍ニ任ヌ義源公ノ中興ノ業ヲ起
サル、ヤ村上量弘野崎教景ト共ニ三名臣ト稱ス文事ハ二
子ニ及ハサルアルモ其度量ニ至リテハ却テ優ルモノアリ
幼ヨリ近侍トナリ讀書ノ暇ナキモ漢土ノ歴史唐宋時代ハ
最モ明瞭ナリ晩年航海中ニ易經ヲ讀ミ洋算ヲ竹内岩五郎
ニ學ヒ算理ニ通曉セリ對鷗公ノ時ニ至リ江戸留守居役ニ
任シ世間ニ交際多ク幕府ノ典故及ヒ海外ノ事情ニ明ナリ
文久三年久留米ニ移住シ納戸役ニ任シ用人次席ニ進ミ常

ニ公ノ顧問タリ殖産興業ヲ取扱フ開成方ノ主宰タリ開成
トハ易經ニ物ヲ開キ務ヲ成スト云フ語アルカラ經濟ノ事
ニレテ役所ノ名ヲ命セシナリ最モ富國ニ意ヲ注キ蒸氣船
帆前船等數艘ヲ購求シ或ハ商人ノ稅ヲ取ルルヲ創意シ或
ハ若津港ニ米相場ノ方法ヲナシ同港ノ娼妓ヨリ稅ヲ取リ
及ヒ物產輸出ノ爲メ長崎港ニハ支局ヲ開ケリ是皆義敬ノ
創始スル所ナリ慶應年間密ニ長崎ヨリ上海へ航シ西洋人
ト交リ大ニ發明スル所アリ見聞錄一冊ヲ著セリ名ケテ秋
夜ノ夢談ト稱ス其論ニ曰ク

清の魏默深鴉烟の亂を歎て謂令不行於海外、國非嬴、令不行於境内、之謂嬴。
又謂不憂不逞志於四夷、而憂不逞志於四境、義敬上海の形勢を見て深く感
する處あり夫清國の、る外夷の跋扈強梁を受けざるゆゑんは獨り英夷を
惡むへさにあらず恐くハ清國の自ら招く所あり一大地球何れの處に

黠虜ならん英夷なしと雖とも其無事僥倖を頼むへらす唯我に於て
人の輕侮を受けざるゆへんの者あり斯ふ人敢て輕侮せざるなり一洋人
云東洋に國あり「サントーウイス」と云四方絶海の一孤嶋なり然れども五
洲の強國と交り獨立して毫も己の威を損せず萬國の船其地に至る者皆
其法を守り其國を凌るす此れ己れを治るに費なく他人に遇するに至理
を以する故英佛の強と雖とも其妄を加へず其法を守るといへり嗚呼天
下の事己れを治るより強きハなし己れ治せざる時ハ大も頼むへらす
己れ治する時は小も侮るへらす況んや清國の強大に於て能く自ら治
する時ハ、る形勢には至るまじ魏默深早く此處を見あり即ち清國人
なしとせずされども遂に用る能はま今日の衰弱おむる事誠お歎まへき
にあらまや然らば今日お於て其己れを治むる術は如何日或人云形以上
の事は亞細亞洲中の善を取るべし形以下の事の兼て歐羅巴の善を撰ひ
取るへし此言甚得たり今夫誠意正心の事萬古不易聖賢の教お如くはな
し若夫治國平天下の作用お至ては豈唯歐羅巴の善を並せ取る而已なら
んや一大地球の善なる物皆取て我の有とまへし今徒お漢土の糟粕と固
守して西洋の所爲を誹る者ハ是井蛙の見おしと時を知らずと云へし昔

夏の忠を尙ひ商の質を尙ひ其後ふ出て周公文を尙て天下を治めたりしは此れ當然の理勢あつて如此せざるを得ざるなり周公豈故らに此の繁文縟禮を作りて天下の人を勞せんや故ふ今己れの至善を捨て洋人の所爲に迷ふ者は是病狂喪心と云ふへし又偏執固陋宇内の勢に聞く時勢の變通を知らざるもの眞ふ腐儒俗吏の見而已

然り而レテ當時時勢ヲ知ルノ士ニ乏レキヲ以或ハ奸臣或ハ聚斂臣等ノ誹謗ヲ受ケタリ水野正名政權ヲ執ルニ及ンテ佐幕論ヲ主張レ諂諛ニテ國是ヲ擾亂セルヲ以テ禁獄セラレ明治二年正月二十五日國是ノ妨トナルト稱シ屠腹ヲ命セリ

勝安房守書版

春嬉萬福 高堂益御英祥被爲渡乍恐奉賀上候此度修業被命候御家臣出府の砌は 尊輪御下投被成下殊お御國産の御品頂戴被仰 付毎々難有仕合奉存候昨年拙議入高聽候處樓々蒙仰甚汗顔の仕合如仰賢閣老御推

舉にも相成候間御内部に御所番無程御鎮撫も相成可申哉屈指仕居候此末共何卒正大至公の御大政相建候様仕度三百年以來の御舊弊何れにも以漸御化育無御座候ては一時弊習改申間敷と乍去下民は追日智覺相増萬國の摸様も察知仕候事故格別非常の御英舉に無御座候てハ人心離散終お互解の基と相成可申哉と小臣僭お等級不願沉憂仕候儀に御座候御當地大城

御留主にハ御座候得共兎角人心の折會方如何哉下民離心の摸様も被相窺眞お痛哭の事共に恐懼仕候古今同轍おも御座得共盛成るハ猜忌にて此甚敷と御費弊との両事而已萬々奉恐入候儀に御座候兎角甘 御懇篤拙言奉入 高聽多罪の至 御聞流し奉仰候不備謹言

正月廿四日

安房守

今井 榮殿

久留米小史卷之十七終

久留米小史卷ノ十八

船曳鐵門校正

戸田 幹編纂

第四

君臣言行ノ四

眞木保臣

眞木保臣紫灘ト號ス世々水天宮ノ神官タリ因テ從五位下
 和泉守ニ叙任ス懋悟聰敏最モ國學ニ長レ兼テ歌詩ヲ善ク
 ス夙ニ勤王ノ大志ヲ抱キ會澤伯民ノ新論ヲ讀ミ賞歎已マ
 ス遂ニ水戸ニ赴キ其門ニ遊フ弘化四年孝明天皇即位ノ禮
 ナ拜セント欲レテ京師ニ上リ遂ニ三條内府公及ヒ野宮少
 將等ニ謁レ竊ニ皇政回復ノ策ヲ陳レ緩急力ヲ効サント誓
 フ嘉永五年木村重任水野正名等ト藩政ノ改革ヲ圖リ終ニ

隨責ヲ得テ水田村實弟大鳥居信臣ノ家ニ禁錮セラル殆ソ
ト十二年文久ノ際ニ至リ天下ノ形勢變遷ス保臣竊カニ幕
府ノ專横ヲ憤リ忼慨悲歎ノ餘書ヲ天朝ニ上リ且ツ別ニ書
ヲ裁シ國体策及ヒ天命論ヲ内府公ニ呈シ大ニ皇政ノ恢復
ヲ圖レリ平野國臣ト密ニ議定シ國臣ヲシテ薩州ニ往カレ
メ迅速天祐ノ二錄ヲ前右大臣島津久光公ニ呈ス二年春公
東行シ大ニ爲ス所アルノ報ヲ聞キ竊カニ禁錮ヲ脱シ壯年
有志者數名ヲ率テ薩藩ニ走り幾ハクモ無クシテ公上京ア
リ保臣亦薩ヲ辭シテ東上ス伏見薩藩士ノ變動ニ關係セシ
ヲ以テ國ニ護送セラル保臣國ニ歸ルニ及ンテ再ヒ幽囚セ
ラル三年二月幽囚ヲ解ク保臣對鷗公ニ謁シ薩藩ノ依頼ス
可キヲ論ス公大ニ喜ヒ保臣ヲ薩藩ニ赴カシム歸レハ藩論

一變レ復タ幽囚ニ就ク長藩ヨリ國司信濃薩藩ヨリ黒田嘉
右衛門津和野藩ヨリ多湖淡路等陸續使者ニ來リ且ツ侍從
中山忠光朝臣等モ來リ保臣等ノ幽囚ヲ解キ登庸スヘシト
ノヲナルモ當時ノ當路者ハ專ラ征夷府ノ命令ヲ以テ攘夷
ニ決ストノ國是ニシテ朝命アリテモ一應幕府ニ伺ハスレ
テハ舉行シカタシトノ趣旨ニテ應答アリシモ忠光朝臣等
違勅ヲ以テ迫レルヲ以テ終ニ保臣等ノ幽囚ヲ解キ京師ニ
出テシム其家ヲ出ツル時左ノ和歌ヲ咏ス
葛のむらうらみても猶かへれともかへらぬ袖了秋風我
ふく
をしまれて玉をちる身はいとさよいかはらと共了世了
あらんより

後れぬのまめもさくらうおせりねん

せきかけて了景色も香もあれ

學習院徴士ニ補セラレ日夜鞅掌ス其年ノ秋八月ニ至リ京師ニ變動ヲ生シ長藩カ禁闕ニ向ツテ發砲セシ罪ヲ以テ國ニ逃ケ歸ル其時七卿モ長藩ニ落ラレシヲ以テ保臣等モ同藩ニ逃ル保臣此時濱忠太夫ト變名ス元治元年長藩ノ老臣福原越後益田右衛門介國司信濃等兵ヲ率井上京シテ七卿ノ復職藩主ノ入朝ヲ請フ保臣モ亦兵ヲ率井上隨行ス此時甲斐眞翁ト變名ス忠勇軍ノ隊將タリ然リ而シテ薩藩會津藩等之ヲ拒ク保臣等十七人ト天王山ニテ屠腹シテ死ス辭世ニ曰ク
大和ま乃峰乃いえぬうほめけり

我々一つさ乃大和ぬまーひ

實ニ同年七月二十一日ナリ享年五十有一明治二年正月久留米藩保臣ヲ追賞シテ使番格ヲ贈ル五年正月朝廷永世祭祀料現米拾石ヲ賜フ十七年東京日本橋區蠣殻街水天宮境内ニ一社ヲ創建シ其靈ヲ祀ル紫灘神社ト號ス宮内省ヨリ金百圓ヲ賜フ二十四年正四位贈叙セララル

野史氏曰ク余ノ久留米史ヲ修ムルヤ久留米ノ事ヲ詳カニシテ他邦關係ノ事ヲ略ス抑モ保臣勤王ノ大志ヲ懷キ王事ニ鞅掌セシ始末ハ紫灘遺稿等ノ書ニ詳カナリ今特ニ其ノ久留米藩ニ關係アル建白書二篇ヲ此ニ記載スルノミ覽ル者之ヲ諒トセヨ

微賤無識之私共國家之大事を奉議候様之儀職に以奉恐入候次第御坐

万延元年

候得共國家急迫之儀乍存傍觀仕候儀猶又奉恐入候儀に御坐候間不願死罪を左ふ言上仕候
抑去申年十二月伊半田尚平清川八郎安積五郎等中山大納言殿内田中河内介と申者中將忠愛朝臣之旨趣を奉し書翰を持參致し有吉將監家來松村大成宅へ申出候趣の癸丑甲寅以來幕府之諸有司苟安姑息之情を以畏多も奉違背 勅定國家之大義を失候に付夷賊 皇國を致牌院傲慢無禮既致侵奪候勢顯然明白に及び深く被爲惱 敵慮候處より實に不被得止被遊 御親征候御模様おて天下之諸大名早々馳登奉守護 鳳輦様との御趣意に付此節諸國へ令旨被差下筈に候尤薩州長州等諸國應 召馳登筈之由噂仕候間甚驚愕仕不取敢其段及言上筈之處退て勘考仕候得の右亡命生之一言を以不容易大義を唐突に申出候儀借言妄語之恐も御坐候間其儘打捨置候筈お候處右河内介書狀熟覽仕候得の何様天下國家之御大事其儘難狀止真偽探索之上急度可奉言上奉存同志申談宮部鼎藏松村深藏兩人上京仕 禁闕之御模様奉伺候處方今之御事体殆 御幽閉よりも甚敷眼前不可諱御儀にも可被爲及哉之事件且外夷之猖獗被爲憤御内情奉傳承よりも甚敷江戸諸藩之動靜州不穩様及見聞候間直様出立

日夜陪道兼行仕馳下り候間演述之趣奉拜承候處草莽之私共只々大息流涕之次第奉恐入候其砌薩州より柴山愛次郎橋口壯助と申者當所通行仕處々立寄噂仕候趣候得の此節島津和泉様出府之儀不容易筋も有之候段承申候間御隣藩之儀其儘難聞捨罷在猶宮部鼎藏罷越於薩州市來驛和泉様供頭副頭有馬新七田中謙助御小性鈴木武五郎林田新八に兩度迄及熱談承合候處最初承候儀に少も相違無之彌以此節の於京都義舉有之様子續て修理太夫様大勢御引率二之手被致候御模様儘に及見聞罷歸申候將又長州之儀木原良藏堀新五郎及對談承及候所薩藩通に相違無之肥前之事情の薩藩同様義舉之覺悟有之趣に御坐候其他岡藩之模様も逐一承及候處屹度証跡有之右之外尾州長州筑州石州因州桑名仙臺阿州等之諸藩義舉之模様押て相考候得の大畧相違も有之間敷奉存候然るに右之條々委曲お一ツ宛建言仕候得共今ふ何之御模様も相見不申誠に不堪悲憤候竊お承候得は私共事浪人体之空唱を信し國家之大禁を犯し不入建言立仕候様申族も有之御爲筋申出候者も徒黨之様お申成却て墻壁を相搦へ相對不致を以今日之得策と被致候向も有之私共短才不智と申申御家之大禁をも不願南北ふ馳驅し東西に奔走仕身命をも不惜所以のもの何

等の趣意にて如斯仕候哉仰願くハ深遠之御謀慮を以御憐察被成下度偏
に奉存候永久獨立之御廟算如何可被爲在哉且御名義被遊御欠候てハ乍
恐御國家之御存亡此時と奉存候實に臣子之情分以死殉國時と決心仕候
然るに此般之儀に付世上論談之趣略承申候處列國之諸大名内外となく
幕府に被爲對全君臣之禮節を相守候譯柄有之諸事幕府之下知を受可申
殊於御當家様ハ舊國之御藩とハ格別之儀に付殊更被爲受御厚恩候御儀
に付俄に將軍家を背にして勅意を被爲受候様にてハ御義理合不被爲濟
候間此節の儀ハ御運緩可然と申唱候族も有之哉に相承申候是一ト通り
ハ尤之様に相聞候得共是衆愚を惑し候説ふて甚大義之事体にハ聞き利
口之俗説と奉存候私共竊に勘考仕候に元來幕府二百餘年の御厚恩を被
爲蒙候儀ハ誰も奉存候事に御坐候處先年幕府天朝之御趣意不被奉事件
之有之而已ならん近頃に至候てハ彌以奉遍 玉體候勢に至候付實に不
被爲得止被爲在 獻斷 天皇躬親大義を天下に御前被遊候内にしてハ
奸臣外にしてハ賊夷可被遊 御誅伐との旨に付都鄙遠近之無差別男女
老幼ハ至迄身命を抛ち袂掌仕候ハ當然之儀に有之候右之次第に御坐候
得ハ譬へ一人も勤王之者無之共菊池氏之如く御當家より義を奉られ上

ハ奉息 宸襟下ハ天下生靈之塗炭之苦を救ひ給んこそ乍恐至當之儀に
奉存候然るに此節之儀列藩勤王之事ハ但談巷説にても睨みたる儀に候
處不知顔して 勅旨を不被下に從是義舉難仕抔と申候ハ、今日之勢に
於てハ何共不得其意次第に御坐候然るに勤王ハ列藩に而已讓置御當家
より一人も義徒無之候間事成亂平の後何の面目在之天下の人ハ表と合
せ可申哉誠に以慨歎に堪不申候借 皇國之大体を相考申候得ハ前條之
通愚昧之俗人君臣之名分をも辨別不仕族も儘有之候得共元和以來今日
に至迄嘗て幕府を指て君上と唱候儀は全無之則幕府も諸藩も官位ハ同
し 天朝より叙任せられ是を以見候ても君臣に非る儀ハ明白に相分り
幕府ハ武家之棟梁と唱候通めて譬へハ 天朝ハ父母幕府列侯ハ兄弟續
きの者に御坐候是迄ハ大兄よりハ父母之意を奉行仕居候處此節大兄之
臣僕白刃を以父母に通居申候勢に異ならず然に二男三男共兄之臣僕ハ
所爲ハ兄之意ハ可有之とて父母を如何致候ても無爲方と傍觀致候儀ハ
有之間暇身命を以其間を相隔て白刃を差向居候臣僕を斬斃し先父母之
危急を救ひ左候て右之趣意ハ兄之意に無之候ハ、規諫致し候て父母の
恩を傷も兄弟義を失ひ不申二ハ今日天下至當之要務と奉存候右之通混

亂に不成様是迄力を盡し妻子臣僕の或は打過甚に至候ては身を殺し候
に至者も不少是亦兄之意に可有之哉父母伯叔悲歎をも不願位おして打
過候ては宜可有之哉路人と雖とも保護仕候處一家内おして路人にも劣
り果候事萬々人倫之上に於て可有之儀とハ不被存候其上此節 天朝之
御趣意決して幕府を御追討之儀ハ無御坐内にしてハ奸曲之臣僕と誅し
外にしてハ狡黠之夷賊を征し給ひ萬民之患難を御救ひ被遊候御儀に候
段ハ確實に承り居申候事に御坐候右之趣意に被本御國是と申一定之基
本と御建立被爲成候様若不和にして只々幕府へ御報恩而已申候てハ萬
一朝敵之名を被爲受候様に成行候てハ天下正義之惡みを被爲成御受何
方にて御報恩被爲出來候哉誠に慘怛お不堪次第お奉存候右之通お候得
ハ御報恩に益無而已ならず御國家之御傾覆を被爲招候譯にて實お御先
靈様へ被爲對於御孝道も如何之御儀と重疊奉掛念候私共叩頭流涕奉懇
願候ハ何卒一定不易御國是を被遊御定算早々御勇決被爲在度幾重にも
奉存候此節御遅緩之儀に御治定被遊候ハ、報國盡忠之輩御國典を不願
一己々々に赤心を相盡し候様にも成行水府之故轍を踏に至候てハ誠お
國家御珍瘁之基とも奉存候間何卒私共建言之筋彌御憐察被成下片時も

速に御英斷被遊被下候様重疊死と以奉至願候微賤之私共々様お御國家
之御大事と喋々奉計候儀ハ誠に借踰之罪難通奉存候得共臣子之情分不
得止處より不憚尊嚴建白仕候處如此御坐候死罪頓首誠惶謹言

壬戌三月

真木和泉守

私儀重き罪科之者に候處再犯仕候儀重々奉恐入候得共公儀に於て無據
譯御坐候間亡命仕天下之大事お御坐候に付御國辱無之様有之度權道に
て忠節相盡申度存込候儀に御坐候右始末並奉以來見聞仕候儀荒増左お
記申上候一々實事お御坐候間當時並後來御處置筋におゐて御爲おも相
成可申萬一御爲おも相成候ハ、私存意少し通も宜譯にて本望之至お奉
存候私當時御摸様ハ餘程相迫り候様察候間一日も早く申上候方可宜勿
論御國に引取候上ハ亡命仕候始末御吟味も可有之其節は十分申上候心
得には候得共遇く不相成方可宜と奉存候間私心得並見聞之次第申上候
宜御取成被仰達被下候様重々奉願候丑年以來西洋夷賊猖狂仕候儀ハ言
語同斷之儀交易相聞候に付てハ天下有用品莫兼に彼方に渡り無益之品
は不申及奢侈之品而已入込申候に付諸式高直に相成末之儀ハ飢寒に至

り實可慨次第に御坐候處我國の神明之國にて神靈も他に異り候故
と非常之地震海溢之外地妖人怪種々之事にて天地神明之御戒類々數々
御坐候得共其筋之御方は頼と御講も無之依ての神明も天地も最早國
を亡候哉に被存候處無勿休も主上御一方は國辱無之様且萬民困窮之
儀御憐愍被爲思召古來之良法被爲守度思召之由奉伺候是より洋賊之
毒に御染被成候時節に至り御一方古法を被爲守候御事實に天祖に
被爲代候ての御事當時御大政の關東御委任之儀左程御憂苦不被爲思
召候共相濟候得共何帝御宇にケ様に相成候と申儀の史録にも相記候
儀に付大祖に被爲對且後世にも被爲恥候御事御尤千万之御事に奉存
候就ての銘々の下賤之者にても敵旨に奉休夫々天下之爲忠節可竭事
と奉存居候處去酉八月關東にての瑞粟と申國學方へ承久元弘廢帝之舊
例取調差出候様被命然處其嫡子以外之儀と父子相爭候事自然流布仕
候間與御右筆何内某爪木某兩人に被申付專ら右御取調有之候由天下有
志之者聞付騒立關東の清河八郎酒見五郎伊牟田昌平京都に駈付ケ中山
付屬六位田中河内介お申入候處京都にも荒々右之件々相聞へ田中氏へ
兼て薩州より大久保市磯堀忠右衛門有村武次七人之姓名を敵聞に達

置候事も有之ケ様差迫り候ては大變之儀お付青蓮院親王へ申上候處令
旨を以諸國義徒御集可被遊候間早々有七人之内上京可仕候様被仰出
候お付清河等三人差急罷下り肥後瀬高松村大成方へ參り申候其節丁度
私より相頼申候筑前平野次郎儀薩州へ參り掛け右大成方にて一同落合
申候

一平野次郎儀去る未年は薩州西郷吉兵衛故薩摩守様御内命を以上京仕候
節松平美濃守様へ御相談有之福岡へ立寄同伴仕上京仕候於京都近衛左
府様へ清水坐主月照相頼吉兵衛内々相講彼是相謀候央密事露顯お及び
梅田源次郎始め堂上方御家來等被召捕候間薩摩守様思召も出來兼西郷
の月照召連薩州へ下り申候然所京都より與力同心等追來薩州出水口迄
參り掛け無據西郷共お入水仕候西郷の蘇生仕候間直に大島へ被遣候右
之節平野次郎月照に付參り薩州事情能々存居候處去春之頃松村源藏と
由者私幽居に卒爾尋和歌等差出是非共内談申度申入候間右之始末等委
敷相吐し當時薩州に無之ては可頼諸候は無之候間上書等も仕候は、取
次可申旨申聞候趣に御坐候然所去秋以來京都にて御迫り之由承り候
間上書類三通相認右次郎儀去酉十二月五日發足差遣し申候清河等三人

に落合申候間次郎儀伊牟田同道薩州へ参り申上書類差出申候小松帶刀知行七千石大久保市藏御納戸應接にて一々請込に相成申候

右西郷吉兵衛の去秋關東へ死去之趣被達姓名と以召歸ふ相成當時大島三右衛門と名乗此節も上京仕候外に右様之類三人御坐候

一平野次郎儀大久保市藏應接之節修理太夫様御事早春五千人之人數にて御参府可被成尤御参府と申唱候得其伏見迄にて如何被成候哉も難計儀

お付京都之事において氣遣の不及旨極密申開候尤蒸氣船も一艘有之外に器械も不足に付萬一の八月に相成候歟も難計旨相吐申候由

一伊牟田昌平儀の清河同道十二月廿五日豊後竹田藩小河彌右衛門方へ参り委敷相談仕候上直に上京仕候然所京都にて種々迫り候摸様相見へ候

間重き御品持参田中河内介一同薩州へ罷下り可申候間私儀も薩州へ罷越可申旨申遣候

右重き御品持参之儀は當正月十一日發京差急十五日ふ久留米表罷通候趣肥後藩中安部鼎藏松村源右衛門より口上にて申越候右宮部松村兩人の當正月五日出立にて二品宮令旨拜見之爲上京仕候歸國之節に御坐候

一薩州様江戸御屋敷及焼亡候間御参府御延引之段被仰達候所御聞濟に付和泉様右之御禮之爲と御唱御参府に可相成相定り申候由

一肥後豊後等義徒之亡命政府より寄て不知体に取計可申表立人數操出可中儀形勢次第に可致旨之由承り候間御國におゐても右様に相成度種々

工夫仕候得共身分柄何分にも致方無之薩州へ参り彼方より懸合に相成候様可致其節一人歸國爲致事情可申上と決着仕候所薩州にても表向

の御参府而已申觸候に付御懸合も難相成且私儀の再犯仕候間追捕にも相成一人歸國爲致候事も難出來志も難相達殘念奉存候

一當二月廿一日薩州阿久根に着し當所役人に内願申立之爲として罷越候趣申達候間飛脚差立伺候趣之處同廿五日城下へ罷通り可申様申來候升

七日鹿兒島へ着先づ飛脚宿に着込申候同廿八日早朝大久保市藏参り願意相尋候間左之通三ヶ條中立候

一京都表極々差迫り候様子にて此節田中河内助等重き御品物持参可致趣に付和泉様差急御出立有之度事

一此節諸侯一般御同志も御坐候山天下一大事に付中務太輔様御事貳番と御下り不被遊候様晴雲院様御續柄を以被仰合候様奉願候事

一私儀再犯之身分進退致方無之候間御上京之節ハ如何様之手にてモ御
差加へ被下度事

右三ヶ條ハ口上其他兵革の沙汰ホモホヨハ候ハ、三策可有之一書漢文
にて相認又和泉様心存一書並俗文一書差出申候然、所廿九日暮方町年寄
酒田十兵衛下役召連参り下町會所ホ宿被申付候間案内可致申聞候間直
に右會所に引移り申候三月二日小松帶刀方より參吳候様申來候間參り
候虞心存打明し吐ホ相成候右詞に此節和泉殿出府ハ修理太夫様御參府
御延引之御禮と申儀ホ有之一体ハ和泉殿儀是迄他方へ參候事無之先ツ
江戸へ参り諸侯方御内談申請候上奉安 啟慮候事ホ取掛り申候就てハ
此節直に 中務太輔様御懸合も難出來貴様御同道之儀も是迄修理太夫
様並和泉殿心存之儀家中一般自然と相洩れ我一に供致度願出右取静め
殊之外手入に候處貴様御出にて亦々騒立候様子に付御同道致候得ハ彌
以藩中動亂に相成和泉殿發足モ相止み可申外有之間敷候間御斷申候併
難澁之趣ハ尤に存候間日州志布別より船差出大坂表へ送り可申旨申聞
候

一三月十日頃長州藩中木原良藏と申者参り商用と申立實ハ政府より内々

使者ホて京都におゐて義兵を舉られ候ハ、一同に致度願候趣且長州義
徒堀新五郎と申もの差越薩州同志之仁へ當時諸侯方難頼候間義徒中申
合義舉仕度趣同志中に申入れ候右應對有馬新七田中謙助を被差遣候

一右同時薩州京都留守居田中忠右衛門より井上彌八郎と申者差急差出申
候 和宮御輿入御固めの爲彦根候御上京之節幕府より奸吏之分附参り
申候趣に付必定奸計可有之候 禁中にてモ御迫之様子に付早々御發掘
可然哉之旨申來候由右三ヶ條ハ小松より爲知に相成且有馬田中より銘
々心存委細爲知候其上竹田藩中小河彌右衛門肥後藩中宮部鼎藏松田十
助等一同に落合候て銘々内願申述候由小河彌右衛門より私に傳言も仕
御國にて私家族御吟味之事亡命之者御追捕弟大鳥居啓太等之儀荒増承
り恐入申候

一和泉様には三月十六日修理太夫様御人數同様にて御出立に相成同日蒸
氣船に乗合本郷作左衛門願立士分百六十人出帆長崎廻り大坂に着人數
送り屈船ハ引返し下之關より和泉様乗船室にて上陸之由同州高岡御用
船八百石以上千石迄之船四艘に岩下佐次右衛門組士分二百人大坂迄と
申事勤番被申附罷登り申候

一 出水口通行百五十人計り候由是の頭分姓名承り不申候
一 四月廿日蒸氣船大坂出帆人數呼爲登下り申候私は船中にて見懸申候
一 四月十五日和泉様へ伏見おて近衛様より御用之由申來候間忍にて被罷
出候處大儀に相成中山亞相正親町三條黃門御打寄御評議之上右西郷直
に參内被伺 敷慮候處御滿悦おて御委任可被仰付候趣お相聞へ大坂表
薩州屋敷へ其頃潜居罷在候田中河内介へ和泉様より大久保市藏被遣御
内々被申通候由河内介より私へ相談候右之御趣夷賊攘斥之儀根元に候
處關東御政務只今之通おて不相濟先つ一橋越前候御後見に相立候て殊
に東照宮舊政に復奸猾之分は取除是迄正義を以罪を得候者一々差免且
御手薄お付天下義徒を以衛兵お致し右宛行之儀は薩州より相辨可申右
等之趣關東へ被仰入候様との事右之儀御評決お付直に 御所より久世
大和守様差急上京仕候様御召に相成候由萬一右 勅旨之儀關東おて御
請無之候の、諸侯方へ追討之儀可被 仰付自然諸侯右追討御請不申候
の、薩州にて討可申旨和泉様より被立候趣被申聞候右之文面前後に
相成候事も可有之一々見分之所申上候此趣を以被仰達被下候の、本望
可奉存候以上

戊四月四日

有馬重陳

有馬重陳豊前ト稱ス父ヲ左膳重頼トス母ハ有馬氏馬國老有
助ノ重陳ノ家國ノ勳舊タリ故アリテ祿ヲ奪ハル重陳ノ時
ニ至リ初メテ俸米五十口ヲ賜フ後二百石ヲ賜ヒ終ニ六百
石ヲ賜フ大寄會ヨリ惣奉行列ニ至ル大良公ノ時己ニ參政
タリ義源公ノ中興ノ業ヲ修ムル對鷗公ノ繼述スル重陳賛
成ノ力居多ナリ重陳爲人沈靜ニシテ智慮アリ其事ヲ處ス
ル詳明周密毫モ遺漏ナシ熊澤蕃山ノ集議外書和書大學或
問等ヲ熟讀シ規ヲ三書ニ取レリ安政六年七月十二日歿ス
享年六十梅林寺ニ葬ル
有馬昌長監物ト稱ス幼ニシテ尙太郎又々主稅大和兵庫河

有馬昌長

内ト稱シ君壽ト字シ藏焉ト號ス本姓ハ吉田氏父ハ照長母
ハ側室市岡氏文政五年四月朔日生ル天保七年殿上元服ヲ
加ヘ有馬氏ヲ賜フ十年九月初メテ政府ニ陪ス對鷗公ノ時
ニ至リ幕府婚媾ノ命下ルニ及ヒ昌長江戸ニ在リ其事ヲ督
シ婚儀盡ク備ハル時ニ昌長年二十五功ヲ以テ擢ンテ加班
列タリ月俸百人口ヲ賜フ蓋シ異數ナリ然リ而シテ先君義
源公願命ノ大臣有馬照長有馬泰賢等相尋テ卒シ昌長壯歲
ヲ以テ政柄ヲ握リ屹トシテ一國ノ望タリ嘉永五年家老脇
稻次因幡ノ彈劾ヲ以テ一旦ハ謹慎ヲ命セラレシモ免セラ
レテ政柄ヲ握キレリ文久三年眞木保臣幽囚ヲ解レ京師ニ
出ツルニ及ンテ昌長モ京師ニ出テ眞木等ト學習院ノ評議
ニモ加リシニ長藩カ禁闕ニ向テ發砲セシ罪ヲ以テ朝敵ト

ナリ幕府ハ朝命ヲ奉シ征長ノ事ニ決セシテ以テ長藩ト關
係アル眞木黨ノ國ニ在ルモノヲ參政不破正寛等ト議シテ
再ヒ幽囚セシテ以テ眞木黨ノ惡ミヲ受クルコト益甚シ初
メ昌長不破正寛等ト佐幕攘夷ノ説ヲ主張レ朝廷ノ幕府ニ
征夷大將軍ヲ委任セラレハ幕府ヲ助ケテ攘夷スル即
チ國典ナリト佐幕開港ハ今井義敬カ主張セシ論ニテ是レ
ハ攘夷ハ容易ニナスヘキニ非ス一視同仁ノ理ニテ世界ハ
有無貿易スルカ道ナリ後ケ昌長正寛等モ攘夷ノ容易ニ手
ヲ施スヘキニ非ルノ識見カ付テ佐幕開港ノ説ニ變セリ是
レヨリ今井義敬ノ説ヲ容レ蒸氣船四艘帆船三艘且ツ兵器
等數多ヲ購求シ正寛等ト長崎ニ至リ西洋人等ニ接シ英人
アストン後年ニ至リ神戶領事ナレリ云時蒸氣船ニテ久留米ニ

來ルニ至レリ久留米ニテハ初メテ西洋人ヲ見シテ以テ人
心沸騰セリ其後藩士十餘人ヲ長崎ニ遣ハシ洋書ヲ學ハレ
メ密ニ藩主ノ小性ヲ勤メシ柘植善吾ヲ米國ニ洋行セシメ
タリ水野氏政權ヲ執ル時ニハ病ヲ以テ退居シ明治元年四
月十一日卒ス年四十七梅林寺ニ葬ル昌長少レテ讀書ヲ好
ミ博ク經史ニ涉リ兼テ武技ヲ能ス性剛毅方正威儀正肅議
論明辨決斷流ルゝ如レ夫レ家老職ハ五家ノ世襲專有スル
所ニテ人才乏敷昌長ノ時ニ至リ奏案書牘等ノ堆積事務ノ
留滯如何モスベカラサルニ至レリ昌長同職及ヒ參政ト議
シ一人ニテ擔任處分ヲ施シ數年ノ留滯ヲ一掃セリ昌長親
ニ事ル孝ナリ父ノ喪ニ毀瘠骨立官ノ爲ニハ身ヲ忘レ嘗テ
曰大臣タル者ハ身首粉碎シテ以テ國ニ報スヘシ公事煩劇

退食ノ暇ナシト雖モ之レニ處スル恬然其病ニ罹レル臥辱
上政事ノ諮詢ニ答フル數旬病是ヲ以益劇ナリ口敢テ勞ヲ
稱セス遂ニ以テ不起ニ至ル其言ニ慙スト謂ツヘシ對鷗公
嘗テ岩倉右大臣ニ面謁アリシ時馬淵篤恭ヨリ公ニ岩倉公
ハ如何ナル人物ソト問タルニ公ニハ岩倉ハ國ノ監物ノ様
ナル人ナリト答ヘラレタリ昌長ノ爲人想見スヘシ
今般異人罷越候ヲ付御家中之面ニ彼是申立候族も有之
哉了相聞候右は從來之御趣意も不相辨央俄了罷越候了
付てハ人之耳目を驚候段尤之事了候然所元來乃風習了
て漢土之外異國人之儀ハ人類も比せざる程了相心得
居候段ハ一般之事了候處一体歐羅巴諸洲之内了は風俗
了違候得共往古を變り治体却て條理を得君臣之分義

賓主之禮節も相辨居建國罷在候事實了至候てハ漢土歷代も難及程之儀不少且又天地間萬國布列致居候處を致大觀候得ハ彼我各一洲國之儀了付彼より信義を以來候者了ハ我よりも實意を以接候段ハ則公平之道よ可有之候剩へ諸術機械等傳習之儀追々御申入も有之候よ付以來共非類之御扱了難相成段は不及申殊よ公邊了ても登城拜禮等被仰付候國柄了付てハ向後彼より實意を表候上ハ時勢了應一相當之御扱可有之筈了候間猶又一統公平了令熟慮御趣意相辨候様可心得候事

十二月九日

水野正芳又藏ト稱ス後淡水ト改ム寛政五年二月二日生ル弱冠ニシテ用部屋詰タリ三十一ニシテ參政タリ後中老ト

水野正芳

ス爲人氣象凜烈峭直時ニ謂々ノ言ヲ發ス上下之レヲ憚レリ三男子アリ丹後丹波恭之進ト稱ス皆ナ才學アリ嘉永五年ノ大獄ニ罹リ三子共ニ禁錮セラル淡水更ニ高橋瀨兵衛ノ弟正剛ヲ養ヒ子トス其家ヲ繼カシム又藏ト稱ス二男丹波ハ既ニ吉田久太夫ノ養子タリ後式衛又々博文ト改ム三男恭之進亦タ故稻次正誠ノ名跡ヲ繼キ正訓ト名ク因幡ト稱シ鳴谷ト號ス家老脇ニ班シ祿千石ヲ食ム禁錮中嘉永六年十二月三日有馬右近ノ宅ニテ自殺ス年二十五丹後丹波ハ禁錮十餘年淡水ハ艱難ヲ經レモ逍遙能ク耐ヘタリ文久三年ニ至リ丹後丹波ノ禁錮ヲ解ル維新ノ時ニ至リ丹後丹波ノ二子及ヒ養子又藏等皆要路ニ在リ一日對鷗公親ヲ其家ニ臨シ繭絮若干ヲ賜フ蓋シ淡水積年ノ舊誼ヲ謝スルカ

吉田博文

稻次正訓

故ナリ是ニ於テカ寵光一門ニ集リ人皆忠貞ノ報スル所ト
曰フ尋テ淡水病ニ罹リ曰予今逝ク可シ乃テ辭世ノ和歌ヲ
賦セリ

世代々もほりくゝて老乃身代

心乃くまも水無月乃ぢら

明治二年六月十四日寶ヲ易フ年七十七瀬下町西岸寺ニ葬
ル又藏ハ正名ノ藩政ヲ執ル時ニ及ンテ應變隊ノ惣督タリ
後東京ニ出テ歸路横濱ヨリ外國船ニ乘リ遂ニ其行ク所ヲ
知ラス

水野正名

丹後ハ更ニ溪雲齋ト稱シ後正名ト改ム京師ニ出テ學習院
集議員ニ任ヌ文久三年八月京師變動ス七卿京師ヲ出テ西
下ス正名陪隨ス長藩ニ走リ大宰府ニ適ク慶應三年五卿歸

洛正名モ亦上京ス明治元年大坂ニテ參政タリ中老ニ班ス
久留米ニテ佐幕黨ト稱セシモノヲ悉ク處分セリ同年歸國
ス大ニ改革ヲ行ヒ佐幕黨ニ反對セル者ヲ採用シテ要路ニ
置ケリ同二年久留米藩大參事ニ任ヌ益權威アリ三年三條
實美公ヨリ上京ヲ促カセリ正名上京セシニ郡縣ノ制ニ變
セヨトノ命アリシニ承諾シテ國ニ歸レモ其履行シ難タキ
ハ應變隊ニテ攘夷說ヲ主張シ封建制度ノ思想ヲ抱キ小河
眞文古松簡二等同論ニテ拒ムヲ以テ正名モ手ヲ束テ如何
モスベカラス應變隊等カ長藩ノ脱徒大樂源太郎ヲ潛匿セ
シヲ以テ四年ノ春ニ至リ三條公ヨリ再ヒ上京ヲ促カシ嚴
令アルヲ以テ誓ツテ處分ヲ致スト上申シ歸リシカ手ヲ施
スニ術ナク悠々不斷ニテ日ヲ送レリ朝廷ニテハ久留米藩

ハ朝旨ヲ奉セスト認ノ官兵ヲ豊後日田へ出シ久留米藩ノ處分アリ
博文ハ學問該博事ヲ處スル緻密ナリ解囚後參政タリ京師變動ノ時ニ及ンテ再ヒ幽囚セラレ明治二年久留米藩權大參事ニ任ス兄弟政權ヲ握リ益權威アリ四年ノ變ニ至リ正名博文兄弟終身禁獄ノ刑ニ處セラレ博文ハ和歌山縣護送中船中ニテ歿ス正名ハ翌五年十一月青森縣獄中ニテ歿ス年五十水野氏ノ應變隊ニ於ケルハ猶西郷隆盛ノ私學校ニ於ケルカ如シ其事ノ大小輕重固ヨリ同日ニシテ論ス可ラスト雖其ノ身ヲ亡ス所以ハ一ナリ
馬淵直道貢ト稱ス性卓犖不羈容貌魁偉壯年ノ頃木莊成福等ト若津港ノ湖干ニ遊ヒ歸路佛寺ニテ僧侶ヲ辱シメタル

馬淵直道

ヲ以テ同行者悉ク譴責ヲ受ク直道ハ大寄會組ニ貶セラレ祿百石ヲ削ラル後大良義源對馬三公ニ歷事シ參政タリ祿百石ヲ加フ頗ル人望アリ村上量弘ノ變難ニ遭遇セシヲ以テ反對黨ノ歡心ヲ得嘉永五年ニハ反對黨ヨリ再ヒ參政登庸ノ計畫ヲ施セリ文久慶應ノ際京師ニ出テ學習院ニ出頭盡力セリ子篤恭彌太郎ト稱ス嘉永元年奏者番タリ後參政ニ任ス文久三年惣奉行ニ轉ス明治二年家令タリ大參事ヲ兼ヌ寵光優渥數褒賞ヲ加フ廢藩置縣ノ後職ヲ解キ身閑散ニ居ト雖ヒ名望愈隆シ西郷隆盛ノ亂久留米人士議論頗ル多シ篤恭大義ヲ執リ之ヲ喻ス方向乃テ定ル朝廷之ヲ賞シ緞紗一匹ヲ賜ワ十三年對馬公治家章程ヲ修ム篤恭ヲ召ス十五年賴萬公復タ篤恭ヲ召シ家政ヲ改革シ基礎已ニ定ル

馬淵篤恭

將ニ歸ラントシテ病ヲ廢ス年五十五天資磊落智慮深沈其
參政タル天下多時ノ際ニ當リ崎嶇艱難勤メタリト謂ツヘ
シ對鷗公ヲシテ能ク維新ノ偉業ヲ佐ケ大ニ褒賞ヲ蒙ル所
以ノモノ篤恭ノ力居多ナリ其終始力ヲ有馬氏ノ爲メニ竭
ス所以ノ者精忠ヲ以テ之ヲ稱スルモ過キタリトセス性酒
ヲ嗜ミ交ル所文人儒士多シ客アレハ輒テ酒ヲ命ス物薄ク
情厚ク其眞率亦タ嘉尙ス可キナリ

不破如一

不破如一孫市ト稱ス文政元年二月十九日生ル天保十二年
奏者番タリ同十五年九月參政タリ弘化二年十一月會計用
ヲ以テ大坂ニ出張セリ三年閏五月ハ義源公薨去ニ先ツコ
ト三月前ナリ偶如一ノ病ニテ籠居セルニ公ヨリ數回親筆
ノ書牘ヲ賜ヒ以テ參政ノ人品及ヒ大臣進退ノ下問アリ如

不破正寬

一時々奉答ノ書牘ヲ奉レリ參政中ニテ如一ノ公ヨリ信任
セラレ、レ、コト想見スヘシ嘉永五年眞木黨ノ大獄ニハ同僚
有馬重陳ト執政有馬昌長ヲ助ケテ處置セリ安政二年十月
二日江戸赤羽藩邸ニ在リ震災ニ罹リ壓死ス年三十八如一
爲人純良ニシテ智畧アリ且學ヲ好ミ政事ノ才ヲ抱ケリ弟
正寬美作ト稱ス初メ與三吉又タ左門ト稱ス才文武ヲ兼テ
最モ程朱學ヲ尊信シ和漢ノ歴史ニ通曉セリ安政二年兄如
一ノ跡ヲ繼キ奏者番タリ五百石ヲ食ム後學校ノ惣督ニ任
シ學政ヲ改正セリ文久三年初メテ參政タリ執政有馬昌長
ト二人ニテ藩政ヲ取扱ヘリ正寬初メ佐幕攘夷ヲ主張セシ
ニ後昌長ト佐幕開港ノ說ニ變シ其方向ヲ取テ政治ヲ施セ
リ徳川氏ノ政權ヲ奉還セシ時ニ至リ鍋嶋閑叟老ノ使者干

住大之助來レリ正寛專ヲ應對レ尙ホ兩肥兩筑ト合シテ幕
府ヲ勸メテ再ヒ政權ヲ握ラシメント計畫セシテ以テ眞木
黨及ヒ壯年輩ノ惡ム所トナリ明治元年正月二十六日夜政
府ヨリ歸宅ノ途中ニテ壯士二十四人路側ニ要シ之ヲ刺殺
セリ其著ス所富國問答等ノ書アリ

義源公ヨリ不破如一へ賜リシ書牘

用席申付候人之儀猶又熟慮致候處自分ヲも兄弟之處何
分安兼候ヲ付久太夫ハ相止先今日之處も延置候丹後處
少々儀及候都合も有之候勿論未然々ハ無之前鳥渡相咄
申候位之事ヲ候右ヲ付前以其方ヲ承置度事有之候其方
書取之中ヲ同人之處ハ論方も有之由申越候萬一同人用
席ニ相成候ハ、今迄之心得ヲて異論押テ稱候様ヲてハ

事体之害ヲも可相成其處申聞方ハ勿論其方考有之を被
存候ヤテ第一ハ和泉茂右衛門始同志乃者を決テ機樞乃
儀相咄相談致候様乃儀無之を申處ハ其方より申聞候得
ハ實以其都合ヲ相成可申哉此度ハ先日よりも承知之通
機密ハ兼テ預リ乃者之外ハ不承公明之事を行ヒ候處同
人心得違ヲテ格別之志有之者ハ極密ヲても相咄候百
事洩候様ヲてハ大害を生候を被存候ヲ付先其方考承置
存候勿論同人申付候を申考は未付候得共第一右之一條
を不承内ハ考様も無之候ニ付右之段申遣候先ハ市郎兵
衛無事ハ共考居申候以上

閏五月十五日

筑後

孫市ハ

別紙を以申遣候丹後之處一体先々用よを相立可申候得共先頃より主膳都合も有之只今申付候ハ用席中之都合も如何可有之其上一体も説不逢を申處よて如何之都合了可相成哉を何分落兼先見合を被存然存寄も候ハ可申越候外番頭之内了考は無之候哉先頃申付候内了ても先々迄申付置候て無支を申見込之口有之候ハ随分申付候ても格別支も有之間敷と被存候得は猶相考可申越候此度用席乃人ハ自分も極々當惑致し候事

不破如一ヨリ奉答セシ書牘

御書謹て奉拜見候御用席被仰付候人品乃儀被遊御熟慮候處兄弟乃處被遊御安意兼候了付先日乃處は先つ被遊御差延置候段奉畏候御先例も追々御坐候上乃儀了御坐

候得ハ新了被仰付候をハ格別違ハ申奉存候得共後來乃儀深く愚慮仕候得ハ何分安兼申候了付愚考仕候趣奉申上候處上了も被遊御安意兼被遊御差延誠了以難有仕合了奉存候併只一筋了存籠候儀了御坐候得ハ過慮乃偏見難免儀可有御坐其邊了至申候てハ重疊奉恐入候仕合よ御坐候サテ丹後少々儀及候都合も御坐候由勿論未然をハ無御坐候趣且又同人之處異説乃一條或は機密洩不洩乃一條前以被遊御承知置度被思召候了付御委細被仰聞候趣奉畏候此儀反復思慮仕候了一度定説を持し候上容易了變し可申譯ハ無御坐候得共彼者の爲人天性卓拔獨歩乃才ハ難申上志學且朋友切蹉之功積候上よて往々御用了相立可申見込乃人物且又深く當時了志し

一念罷在候得は實説と申候ても友人工夫の上りて定り候儀相考申候儀も御坐候得ハ萬々事實も臨ミ申候得え力量乃不足前日乃異説も或は空論ヲ屬一候儀も果て可有御坐其節を誠ニ後悔乃念生一可申其機ヲ乘一利解仕候ハ、異説を固有仕候儀は難出來奉存候乍併知人乃明ニ乏敷其上不肖之心中を以て他乃心中推考仕候も淺慮之至ニ御坐候得ニ何卒私一人前日乃空論今日後悔罷在候計ニ無御坐同志乃輩今日事實ヲ臨み候輩ニ何れも同然乃儀ニ御坐候哉ニ候處事實傍觀仕候輩前日論嚴重罷在候故兩説ニ分れ申候然ハ事實を見申候面ニ至愚ニ御坐候て傍觀乃面ニ卓拔とは不被存畢竟自然之勢兩端ニ罷成候故説亦兩端ニ罷成候儀と奉存候殊ニ又丹後ヲ意

説を自身より見開き候儀とも不被存候間事實ヲ臨み候ハ、先ツハ異説も解可申哉ヲ奉存候併一自己之才力も不顧空論仕候身を以推考仕候儀ヲ御坐候得ハ是亦空論ヲ屬一可申哉も難計奉存候其上一端兩端ヲ分れ候勢御坐候得ニ事實ヲ臨み候ても我意を持重仕候哉其邊も掛念仕候得ハ掛念ニ御坐候得共根元ハ何れも愛國念ヲ至り候てハ志寸分も相違不仕共當人乃性ハ我意を固有仕候性質ヲてハ無御坐候得ハ夫程乃儀ニ至り申間敷奉存候サテ又機密洩不洩乃一條愚考仕候ヲ重き御役儀被仰付候上ハ洩一候様乃儀無御坐候ハ勿論乃儀ヲ御坐候得共親友之間難忍私情より推考候得ハ洩出之恐全く無御坐候ニ何分りも見定難申御坐候乍去傍觀之輩頃日

乃口氣承り罷在候了有職乃人他乃助力を借り候様乃尾
暗き事了てハ決て不宜公明正大自己乃力量を盡し候を
今日乃肝要有之候段右等乃定識了御坐候得ハ萬一洩
出乃恐も御坐候節ハ隨分諭し方有御坐哉了奉存候併し
友人切磋乃情難止事情掛念仕候得ハ是亦斷然を仕候見
込ハ難付御坐候右等乃都合了御坐候得も無事体より申
上候得ハ無事乃人第一を奉存候併し有志を差置無事の
人第一と申上候も今日了御坐候てハ殘念至極了奉存候
乍去是迄も兎角事有志乃輩と眼傾き易く御坐候得は此
邊乃處何分了も斷然を仕候了簡付兼申候
右愚考仕候趣奉申上候後來を察別仕候洞見乃智識乏敷
御坐候故前後も拘り何分了斷然を仕候見籠難付誠了以

奉恐入候猶此上ハ被遊御明斷候様奉願上候且又先日も
申上候通何れ共御家老御用席信實中より出可也乃人物
了無御坐候てハ決て宜敷有御坐間敷其邊ハ申上候迄も
無御坐候得共猶又被遊御配慮候儀今日之至要を奉存候

愚按スルニ久留米人土黨派ノ肝胎セシハ此一端ノ事ニ
シテ義源公ト不破如一ト往復ノ書牘ニテ其一端ヲ窺
フニ足レハ猛烈ノ二時ニ當リ在朝人士然レハ温順テ永ク人
士ノ説ハシク烈ノ二派ニ分レタリ然レハ公ヲ順テ永ク人
世ニ在ラシク惜哉ハ二説ヲ混同セラシテ各其處ヲ得セシ
メラレシニシテ早ク捐館セラシテ以テ各其處ヲ得セシ
分久慶應ノ永五年ニ至リテハ政權ノ競争過激シ祖暴ニ陷レ
文者或ハ之ヲ假テ知ラシテ黨派排撃ノ具ト爲サ、ルモ
ノル者或ハ之ヲ假テ知ラシテ黨派排撃ノ具ト爲サ、ルモ

木村重任
木村重任三郎ト稱シ赤村ト號ス天保九年江戸ニ遊ヒ昌平
費ニ入り傍ヲ教テ松崎謙堂ニ受ク十二年東海東山北越諸

州ニ遊ヒ水戸會澤正志藤田東湖等ノ指導ヲ受ク後明善堂ノ講官タリ郡奉行ニ轉ス嘉永五年眞木保臣等ト計畫スル所アルヲ以テ忌諱ニ觸レ囹圄ニ就ク文久三年囚ヲ解ク八月命ヲ奉シ上京親兵ノ隊長タリ學習院用掛ニ任ス京師變動再ヒ囚ニ就ク慶應二年囚ヲ解ク明治元年側物頭タリ藩兵ヲ率井東京ニ之ク惣督府參謀補助タリ八月軍務官判事ニ任ス十一月久留米藩少參事ニ任ス六年高良神社宮司ニ任シ兼テ少教正ニ補ス十五年從六位ニ叙ス積年勤王ノ功ヲ以テナリ十七年十二月歿ス年六十有八資性恢濶剛毅屈セス其讀書章句ニ拘ハラズ必ス其要ヲ撮ム其ノ人ニ接スル談笑和夷善ク戲謔レテ虐ヲ爲サズ流離顛沛幽囚年久ト雖モ其志屈セスコレ人ノ能ク及フ所ナラス

喜多村吉尙

喜多村吉尙彌六ト稱ス天保十五年馬廻組タリ祿二百五十石ヲ食ム義源公ノ時近侍タリ對鷗公ノ時郡奉行ニ轉ス頗ル治績アリ文久四年側物頭格ニ陞リ參政ニ叙ス文久慶應ノ際命シテ上京セシム公卿諸侯ノ間ニ往復シ專ラ王命ヲ遵奉シ幕府ヲ匡正スルノ說ヲ唱フ參政ニ任スルニ及ンテ同僚不破正寬吉村輝方等ト戮力同心謀議計畫スル所アリ而シテ正寬奇禍ヲ得吉尙モ亦タ朋黨ノ嫌疑ヲ以テ罪ヲ得禁獄一年ニシテ國是ノ妨タルト稱シ以テ死ヲ賜フ享年五十吉尙幼ヨリ武技ヲ嗜ミ傍ラ文學ヲ好ミ蕃山熊澤氏ヲ慕ヒ頗ル集議和書外書等ニ通ス爲人胸襟灑落事ヲ處スル果斷アリ性酒ヲ嗜ミ白ヲ舉ケ滿ヲ引キ戲謔高談一坐ヲ聳動ス絶命ノ詩ニ曰ク

吉村輝方

人臣忠直惟安命順逆死生又那疑。

吉村輝方武兵衛ト稱シ初メ辰之丞ト稱ス風岸孤峭讜言諱
マス人或ハ之ヲ忌ム大良公ノ時小性ニ任ス後惣奉行添役
郡奉行等ヲ經參政ニ登庸セラル其郡奉行タル同僚ニ西原
湊アリ湊ハ反對黨ナルヲ以テ同僚一坐中ニテ終ニ一言ヲ
接セス其狷介ヲ見ルヘシ德川幕府ノ末造京師ニ出テ專ラ
會桑ニ交リ公武ノ間テ周旋ス當時桑名ノ井田五藏等ト並
ヒ稱セラレタリ維新ノ時參政ヲ以テ東武邸ニ在リ君夫人
德川氏ノ歸國ニ隨行シ大坂ニ來ル當時ノ執政水野正名等
ト議論協ハス同所ニテ同姓吉村多門等促シテ屠腹セシム
久德重德與十郎ト稱ス意氣慷慨義ヲ見テ敢テ爲ス才文武
ヲ兼メ義源公ノ時小性タリ文久三年使番格公事奉行タリ

久德重德

北川正征

德川幕府ノ末造京師ニ出テ吉村輝方等ト專ラ會桑ト交リ
公武ノ間テ周旋ス元治元年八月京師變亂ノ時功アルヲ以
テ朝廷之ヲ賞シ金若干ヲ賜フ我カ藩ニテモ其功ヲ賞シ側
物頭ニ進ミ祿五十石ヲ加フ京都留守居役ヲ經テ後公事奉
行タリ維新ノ時ニ至リ禁獄セラレ同二年正月廿四日國是
ノ妨タルト稱シ死ヲ賜フ

北川正征外波ト稱ス村上量弘ノ叔父ニレテ氣力人ニ過絶
精緻緻密大良公ノ時惣奉行附添役ニ任ス義源公ノ大儉令
ヲ發シ財政ノ入ルヲ量リ出スヲ爲スノ制ヲ定メラレシハ
悉クソノ計畫ニ出テサルハナシ公薨シ對鷗公襲封ノ後君
夫人德川氏婚嫁ニテ殿宇ノ造營大禮ノ費用金額巨萬ヲ費
スモ財政乏シキヲ告ケサルノミナラス公ノ晩年ニ至リテ

ハ巨萬ノ儲蓄ヲ余スモノソノ力居多ナリトス後參政ニ登庸サレ用人格ニ進ミ祿五十石ヲ加フ慶應元年六月ニ財途支出多端ノ時ナルヲ以添役局ニモ出頭万端協議ヲ遂ケ猶更財途ノ事務ヲ擔任スヘント命セツレタリ正征旁ヲ文雅ヲ好ミ書ハ廣澤ノ風ヲ能クレ和歌ハ眞木和泉船曳大貳ヲ師トシ長短歌ヲ善クス三年十一月歿ス年五十七其辭世ニ曰ク

いほまでもおもひくく一世乃中も

とふ了世命かたりに死りぬれ

歳暮乃題りて

かたに死らぬおの吾身りも人並り

く此行といはつものりぬるか死

月乃題りて

えは乃花尾花むし乃音かたへても

月乃あは死り忘くも乃死後

子正介亘ト稱ス爲人識悟超詣文理緻密幹事ノオアリ郡上奉行タリ後ナ京師ニ出テ會桑ニ交リ公武ノ間ヲ匡正ス維新ノ時ニ至リ禁錮セラレ明治二年正月廿四日國是ノ妨ケタルト稱シ以テ死ヲ賜フ年三十四其家ヲ出シ時

三十路あまりをみいをりを立出て

まぬいつちりやをみ渡るらん

其辭世ノ詩歌ニ曰ク

櫻花をくをよまぬて了乃えさるん

散りゆく身をよぬりるる哉

更棒寶力臨死期、離筵訣飲酒杯遲、魂歸漠漠魄歸地、孤劍索然聲到時、

石野氏恒道衛ト稱レ初メ道太郎及ヒ理右衛門ト稱ス父ハ矢柄母ハ狩野氏天保八年十二月十三日生ル對鷗公ノ時小性タリ万延文久ノ際江戸ニ在リ時勢ノ變遷スルヲ感慨シ建白書ヲ呈セシテ以テ大ニ嫌忌セラレ國ニ歸サル小性格ニテ藩校ノ肝煎役ニ轉ス文久三年使番格ニ進京師ニ出テ在番方兼周旋方タリ元治元年三月京都ニ於テ惣奉行附添役タリ二年開成方兼帶或ハ小倉出張或ハ四日市詰トナリ同所變動ノ際ハ大ニ盡力セリ氏恒爲人容貌羸弱婦人ノ如クニシテ中實ニ沈毅四日市變動後再ヒ同所詰ニ至リシニ明治元年四月歸國ヲ命セラレ歸路豊後日田用達三松寛右

松岡良實

衛門宅ニ宿シ寛右衛門ニ謂テ曰ク僕今日ノ歸命吉タラシカ凶タラシカ凶タラハ則チ今日ヲ以永別離トセン歸ルニ及ンテ禁錮セラレ二年正月廿四日國是ノ妨ケタルト稱シ以テ死ヲ賜フ年三十三辭世ノ和歌ニ曰ク

おりのけい大和のいきを其まゝ
とてぬちゆく身ぢうらみ飛ぶ

松岡良實傳十郎ト稱ス村上量弘ノ從弟コレテ俊邁不群神悟夙成才學ヲ以テ世ニ稱セラル詩文筆ヲ下セハ立處ニ成リ量弘ノ遺風アリ幽囚中文人畫ヲ學フ亦タ超凡ナリ慶應年間京師ニ出テ其後征長ノ際藝州小倉等ニ出張シ專ラ諸藩ノ間ニ往來周旋セリ惣奉行附添役タリ維新ノ時ニ至リ禁錮セラレ二年正月廿四日國是ノ妨ケタルト稱シ以テ死

松崎發

ヲ賜フ年三十二
 松崎發誠藏ト稱レ初メ虎太ト稱ス爲人思慮詳明才識俊逸
 監察タリ文久二年前島津左府公ノ初テ京師ニ出ツルニ際
 レ天下ノ人心騷擾ス發モ亦タ京師ニ在リテ天使左衛門督
 大原重德卿奉勅關東ニ下ルニ及ソテ發モ亦タ薩藩ノ吉井
 幸輔等ト共ニ隨行ス一日發ヨリ幸輔ニ謂テ曰ク今日ノ形
 勢貴兄等ト協議セシモノハ貴藩ニテハ貴兄等ノ論ヲ容レ
 一々履行セラレシモノ弊藩ニテハ然ラス協議セシモノハ悉
 ク虛言ニ屬シ實ニ貴兄等ニ對シ汗顔ナリト流涕シテ談セ
 シヲ以テ幸輔ニハ其誠心ニハ感セシ由ニテ其後薩藩ヨリ
 大久保市藏吉井幸輔兩人使者ニテ來リシ時ハ發ニ面會テ
 請ヒ應答致セシナリ後開成方ヲ兼テ今井義敬ヲ助ケ殖産

伴君保

興業ノ爲メニ大ニ盡力セリ明治元年禁獄セラレ二年正月
 廿四日國是ノ妨ケタルト稱レ以テ死ヲ賜フ年四十
 伴君保勝三郎ト稱シ惕堂ト號ス學ヲ好ミ神童ト稱ス性沈
 着篤實脚襟洒落言語諧謔ヲ交フ明善堂講官タリ後用人見
 習ニ班レ參政ニ登庸セララル祿百五十石ヲ食ム公事奉行ニ
 轉ス久徳重徳本莊存戸田信一等ト明清律ニ依リ刑法艸案
 ナ編成ス維新ノ際奥州征伐ノ參謀タリ事平クニ及ソテ權
 少參事刑法主任タリ明治三年八月八日歿ス年五十五
 戸田信一藤蔭ト稱シ初メ熊次郎ト稱シ滄洲ト號ス爲人剛
 直質樸ニレテ文武ヲ好ミ大良公ノ末年監察タリ義源公ノ
 中興ノ業ヲ唱フル猶其職ニ在リ貴權ニ媚ヒス強豪ヲ避ケ
 ス專ラ耳目ノ任ヲ盡シ奢侈ノ弊ヲ矯メ儉素ノ風ヲ興スモ

戸田信一

ノ與カリテカラアリ後ナ公事方調役ニ轉ス其ノ官ニ在ル
典令故事ニ熟シ嘗テ久留米年表四卷令條私抄三卷ヲ編纂
ス且ツ詩歌ヲ嗜ミ官務繁劇ノ際ト雖未ダ嘗テ吟咏ヲ廢セ
ス其江戸赤羽藩邸ニ在ル梁川星巖ヲ師トシ詩ノ是正ヲ請
ヘリ永代橋雜咏一時人口ニ膾炙セリ其詩ニ曰ク
水面無風鏡樣平。紅樓翠殿映波明。三叉江上一輪月。影入千
家歌吹聲。

詩歌遺稿紀行等若干卷アリ明治十五年十二月二十一日歿
ス年七十八

久留米小史卷之十八終

船曳鐵門校正
戸田 幹編纂

久留米小史卷之十九

第四

君臣言行ノ五

對鷗公

對鷗公治ヲ藩國ニ布クヤ學校ヲ改造シ規模ヲ宏壯ニシ始
メテ釋奠ノ禮ヲ舉ケラレ外警日ニ逼ルニ及ンテヤ多ク巨
艦ヲ購ヒ兵制ヲ變更シ故ヲ以テ征役皆功アリ藩屏ノ任ヲ
盡サレタリ朝廷大ニ之ヲ褒シ田一万石ヲ加賜シ尋テ陸海
軍ノ功ヲ賞シ三年間五千四百石ヲ賜フ

本莊存

本莊存仲太ト稱シ適所ト号ス星川ノ長子ニシテ能ク家學
ヲ繼キ純孝ニシテ氣節アリ明善堂ノ講官タリ安政萬延ノ

際江戸藩邸ニ祗役シ講學所ニ在リ偶徳川幕府政衰へ時勢
變遷スルニ及ンテ我カ藩邸ニテハ上下儉安國政ノ振ハサ
ルヲ憂へ兩度建白書ヲ君側ニ奉リ君徳ノ瑕瑾政事ノ得失
ヲ論スル議論剴切憤惋激昂且又此際參政伴君保ニ與フル
ノ書アリ是亦議論剴切ナリ弟榮三郎ニ寄スルノ詩ニ曰ク
家書兩次問平安。縷々心情墨欲殫。誰識吾儂身後計。忍教三
弟五兒寒。

後京攝間ニ出テ頗ル周旋ノ力ヲ盡セリ且諸藩使節等モ數
回命セラレタリ公事奉行副役ニ轉シ伴君保等ト明清律ニ
依リ刑法艸案ヲ編成セリ明治維新ノ時ニ至リ禁獄セラレ
明治二年正月廿四日國是ノ妨ケタルト稱シ以テ死ヲ賜フ
昨夜春燈々影亂。初知今日在風前。滿腔熱血忠兼義。笑問是

非向碧天。

斗筭之祿致斯躬。王事蹇々西又東。五十一年一場夢。春風々
裏先花紅。

壯年ノ頃ヨリ記セシ適所日記ト題セシ三十冊ト外ニ詩文
稿若干卷アリ

乍恐奉申上候書取

小臣之私式

何共恐多奉存候得共存付候儀内輪にて彼是申立候てハ誹謗の筋にて臣
下の身分不相濟候儀に可有御座奉存候勿論世臣大祿の衆追々建白の次
第も御座候て當節世上の形勢逐一違上聞居候半左候ハ私式の上書杯
とハ近頃嗚呼々間敷可被爲思召奉存上候得共私父本莊一郎儀御先々代
權非常の思召を以草莽中より被召出追々御取立被仰付私ハ至候て
も結構被仰付置重々難有仕合冥加至極お奉存候去れハ御奉公筋おハ
何も新古の差別も有御座間敷と區々の寸衷奉獻度左の三ヶ條言上仕候

勿論腐儒の陋見 上覧の程 御面倒る可被爲 思召候得共忠愛惻怛の至情より建白仕候儀も付乍恐 御憐愍を以 御一覽被 仰付被下候様 重々奉願上候右の趣御序 御前宜様御取成被成可被下候 一御君徳被爲積候様有御座度奉存候事

但御君徳として別段の儀も御座 御平常の 御行狀光明正大として 何の影も陰も無御座天下後世迄も御慕ひ申上候様萬事御謹慎可被 遊御事も御一己の御樂迄も 御心を被爲用候様の儀無御座様奉存候 乍恐御家督以來万般 御先代様御遺志被爲受繼御國政向格別被爲盡

御丹精候も付只今にては國家士民も至り安樂に罷成候儀第一の御 君徳に被爲在候小臣の私共迄難有奉存候然所始終一致と申儀も古來 の賢君方にも難しとせられ候事には御座候得共是迄被爲積候御君徳 半途にて被遊 御打捨候てと折角多年御苦辛の甲斐も無御座水比泡 と罷成候儀も乍恐扱々残念至極第一 御祖先様への御面目無御座御 事に御座候得は猶更御一身の御艱難御忍被遊候儀當節猶更專要に御 事に奉存上候ケ様申上候ての諛言に様にも可被爲思召候得共乍憚

御明敏に被爲在古來に賢君方にも不被爲愧候御資質に被爲在候間乍 此上御君徳被爲積大日本惣御國中にて流石 有馬家の天下に規範に も相成候杯と評判仕候に於 御前の勿論御家中一統御領中百姓町人 迄も無早難有可奉存且一統に面目實に天下に肩廣き事に奉存候是迄 多年種々 御苦辛被遊候上猶又被遊 御艱難候様にも近頃難申上 筋に御座候得共兼て被爲 聞召候通近年異國人種々に難題申立候末 只今にては御府内へ在留且勝手次第横行仕候元來彼等大日本を伺候 儀の數百年來に事に有之候所此節の公邊一時偷安に策に出候處にて は十分彼等此術中に陥り纏る一年餘に交易にて天下一般諸式高直等 にて上下共に難澁に仕合困窮此時にて御座候就ては天下に一向不折 合に相聞へ萬一此上凶作等にては御座候も天下一時に蜂起仕候儀も 難計既に去冬丹波福智山勢州久居杯大分騒立候由其外にても少くも の事御座候趣承及申候且當春以來野州總州邊諸漢人共追々徒黨及 狼籍候趣に承知仕候實に以天下の形勢累卵の危きに相見申候左候得 り中々片時も油断不相成場合に御座候間唯今の内是迄被爲積候 御

君徳一入御磨被遊國家磐石の安樂に至り候様有御座度朝夕奉祈念候右
御君徳の御修業にハ勿論被遊御讀書和漢古今之賢君事蹟政治の是非得
失國家の廢興存亡等 御研究の儀は勿論の御事にハ御座候得共學問
とて澤山の書を讀古今の事業を覺候進實學にてハ無御座候一冊讀候
ても今日實用に取用候儀本法の學問と申ものに可有御座奉存候殊更
君上の學問と文字章句上の講習計にてハ無用の苦心にて却て倦厭
の惰氣を生し終にと書物を見るもうるべく相成候就てハ乍恐右様の
實地有用の 御學問に被遊 御着眼候様奉存上候扱右の御研究にと
第一御家老御用席又ハ御側廻の面々存寄等時々於御前御論判被遊外
様向は存寄等書取にて勝手次第言上仕候様縦へは唯今御國元より參
着仕候節杯與詰重役衆は勿論諸士中文武稽古方或ハ御領中百姓町人
共の苦樂且ハ道中筋見聞ハ次第等得と被遊 御聽扱又外様向にてハ
何事なと共一事まで書取を以差出夫を御土産と相心得候様ある 御
所置共被爲相立尤御在國ハ節も御同様江戸表且諸藩ハ形勢夷變ハ舉
動共被爲開召候ハ一統ハ心得方も屹度引立道中筋にてハ無用ハ風景

愛斷而已に不差過萬事に心掛可申左様御座候得ハ態ともさく世間の
探索に相成候様右様の所作は色々面白き御仕法も可有御座候兎角
君臣一体上下の情誼相通候様被爲廻 御心慮候様乍恐奉存候右様
御實心より御仕向被遊候は御家中一統の士氣も振立末々の者迄國家
への忠節各心掛候様罷成候は必然の勢に奉存候ケ様の儀は常節第一
急切の 御君徳御磨き被遊候御仕法に可有御座奉存候乍去言上仕候
ても御取用無御座候ては全く虚飾と申者にて御家中一統の心魂に通
徹仕候儀は決て無御座候
東照宮の御詞に諫言ハ一番鍵よりも難しと被仰候由申傳候成程同輩
中にてハ異見ケ間敷儀は誰も好んで致候儀には無御座親類ハ親敷中
カ無據事にて存寄等も申聞候夫もへも容易に出來兼候儀ハ御座候得
ハ況て目上の人には猶更の事にて御座候殊に君上への忠言と申儀は
實に身命抛捨不申候てハ難出來事に付一番鍵よりも難しとは被仰候
半左候得ハ十分の御引立無御座候ては存分存寄等言上仕候儀は有御
座間敷奉存候申上迄も無御座候得共和漢古今共賢君方には自分の了

簡は先差置諸人の存寄等篤と相尋其善と取用ひ千万人の智慧を我智
恵と相心得候成程一人の了簡と申者は如何に才智發明にても限り有
る儀に御座候間右様諸人の智慧を被借候譯にも可有御座哉返すも
も御實心より御家中一統の存寄被爲開召度どの御誠意通徹仕候様
被遊候儀肝要の御事に奉存上候唯一ト通り表向御手数敷迄の御觸等に
ては逆も言語の開候儀は有御座間敷奉存候何分にも被爲盡御心慮回
家磐石の安泰に罷成候様此節御君徳猶更御磨き被遊候様乍恐重々
爲國家爲士民爲天下懇願仕候儀他念無御座候

一御大儉筋猶更御殿密御取締有御座度奉存候事

但古人の言に由儉入奢易由奢入儉難と申名言も御座候て平常不自由
無之相慕罷在貧乏に相成候にて俄に鹽菜とて取續候儀は實に難澁至
極に御座候所御家督の御より御先代儀御遺志被爲受繼是迄如
何計りて御艱難被爲忍候御事にて其御實境被遊御熱知候得は此上
御大儉被爲相盡候逆も左程御苦勞に被爲思召候御事は有御座間敷
奉恐察候尤先年より追々被仰出候通人心壓迫に及候ては禍患は甚

にも可相成候得は一時は御宥免は其咎は御事にて文武は政にも一張
一弛と申事も御座候て至極御當然に乍恐奉存候去として時勢と申儀も有
之當節に至候ては實に無心元世上は形勢に相聞候得は乍此上御家
督御比通猶更御殿密に御取締被遊候儀に可有御座奉存候併し是逆も唯
唯御觸面而已にては御國中士民迄難有心服仕候儀は如何可有御座哉第
一御手許御奥向より御殿重に御省察被相違御實心より國家士民の
爲には如何體の御艱苦も不致爲願候との御誠實に被爲在候は御
觸等御取締無御座候ても御領中に警渡り決して心得違の者は有御座間
敷前條にも言上仕通り惚て萬事共御君徳より流出仕候儀に無御座候
ては人心に通徹仕候儀は無御座候幾重にも御大儉の御趣意猶又御殿
密御取締被爲相盡候様乍恐奉懇願候扱右御大儉の儀も金銀米穀等御寶藏
へ積み貯へ無用の失費相立不申候様取締可申儀は勿論の事に御座候
得共唯々積み貯へ候として儉約の大意は相叶申間敷奉存候無用の費
を除き有用の事おは存分相用候様前後緩急の差界第一の備めて儉約
と吝嗇と其形は似寄候得共眞實は大相違ひて御座候論語も大禹の

非飲食而致孝乎鬼神云云と孔子も稱歎被置候は大禹の儉約千載の手本
あて可有御座奉存候就て此節御大儉被相盡候ても御家中御渡方御領
中御救又は文武の御世話且武器玉藥兵糧等非常の御備十分に被爲行
届候儀有御座度奉存候尤只今迄御大儉被相盡候に付追々御備向も相
立候趣には承知罷在候得共乍恐未十分の御備とは難申第一江戸表
御屋敷内糧米の儀時々於御當地御買入に相成程御國御廻米於大坂
表御拂右金子爲替を以御當地にて時々相場御買入の儀海上覆没等
の心遣も無御座候得は目前の利害より申候得は至極御便利の様おも
一通りの俗眼あては相見可申候得共此儀は御國体にも相拘り候儀
にて近頃御手漕の御仕法と乍恐奉存候二十万石以上の御大家にて於
御當地買入の諸侯方御當家と井伊家計と兼々承及居候小諸侯にても
先は其在所出産の米穀積廻し候事に相聞へ夫も一ヶ年分も一同御買
入と申せばまゝしもの事にて御座候得共月々御買入と申候ては下々
極々貧家にて毎日一升買の譯に相當十八國主の御大藩には扱々御手
漕の御事にて小臣の私共迄世間へ對し赤面の仕合に乍恐奉存候殊に

當節異國人共追々入込罷在候得は何時にも如何体の變儀差起り候哉
も難計其節は東海筋運漕相妨候儀は顯然にて萬一半ヶ月の一ヶ月も
廻船通路斷絶仕候は江戸中數百萬人の食料及不足其場に至り如何程
大金にても迎も買入は出來兼可申哉其邊相考候得は實に以恐敷事共
にて御屋敷中男女惣人數凡三千人も有之候由如何取續可申哉扱々懸
念至極の御事あ奉存候御大儉と申ても々様御國体も關係候儀に
は聊省略可仕儀に有御座間敷奉存候昔語に青砥川にて錢を撫ひ杯儉
約の大休を得候事と兼々愚存罷在候就ては大船二三艘(軍艦製一艘蒸
氣船一艘通商船一艘都合三艘萬一御勝手方御繰合出來兼候は御領中
福有の者へ獻金爲仕候り又は當分御借入にても可宜急々御製造御座
候様奉存候都合次第には御國産の内長崎横濱箱館邊へ乗出し異人交
易等仕候は莫太の利潤に相成可申兩三年中には右船製造の費位は取
返し可申其邊は猶屹度妙計も可有御座候)急に御製造にて米穀は勿
論其外御屋敷内常用の炭薪茶紙蠟油等の御國産も追々御積廻に相成
候は一旦は御失費の權にも相見候得共永久れ處にては格別の御便利

に相成可申哉奉存候扱又勤番交代等も追々は右大船にて品川沖迄海上罷越候得は道路無用の失費も無御座且諸士中始船中の働も自然習熟仕異人防禦等の修行も不圖出来候杯一事にて諸事都合宜敷相成可申奉存候扱右の序に奉申上候是迄大坂御廻米の儀も同所並兵庫邊より御雇船にて爲積登に相成候所年々一艘二艘づゝ及破船數千俵の米穀鹽入に相成勿体もなき事共にて御座候元來御領中百姓共一年中寒暑の厭さく相働き漸く出来秋の上一粒撰にて上納仕候米穀に御座候得は所謂粒々皆苦辛にて御座候夫を海中へ打込魚の餌食に仕候ては御損失は第二番御領中百姓共へ何と申譯可仕哉實に涙のこぼれ候事共に御座候且右難船に付て之檢使等被差立候杯彼是別段の失費も相立候儀に御座候畢竟御借船にて船頭共等閑に相心得且古船等にて右様の破船に及候儀も可有之哉に奉存候就ては大船急に御製造御座候様重々奉至願候御大儀と申も少様の大本相立不申候ては只々衣服飲食等の節度迄にては眞の儉約と申者にては無御座候返すくも御君徳よか御大儀被爲相盡候様有御座度爲國家士民重々誠祈仕候儀他事無

御座候

一文武筋十分 御引立有御座度奉存候事

但是迄追々御引立も御座候得共兎角實意の修行仕候面々無御座御用に相立候人物も出来不申候一昨年明善堂御再建にて文武合一の御趣意には相成趣に御座候得共學制本領の所相立不申候ては國家有用の人物は出来申間敷奉存候全体學問は五倫五常の筋を講習仕人の人たる道を心得候爲めの修行に有之候得之勿論貴賤上下の差別も無御座筈に候得共大學序文にも相見へ候通極意の修行は身分宜敷者程猶更學問修行可仕筋に有之旨相示被置候是迄御國元にて文武共諸頭以上にては其者心得次第の様成都合に相成居候年來の風習とは乍申以外の奉存候諸頭以上こそ重き御役儀も相勤且は一組の支配引受候身分にて萬一の節は采配の下に一組の死生も相決候儀にて治にも亂にも其才略智謀無御座候てと御用相勤り兼可申候其身分中々以平士以下指揮を受候面々之と格別の事に候得と平常共文道武邊共組下に先立且之業前も組下へ教導仕候位の力量無御座候ては平日之兎や角間

に合可申候得共非常の節一組の進退等と出来兼可申奉存候殊更番頭
以上と 御國政の機密にも相加り候身柄お御座候得は別て學問格別相
磨き平常忠義の心腸鍊立輔君愛民の實地に心掛國家の御用引受候上
は忠實に相勤聊我身構等仕候様の未練の俗心無之様幼年より修行可
仕儀第一肝要に奉存候武邊筋逆も同様の事にて只一藝のみ心得候と
て平士の面々と一時の勝負を争候杯は全く一人の派にて諸士の上に
立者の修行には無御座候惣て大臣世家の面々は文武共大要根本の礎
を能々吞込候こそ本法の學問とは申べけれ君上の御學問は猶更の御
事に奉存候扱明善堂御再建に付ては屹度深き 思召も可被爲在奉恐
察小臣の私共迄も此節こそと憤激仰望罷在候所不圖も一昨年 御滯府
に相成候に付出役の面々は勿論御家中一統共鹽被仕折角振立候氣勢
も相弛み申候乍去當年は早々 御歸國にて文武の御引立等格別可被
爲盡 御丹精御事に奉恐察千歳の機會此時にて屹度御家中士氣も振
立候半と相樂み罷在候所又々當年も御滯府被 仰出勿論 公邊より
の命に御座候得は御餘儀もなき御事に可有御座今更不及是非御事に

奉存候此節の 御滯府は御國元御家中は不及申御領中人氣も如何可
有御座哉嘸早一統共力落候半と愚察罷在候御國元も近來格別の凶作
と申にても無御座候得共何となく差詰り別て兩郡水下杯は年々の洪
水殊更去夏古來曾有の洪水 御入國以來の大變に可有御座何故の天
鑑にて候哉と小臣の私共迄恐縮罷在候且夷蠻交易より諸式高直に相
成別て去冬米大豆等非常の高直にて上納方餘程混雜仕候趣に傳承仕
候是迄の差詰りの上右様相嵩み候ては如何計困窮仕候哉水下杯は離
散の勢も有之哉に密に承知仕爲國家奉恐入候就ては當年の 御歸國
御國中士民一統共御待永奉存居候所又候 御滯府と承り候は實に途
方に暮候半と深く遠察仕候夫も二三十年前の世中に御座候得は五年
七年の御留守にても兎や角推送り候ても宜敷御座候得共前條の通當
今の形勢實以て片時も油断不相成時節に御座候得は可成丈々は御在
國勝にて文武の御引立且は御領中百姓町人御愛育の御恩惠被爲相加
御國力富強の御所置被爲相盡御國中二十万人女子供に至る迄 御
國恩の末には一命をも可惜事お無御座と骨髓迄感戴仕候權治教一致

の御直裁可有御座御事に乍恐奉誠祈候全体人君は民の父母おて御座候得は何事も差圖次第お可畏は勿論お御座候得共平常無理成仕向おては如何お親子問おても決て心服は不仕候夫故如保赤子の心得肝要の儀と聖賢も警戒申被置候常節實に天下危急の形勢に付只今の内一日に~~す~~平日にても無事の内御國中士民十分に御愛養被成置候儀第一の急勢にて可有御座孟子にも國家間暇及是時明其政刑雖大國必畏之云云と相見候儀此節的當の至論に奉存候何事も用心致過候とて無調法の無御座候右様御深慮十分御盡被遊候は何時にても萬一非常の事に差當り候ても平常養立被置忠孝無二の御人數を以第一の天朝御守護又の公邊御手當等何事の到來仕候共些共動き不申候様兼々其覺悟仕置度事共に御座候就ては當年も御滯府は御國元に取て極々難澁の仕合に奉存候乍恐於御前も左様にこそ被爲思召可被遊御當惑候半と乍憚奉懸察候責ては當秋にても御歸國の御都合公邊御手入等は不被爲出來御事に御座候哉此節は御差留公邊の御都合等は小臣の私共等にては勿論不相辨事には御座候得共何共

難心得奉存候畢竟御國元大丈夫有之上にてこそ天下の御用何事にても引受候儀出來仕候譯に御座候得は御國政向數年御留守にては何分難被爲行届旨被仰立候は公邊にてもよもや國元は如何相成候ても不苦と申筋は有御座間敷哉に愚案仕候夫逆も當年初度の御差留と御座候は右の御都合も御六ヶ敷可有御座候得共兩度引續て御差留と之實に公邊御無理の御所置に奉存候併し此儀は國家重大の御事に付私式の彼是申立候儀には無御座候得共右文武衰廢且御國中人氣動搖仕候様の儀に到候哉も難計憂念の餘りに寸忠吐露仕候拙夫は兎もあれ文武御引立筋常節格別御手厚被遊御所置候事第一の御急務と奉存候乍去是又御君徳の御誠實より被仰出無御座候ては十分の振立は無覺束奉存候幾重にも御深慮被爲盡候様爲天下國家士民誠祈懇願仕候儀他事他念無御座候

右三ヶ條荒増の愚存奉言上候書面時勢の議論に及候所にては忌諱に觸候儀も可有御座尊慮の程も重々恐多奉存候得共御厚恩の末に沐浴罷在候私儀存念の程不包不隠奉申上候猶又追々委細のヶ條言上可仕候右

の趣御序 御前向宜様御取成可被下候恐惶頓首謹言

辛酉四月

臣本莊仲太拜

一損書判

御近習衆中

右ハ三月以來相認置候所差出方彼是六ヶ敷其上中途壅蔽難計種々苦心
の末御目付中より差出候得は直様御前へ相達候手筋の趣漸く承知候に
付四月十二日朝御殿へ出仕大島半右衛門呼出し封書取次吳候様相頼候
所何事なく受取仲間一覽の上直に持参仕 御前へ差上候處 御開封奉
伺其儘引取候旨同畫同人引取講所へ立寄申開候

其節餘りのうれしきに

契おく賤のことの葉を、けてし

今とこゝろあるる雲をし

乍恐再度言上仕候書取

先達て愚存の趣書取を以奉申上候處辱覽被 仰付誠以難有仕合奉感

泣候其砌前後追々献上仕候面々も御座候哉に竊も承知仕候去は世上の
形勢共十分被爲 聞召候半と奉恐察候然に又々愚存申上候ては御面倒
に可被爲 思召 御機嫌の程重々恐多奉存候得共前書にも申上候通私
家筋の儀は近代御取立の儀に御座候得は何品にても一廉御用相勤度兼
々心掛罷在候殊更當時講釋方をも被 仰付置乍不束御家中子弟へ朝夕
忠孝の事共申開候身分に御座候て自分には御奉公筋に存付候儀をも御
威光に畏れ差扣罷在候ては今日の勤向にも引合不申言行相違の譯相當
候得は何分於心底難黙止又々左の二ヶ條言上仕候幾重にも小臣の區々
の寸忠 御愛憐被 仰付被下候様奉願候此段 御前宜様御取成可被下
候恐惶謹言

酉五月十五日

臣本莊仲太 一損書判

御近習衆中

一御國本 御愛養被爲相違候様有御座度奉存候事

但御國本とは御領中百姓の事にて農は國の本と古來申傳へ國中にて
は百姓程大切の者は無御座農民の稼穡相勤上納仕候へはこそ乍恐

上々樞本始御家中並工商且は無用の坊主非人穢多迄も全く百姓の蔭にて今日生命を保ち候儀に付古昔賢君方には民は天也とて百姓の別帳上覧の節の辱も天子の御身にてまへ拜して被受之候夫は全く右等の譯にて可有之然所敷百年の太平にて上下共奢侈に推移り兎角金銀華美にて人目を飾候儀に罷成候得は在々田舎の百姓共は言語衣服の飾も無之如何にも無風雅至極に付自然百姓とて見こかし町人共迄等閑に相心得候様罷成全く大平の悪風にてまへまへ心得違の事共に御座候全体天下に四民とて人間は四民の外無之其四民は士農工商にて士は天子以下諸大名は勿論諸士中足輕其外一刀指にても公用を勤切米を受今日渡世仕候輩は全く士と申者にて農は則百姓の事にて工の諸職人商は町人にて有之々樞其次第も士の次に百姓其次に職人町人と相成右四民の内にも農民有て上下貴賤士工商共今日生命取積き申候左程大切の百姓を何氣もかく踏付候ては第一天理に背き候儀に御座候別て人君には百姓を大切に思召候儀專要の事にて可有御座書經無逸篇に成王幼君にて農民共の稼穡の艱難承知無之夫にては往

々天下の爲に不相成との周公深々心配の餘り教訓被中候事御座候去は常に御領中百姓の事共風にも雨にも被爲思召出候様奉存候毎日被召上候御膳にても此米は如何して出来候哉又は被爲 召候御衣服にても此木綿此絹は如何して出来候哉一飯一衣の間にも御心を厚く被爲留候様有御座度奉存上候御領中百姓共も一年中寒にも暑にも手足泥ぬりひびひかされと相成夫婦諸共相働小兒は乳を求め泣きまけふにも目を不掛御田地耕作方に心力の及候丈苦辛仕候中々に此間れ骨折と申者は實に言語に難述事に御座候然るに夫等の事は當時士中は申迄も無御座足輕末々迄も相心得不申況て一郡一國の人君あては猶更の儀左様申私共迄も農民千辛万苦の實地之相心得不申乍恐右様の事に被爲用 御心御領中 御巡覽等の節も能々可被遊 御氣付御事に可有御座兎角下情お被遊 御通達候様重々奉至願候昔年細川越中守殿銀臺公と申候方隠もなき名君に被爲涉在國の御鷹野に被出野原にて辨當被遣候節少しの飯粒土沙の内へ落候を是之勿體なき事とて自身に拾ひ被召上候由申傳候全く粒々皆辛苦の實情心得被居候故不覺右様の仁心發顯仕

候誠に以難有事共に御座候且上杉鷹山公杯の仁心仁政之兼々御承
 知被遊候半今更申上迄も無御座和漢共名君方に之第一農民愛育養撫
 恤の仁政被相盡候右様大切の百姓に候得は如保赤子の御誠意を以御
 撫育被遊民の父母たる御役前十分御心を被爲盡候様奉存候扱御撫育
 と申も唯々饑饉凶年の節御救米被下置候計りの事に無御座候第一御
 郡奉行其人品屹度御撰立其下役の大莊屋莊屋且村役人共迄廉直質朴
 人の物精密に吟味可仕儀肝要に候且又上納取建方人心の向背にも拘り候
 儀に付てと別て御仁惠の御趣意相貫候様可有御座勿論の御事に
 奉存候全体御國是迄上納租税の御法の近國中にて御寛宥の御定法と
 兼々承知罷在候乍恐御祖先様御愛育の御慈悲永世之御仁政幾重に
 も難有御事と奉存候然に後世に種々聚歛の奸臣共差起り表向の租
 税之其儘にて色々手を替品を替萬民の膏血を絞り上候て君上一人我
 儘の慾を恣にしまして國中萬民立行兼遂には百姓騒動に及候儀は下
 の悪敷にて無御座全く役人中の取扱方不宜故にて候夫故大學に與有
 聚歛之臣率有盜臣とは相見候御國元昨冬大豆上納憐國にも無之高直

にて御取建に相成御領中必至斗差詰り人氣も甚不折合の趣に承及忍
 入懸念至極に奉存候是等は勿論上には夢にも御承知無御座御事に
 て御勝手方役人中是迄の目斗を以取建候儀にも可有御座哉併し下々
 よりの恨は乍恐御前へ歸宿仕候無勿休御事奉忍入候右に付在方掛
 りの役人は就中人品御吟味にて百姓中の苦樂等も相心得慈悲心深き
 質朴律儀の者へ被仰付無御座候ては其役人の取計にて矢張り上
 の御失徳お相成實は御迷惑の御事に奉存候扱右の御愛育には前番言
 上仕候御大儉御嚴密御取締の儀肝要に奉存候全体御手許御飲食御衣
 服初其外公邊御勤向且御家中御渡等物て上の御用途に相成候丈々
 の金銀米穀全く御領中百姓苦辛の膏血に御座候得は中々以一錢たり
 共無用の御玩物且は後宮婦女子杯の爲に御遣捨に相成候ては決て相成
 申間敷奉存候論語にも百姓足君孰與不足百姓不足君孰與足と相見候
 通君民は何方も一体の儀に候得は其邊には深く御思惟被遊様奉存候
 兼々御節儉被相盡十分御貯被置候上は何時凶年等御座候ても早速に
 如何程も萬民の取積出來候丈けは御救且非常の御備向等御全備に相

成候様奉存候先年亞墨利加渡來の節 公邊へ被仰立候御書取近來筋
に拜見仕候所右御書面の内には大小名の面々國用不足無御座士氣振
立候様御所置有御座度云云銘々節儉相立食を貯へ兵を練り融通出來
候て防禦の術速に相辨可申云云當時の勢二百年來の昇平に相慣れ奢
侈日々増長武備年々相衰候云云往々困窮の國にても戒嚴の命を蒙ら
は器械甲冑等の類迄急速相整ひ候よりして甚敷の費用も辨し候ふは
頭會箕歛の政行れ愚昧の土民共は上を恨み往々夷賊の誑誘ふ從ひ候
者可有之も難量云云此數ヶ條の御趣意乍恐至極御的當の御名論に奉
存候右様公邊迄も被仰立置候上は萬一 御手許に右のヶ條に相違仕
候ては全御虚言に相成 公邊の恐は兎も角も其節天下諸侯方より被
差出候書付一同取集候て奉策彙集と申書名十餘卷出來居候小臣儀も
右に内にて御書取も初て拜見仕被仰立候御趣意難有乍恐奉感服候右
様天下にも流布仕居候得は諸國の形勢諸侯方の賢否剛愎等の模様も
右書取にて荒増相分申候間平生書生中の議論にも何國は如何何國は
此通何國は士氣も振居何國は役に不立坏評論罷在候央に御座候然所

右御趣意に被相觸候儀御座候ては誹謗も如何可有御座哉乍恐小臣に
至候ては爲御前重々懸念至極に奉存候且又近頃恐多容易に難申上筋
に候得共ヶ様區々の寸忠言上仕候上は心底の程無伏臘奉申上候其儀
外々の譯にも無御座近年御行狀竊に奉伺候所御家督砌の様に不被
爲在候様奉存候御契向等の御都合は外臣の私共には承知不仕候得共
外見の所にて當御屋敷御殿向御普請等美事に出來且近頃迄も追々御
造營有之居候扱又御臺所御料理向等次第に御大物に相成候趣密に承
及申候畢竟 上ヶ様御人數被爲相増候に付ては御殿向其外共以前よ
り御用途相増候儀は其筈の御事にて下々の極小家にても女房子供と
一人増候得は一人丈ヶの費用は相増申候夫等は元より覺悟の前ふ御座
候得は右に付てと尙更無用の費無之様取締不申候てと極意家内一統
立行兼候様可相成り勿論の事に御座候去り其理り大小共に同様の儀
お付此節河可成丈ヶの御取省有御座度奉存候然所近來り御遊興の御
序にり躍り狂言長歌淨瑠璃等にて放蕩無頼遊治の男女共被爲召候儀
も御座候哉に傳承仕候儀に御座候二十餘萬石の 御國主殊に 皇胤

赫顯の御家柄に被爲在且御殿向への御譜代の御家來にても奥詰の外
の難罷出御場所柄へ右様何方の馬骨とも不相分人間外の河原者共被
爲召寄候事乍恐 尊慮の程何分難心得奉存候且右遊治郎共の内への
如何体の隠密廻し者等紛れ込居候哉も難計候處 御前近く被爲召候
儀如何に太平至極の世との乍申近頃御輕々敷御事にては無御座哉當
時諸士中の世上不穩形勢に付て何時御馬前にて死生を決候儀も難
計銘々其覺悟罷在候央に右様の事共諸士中の手前も御憚なく御一已
に御遊興に被爲耽候儀以外れ御事に奉存候勿論右等れ事瑣細れ儀
候且先達て角力取上覽等有之此儀之其中にも少の男少しく御座候得
共其節莫太の御失費と承及申候是等無用の玩好にて御座候扱道路
言勿論殿に不足事にて信用不仕候得共一昨年當りの事にも御座候哉
當屋敷内御普請向追々御經營の事肥前侯被聞及候て噂に有馬氏之
いつ迄江戸此儘にて續き候と被存候哉追々普請等結構の由片腹痛事
共に有之旨被申候哉に承及候此儀は近頃過言にて私共迄も不快存候

得共成程其實御座候上は口廣く申譯も出來兼口惜き事共に奉存候全
休御當地屋敷は先陣屋の姿に有之候得は只々堅固にも一通り間に合
候得は宜様あるものにて御座候肥前侯上屋敷先年大地震後之外長屋
斗り取立にて住居向之今以普請の様子も無御座由其邊之屹度存慮も
有之候半と愚考仕候夫等の扱置御國許にて去冬以來貧民共三度の
食事も出來兼色も青きめ涕泣罷在候由其央右様無用の 御遊興の如何
可有御座哉 公邊へ被對候ても御不都合の御事共に有御座間敷哉
に奉存候兼々 御賢明にて其邊之御氣付無御座候御方様に不被爲
在候處近來何故に右様に被爲候哉と朝暮夫而已奉恐察痛心至極悲
歎落涙に堪兼申候去る己午年御在國の節の調練御押出し文武稽古御
呼出し且又山川御獵等扱々勇々敷 御大將に被爲在小臣の私共迄も乍
蔭雀躍罷在候處纔兩三年も斯迄御元氣被爲衰候との如何の譯も共御
座候哉小臣の私共台点不參只々恐入候事共に御座候勿論一時の御慰
の大國の御主も被爲在候得は聊以不苦候得共御實心も國家士民御愛
育の思召不被在候て決て相成間敷奉存候夫も四五十年前の世上も

赫顯の御家柄に被為在且御殿向への御譜代の御家來にても奥詰の外
 の難罷出御場所柄へ右様何方の馬骨とも不相分人間外の河原者共被
 為召寄候事乍恐 尊慮の程何分難心得奉存候且右遊治郎共の内にも
 如何体の隠密廻し者等紛れ込居候哉も難計候處 御前近く被為召候
 儀如何に太平至極の世との乍申近頃御輕々敷御事にては無御座哉當
 時諸士中の世上不穩形勢に付て何時御馬前にて死生を決候儀も難
 計銘々其覺悟罷在候夾に右様の事共諸士中の手前も御憚なく御一已
 比御遊興に被為耽候儀以外は御事に奉存候勿論右等共事瑣細は儀
 にも御座候得共御家中一統の氣前にも相拘り不輕御失徳に乍恐奉存
 候且先達て角力取上覽等有之此儀之其中にも少の男少しく御座候得
 共其節莫太の御失費と承及申候是等は無用の玩好にて御座候扱道路
 言勿論殿に不足事にて信用不仕候得共一昨年當りの事にも御座候哉
 當屋敷内御普請向追々御經營の事肥前侯被開及候て噂にも有馬氏と
 いつ迄江戸此儘にて續き候と被存候哉追々普請等結構の由片腹痛事
 共に有之旨被申候哉に承及候此儀は近頃過言にて私共迄も不快存候

得共成程其實御座候上は口廣く申譯も出来兼口惜き事共に奉存候全
 体御當地屋敷は先陣屋の姿に有之候得は只々堅固にも一通り間に合
 候得は宜様あるものにて御座候肥前侯上屋敷先年大地震後と外長屋
 斗り取立にて住居向と今以普請の様子も無御座由其邊と屹度存慮も
 有之候半と思考仕候夫等の扱置御國許にては去冬以來貧民共三度の
 食事も出来兼色も青きめ涕泣罷在候由其央右様無用の 御遊興の如何
 可有御座哉 公邊へ被對候ても御不都合の御事共に有御座間敷哉
 に奉存候兼々 御賢明にて其邊と御氣付無御座候御方様に不被害
 在候處近來何故に右様に被為候哉と朝暮夫而已奉恐察痛心至極悲
 歎落涙に堪兼申候去る己午年御在國の節の調練御押出し文武稽古御
 呼出し且又山川御獵等扱々勇々敷 御大將に被為在小臣の私共迄も乍
 蔭雀躍罷在候處繼而三年の斯迄御元氣被為衰候と如何の譯も共御
 座候哉小臣の私共台点不參只々恐入候事共に御座候勿論一時の御慰
 の大國の御主も被為在候得は聊以不苦候得共御實心も國家士民御愛
 育の思召不被在候ては決て相成間敷奉存候夫も四五十年前の世上も

御座候得ハ兎も角も相濟可申候得共當節般樂忘放にてハ不相成世中に奉存候然所此節追々承知仕候にて於御國許も當年の御滯府は實に以案外にて御家中ハ不及申御領中無智盲昧の士民共迄も大に力落し當惑罷在候趣ハ勿論委細違御聽候半別段申上迄も無御座全体御家中一統より愁訴仕候様相成候てハ奉恐入候得共畢竟數百年の御厚恩を蒙り罷在候所當節柄數年御歸國不被遊候てハ御國中士民の衆心動搖仕候哉も難量依之一日も早く御歸國被遊候様奉願候儀全小兒の父母を慕ハ候心地にて臣子の至情に御座候得ハ乍恐御前にも嘸早御滿悅御頼母敢こそ被爲思召候て定て公邊御手入等も追々御都合被爲相立候央に可有御座哉恐察罷在候何分にも當秋涼風ハ向候ハ早々御發怒被遊候様奉存候是等の愚意も先般言上仕候御君徳被爲積候ケ條並御大儉御取締ケ條の通ハ御座候幾重にも御國本御愛育御誠意被爲相貫候様爲國家士民千萬奉誠祈候

一御武備筋強盛に御所置被爲相盡候様有御座度奉存候事但當今不容易時節にて諸蠻夷共追々入込就てハ天下一般諸式高直に相成四海困窮此

時に御座候此儘にて阿三年も差過其内萬一凶作等御座候ハ勇々敷大事に可及哉も難計其邊過慮仕候得ハ中々片時も由斷不相成時節と奉存候就てハ御武備筋唯今一日にてハ無事の内十分御手當被成置候様奉至願候諸家様にてハ調練等御引立にて諸士中進退駈引も漸く習熟罷在候得共是亦兎角太平の餘風に引れ外見而已に罷成候儀殊念至極に奉存候御備立ハ古來の御家法も可被爲在候得ハ私体容易ハ可申上筋にハ無御座候得共兵政の儀も天文年中鐵砲渡來仕其砌小筒丈ケの業前は元龜天正時代相用候得ハ實ハ誠の祖法にて砲術に限候ては御治世後次第密に罷成左候得ハ只今にてハ備立も右法の陣列にてハ相成間敷候兼々愚存罷在候右砲術も追々精密にて相成候得共太平の畑水練にて只今實戰に相用候處にて平常於角場輕業にて當りを爭候様の事にてハ參り兼可申候元來砲術は西洋夷人共工夫仕始候品にて彼等は近來も實用に相試一年増利用相心得候由に相聞大砲は勿論小銃にても西洋の利用を取我大日本天然自然生得居候活機に乗せ相用候は百萬の敵兵鐵壁の賊船をも徹塵に打碎キ可申候是迄は火繩銃も

其場其時に寄て攝等の節は用立可申候得共接戦の用には相成間敷味
方内に意外の怪我等仕候儀も難量殊に雨中杯用立不申候先年鼠山大
調練見物仕候處五六千挺の筒早込連發等仕候得共其手捌き宜敷故一
人の怪我も無之感心仕候尤人数組立等の儀は西洋陣列如何可有御
座哉其邊は未だ心得不仕候惣て軍法は臨機應變にて御座候間兎も角
も和漢古傳の名術を合法仕候儀に可有御座奉存候御國元是迄越後流
御家法に被相立置候得共一流計りにては當時差支可申全体軍學流法
種々有之内にも越後流は偏固にて變化自在の妙用無之趣に先哲の議
論も有之候別て前文の通致砲備第一に組立候は中々一流斗の戦法に
ては相整中間敷諸流の長所を取て追々調練相試候上別段御家の御備
立被相立候様奉存候扱多き申事に御座候得共御家中御人数御高に應
候ては御手少々御座候様奉存候御同高阿州土州佐竹會津杯の様子相
探見候所人数は何國も余程澤山就中會津家は御新家には候得共士人
数は御高不相應澤山に見受申候何卒於御國元も士人数並足輕人数追
々被相増候様有御座度奉存候此儀當節は急務に御座候間御精進被相

盡今日よりも御取掛り有御座度奉存候其所置は御家中一統へ銘々存
寄十分申出候様被仰出候は如何程も面白き取計方も可有御座只今小
銃隊等被相立候は是迄有來れ小筒は者全く相用ひ只今迄より人数相
増且矢部郷鹿子尾谷等銃隊被相立其外惣御郡中大庄屋一組にて一隊
つゝ組立庄屋大庄屋其儘組頭小頭等に仕立候は數千人は精兵即時に
出來可仕候則古は農兵の遺意にも相叶可申哉右等の仕法は其筋兼々
講究罷在候面々も可有之屹度名策妙計可有御座候何れにも御人数可
成丈々被相増候様奉存候然所御人数被相増候に付ては夫々御擬作も
不被下候ては不相成候得共兼て御内檢高も少く御座候得は其御手當
何方より差出可申哉其邊には有司之當惑も可有御座候得共第一於御
前十分其御決着被遊候上は御手元御奥向等非常は御省畧被相盡如何
体御艱苦を被爲忍御誠意貫通仕候は御家中末々御趣意相弁大身の面
々は子弟へ分知等仕り又は己か知行も國家の爲めには一分丈々の外
に差上候様上下一体親密に實儀に相成可申哉奉存候右様御誠意に出
候上にて今日宴安に耽り飽食暖衣罷在候者も萬一有之節は如何に

先祖の勤功御座候ても子孫の奢倣にて 上の御盛威に相戻り候上は
品により即時に知行被召上候か又ハ減知被仰付候共天理人情決して不
都合には相當間敷奉存候尤右等の儀猶更 御君徳御大侯十分御盡被
遊候儀無御座候ては逆も出来兼候事共に御座候扱又容易に難申上筋
に御座候得共當時久留米御居城は萬一の節は應變不宜御場所に奉存
候第一洪水彌増崇高に相成候付てハ此以後如何跡の洪水大變御座候
哉も難計奉存候先年江戸表へ佐藤玄海と申者有之同人の説に太平の
世ハ洪水程災害は無之候古人の論に筑州久留米城上州鹿橋城城州
淀城は百年の後ハと水下ハ相成可申との論有之候所鹿橋の方ハ既に
水下廢城に相成申候久留米淀城後年如何可有之哉愚念の事共に有之
旨尊仕候其水害は先兎も角も只今の所にては御本九一輩の川隔にて
敵地に有之夫も大砲等無之時節に御座候は宜敷候得共只今にては廿
丁卅丁外の所迄山も川も打越候得ハ其防方如何に義經正成の名將に
ても恐くハ出来兼可申其上肥前の人氣中ハ陰謀にして決して油断不相
成候先年より豆津にて赤司黨杯土箸の結構且近年千栗山白石邊へ追

々土箸仕立一昨年より白石へ家老鍋嶋山城隠居所と相唱家來屋敷共
繩張有之候所昨今年に至り數十軒屋敷撥出来且文武學館等取立既に
四五十人の書生寄宿罷在候趣に承知仕候勿論自國を持固れ爲めに
元より禍心も有之間敷候得共御國に取候ては決して油断相成不申候夫
と一事以上は御座候得共當節柄に付世間右様不急の事迄何となく心
掛ケ不目立様隣國の手當迄用心罷在候其共に御國ふて之此先何百年
太平打續き候様上下共安閑に差過罷在候ては萬一非常の節如何應變
可仕哉右往左往にて狼狽仕候内には如何の大變に可及哉も難計奉懸
念候御居城の儀當今にては 公邊の憚りも御座候に付此節表立御取
替の御都合には難出来候得ハ其場に差當り候てハ間ハ合不申候間只
今の内密ハ其手當被成置萬一の節は御居城は何方へケ様御備立はケ
様御國四隣の御固は此の通他向へ御差出の御人數ハ如何江戸御屋敷
向之如是杯と夫々御人數配り迄平常御全備被成置候様奉存候増上寺
火の御番御受持の節平常其手當十分ハ相立居候得共不意に重櫓木打
立候得ハ御屋敷中騒動不一ト方如鼎沸返ル申候右様十分御備相立居

侯てさへ混雜仕御人政線出迄には餘程の時刻も移り申候況や非常異變の節死生の境にと猶更可及狐狐候左候得り平常周密に御計策相決居御備向十分相整ひ居不申候ては急場の應變出來兼可申候當時日前の處にては至極靜謐にて太平の姿に御座候所右様の事共言上仕候ては定て狂氣の様に可被爲思召候得共決して左様にては無御座候全体日本中計の事に御座候は東照宮御餘德今以天下人心に染込居候に付中々百年の後迄心遣之無御座候得共去々丑年亞墨利加渡來の節公邊一時偷安の策にて腰弱の御所置ふ相成候ては渠等ハ數百年來志願の通和親交易取結其末近年天下一般諸式騰貴にて一統の難儀とは相成申候元來蠻夷共交易取結候儀も只々一時の利益を目掛候儀には無之數年の内國力疲弊爲致内亂等差發り候節は處所に付込極意神州を併吞仕候底意は紛れ無御座候是迄諸國押領仕候其手始は皆夫等の詐謀に相聞へ所謂牛皮大の故智にて御座候全体大猷公御代鎖國の良策相立被置候儀千歳の御英斷神州の有限り遐奉可仕儀を一時は權宜抔と比名義にて御祖先は深謀遠慮を破り此節は仕宜に至り

候儀天軍にも可有御座候得共實に千年の遺恨此事に御座候乍恐天朝にて種々被爲惱震襟追々勅諭の御旨も有之由に候得共幕府にて御取用無之全く關東御存慮通りの御所置に相成候より天下慷慨の士皆々憤懣に堪兼既に去春櫻田一件且舊多亞墨利加人及殺害候事共人間業には御座候得共矢張天命ふて可有御座候其証據には三月節句非常の大雪顯然にて御座候其外先年より妖星大地震大風又は奇病流行抔皆是天鑑にて有之候右様天意人心共不服の儀を公邊御一分の御取斗實ふ以問老始其罪難遣御座候是迄數百年の太平全以東照宮の御恩澤に御座候得は今更誰の亂を好候半年去兎角天下一統の人氣に戻り候御所置に付一年増ふ人心不折合に相成申候然上は天下慷慨の士共萬一横濱表燒拂候か又は御府内在留の賣人共又々及殺害候儀も御座候は如何の大變即時に差起り候哉も難斗御座候恐多申事には御座候得共徳川家も追々御衰運の兆相見申候右の所へ萬一大變差起り候御替代の小諸侯にては如何可有御座哉外様の大諸侯方は銘々時運見合自國持固其時宜に寄り如何跡の内亂に可及哉も難計御座候

實は些過愛ふも可有御座候得共當今にては一國一郡の人君方には其邊迄屹度遠謀深慮も有御座度事共にて御座候扱又頃日の沙汰には對州表へ賣船渡來剩へ理不盡れ所業に付此上は何分難忍事宜により對州人數有限り死力を盡し討取可申と決心は旨公邊へも御邊に相成候由承及候最早次第に天下は形勢差迫り實に以片時も安心相成不申候就ては先達て言上仕候通早々御歸國被遊文武御引立筋其外共當節殊更御深慮被爲相盡御國中士民常に孝弟忠信親上死長の感化に相成候様第一御君德被爲積御大儉被爲盡候て千万歳は未迄御家盛大富強天朝は御藩屏幕府は御羽翼天下後世迄も欣慕仕候様被爲在度乍恐小臣は私共迄も天地神明に千々万々祈念願願仕候儀他事無御座候

右二ヶ條荒増は愚存にて御座候兵政等れ儀は兼々未熟に御座候得は大綱を論候迄にて御座候ヶ様重太の御事共言上仕非分の罪重々忍入奉存候乍去國家の御爲に寸分の微忠相盡度兼て其覺悟罷在候上は如何体の御殿爵被仰付候共少しも遺憾とも不奉存候只々國家の御爲と而已存

込小身一家の死生榮辱聊懸念不仕候右に付不願恐言上仕候江海の御寛量を以尊覽被仰付候は千萬難有仕合可奉存候右のヶ條に洩候儀は猶又追て可奉申上候誠恐誠惶頓首々々昧死再拜謹上

邸學識官臣

本莊一損

半切

口上添書

別紙一冊先月十五日獻上仕管に相認置候處其砌些見合候筋も御座候に付差扣罷在中候然所去る廿八日夜高輪東禪寺に夜討等有之候趣にて實以不容易時節夢寐にも難忘事共に御座候間御前向の御都合等外臣の私共一向相辨不申候得の奉恐入候得共ヶ様再應及言上候儀御機嫌の程重々奉恐入候得共前久々通眼前危急の形勢何分臣下の身分片時も難默止則相認置候儘差上候に付日付等認替候間合も無御座候に付其段御序の砌幾重にも宜様被仰上可被下候以上

六月朔日

本莊 仲 太

御側衆

御當番様

右に節口にまかせて

のそかある臣の身おしも真心を

ときてこそ死ぬ大和たましん

與伴 參政書

損頓首白參政伴君足下僕之於足下昔同時遊學乎江戶又同官出入乎府學其交固非一日之舊也及足下居於顯要不敢數往來於足下之門此非交之淺所居之地不同也然在今日則豈可以區々之形迹而默止哉乃不以僕之愚敢進說於足下請幸亮之也夫方今天下之形勢國力日盛外侮日深然而幕府之議出於一時苟安之下策於是皇天震怒降之變災亦既悉矣至婦女子苟有眼孔者為之痛哭流涕矣况大眼如炬者乎然天下之大勢則非我一藩之力所能回也請姑置之伏以我藩今公之即位也一循先公之遺意厲精圖治講文武

尚儉素夙夜憂勤於是政刑略就繩結矣而亡幾忘倦漸生年長於一舉在今日則內作色荒外作禽荒甘酒嗜音峻宇彫階其所以繼德徽安者不而足矣嗚呼當今之世乾々屬厲以張國力以明政刑猶惟日不足况竟逸意故不知其為危災而反以為安利哉疎臣如僕者亦豈得不為之憤憤勸導哉夫居無用之地而致匪躬之節固難也在顯要之位而高寂寞之志其罪為如何也今足下在位不為不久矣聞天下之得失不為不熟矣然而未嘗聞一言及於時勢之急其視國家若越人之於秦人毫不加喜戚於其心為大臣者固如是乎蓋方今天下之勢及藩邸之形雖三尺童子亦為甚危焉足下之智何有不知而今如是者知而不言耶言而不聽耶將為未可以言耶抑亦不能言耶僕於是不能無疑於足下也且夫足下之起身也先公為之初以備他日之用而今公嘉其學深行修裨益于國家者乃不次擢居今位其官以參政為職則開陳善道以禁閉居之邪心而其所以施外者振士氣養國本以俾國家不動若勢石而上則教吾君於堯舜下則垂善政於後昆此足下之所當盡死力也嗚呼足下之學行而居顯要今既九年則與鄙俗之庸人同抱滋養相共晨入夕歸而謂之得其職而可乎公之所以用足下之意亦豈使隨行而入逐隊而趨言不敢盡其誠道有所屈於己哉然足

下所爲今如是則不獨爲公之所以用足下之盛意先公在天之靈亦以爲如何也嗚呼幽明共得罪則何面目可以立於殿廷哉且在武人俗士則猶可也足下之學與行魚一器之仰方夫之望者而決不可若是也頃者有人謂僕曰伴參政以學行起承非望之恩而未嘗聞一善政之若出於參政之手者况當今日猶若是則參政亦是竊位固寵之庸人焉耳信乎賢者之無益於國也僕乃覆其口曰否々莫多言予輩猶且激昂悲憤欲爲國家致寸分豈參政而何竊固之有哉予暫待之其人勃然而立僕於是竦然自失竊謂參政吾同僚且學志亦同今也雖異其地要之同是名教中之兄弟也而人之因僕請參政蓋激僕等亦未可知也然其言亦非無可取足下以爲如何僕則謂足下進退之機決於今日矣請幸熟思焉而足下今猶逡巡長楸曰有待則遂失事機且誤國家之大事所謂道天之未陰爾微彼柔士綢繆屠戶今既已晚矣而猶可及也足下不出於此則豈惟得罪於士人必得罪於名教矣縱士人恕之亦獨不愧于心嗚呼足下之進退乃不特國家廢興之所係實吾道之存亡於是乎決矣伏惟深體公之所以用足下之意痛懼士人後世之譏勇決推誠陳善閉邪而救弊士氣受養國本以堯舜吾君以措國家於富岳之安則一入一家今日士民之受其恩而已乎實國二

十余萬人後世子係之被其澤必矣此足下之所當推赤心也且今公天資聰敏而其初政厲意之勤敢非中主之所能及也則可共與爲善矣則可共與有矣爲大臣者都俞吁咈而亦唯在輔導得其道而已矣而其引君使以當道志於仁者乃參政其任也孔子曰陳力就列不能者止危而不持顛而不扶將焉用彼相矣然而公之在近年宴安日長政治漸廢弛則參政不得不任其責也所謂虎兇出於柙龜玉毀於楨中是誰之過也然猶謂吾君不能則賊吾君者乃今之諸侯之罪人而不忠之甚也雖然參政非一人而足下居下列則勢必有不如意者矣雖則不如意矣至誠感神況於人乎昔者有魚屋八兵衛者以匹夫之身感動萬乘之至尊然則二百餘年之深恩飽食暖衣此誰之賜也匹夫且若是大臣而我曰不能可乎由是視之則足下一心之勇決而大夫參政亦豈有不感動乎哉且夫去年之洪水米穀之騰貴古所未有也貧民泣饑困寒其情以爲如何但暮每思念及之乃未嘗不流涕也若僕猶然况大臣乎而今日滯邸之光景殆不忍言者矣嗚呼二十餘萬人之膏血舉而充之於一人之欲其謂之何哉春秋之法責備於賢者今僕區々猶望足下之能一言者不忍便絕足下也若猶謂大臣

今所爲得_レ其宜疏臣之非敢所知則請足下直撻此書於殿庭可以便_レ聲_レ僕非分之罪而誅之且塞_レ書生後日口是僕之願也臨紙慷慨不能盡_レ所懷_レ乃唯陳_レ區々衷情之一二敢布腹心伏惟幸察不宜頓首

辛酉四月十八日

郎學講官本莊損拜白

參政伴君足下

本莊榮三郎

小河真文

弟榮三郎モ亦々家學ヲ奉シ氣節アリ爲人樸直誠實ナリ兄損ト同時ニ禁錮セラレ病死ス
小河真文初メ吉右衛門ト稱ス又變名シテ池田八束ト稱ス弱冠武技ヲ嗜メリ壯年ニ至リ初メテ會澤氏ノ新論藤田氏ノ回天詩史等ヲ讀ミ大ニ感發スル所アリ勤王攘夷ノ思操ヲ興起セリ參政不破美作ヲ殺害セシ一人ナリ明治元年京都へ出テ公用人ニ任シ諸藩ト交際セリ國ニ歸リ壯士ヲ集

メ七生隊ト稱シ應變隊ト連合シテ生殺ノ權ヲ握レリ動スレハ藩廳ニ抵抗シ大參事水野正名ノ方向ヲ左右スル程ノ勢力ヲ有セリ長藩人大樂源太郎カ遁逃久留米ニ來リテ救護ヲ請ヒシ時ニ共謀シテ回復ノ策ヲ運ラシ源太郎ヲ已レカ股肱腹心ノ家ニ潛匿セシメ密ニ人ヲ諸藩ニ派遣シテ同志ヲ募リ機會ニ乘シ大事ヲ舉ケン_レヲ圖リシニ天兵豐後ノ日田ニ臨ミ遂ニ縛セラレ日田ノ獄ニ入り東京ニ護送シ拷問ニモ掛リタルカ藩難ハ已レカ一身ニ引受ケ毫モ懼ル、色ナク從容自若死刑ニ處セラレタリ年二十五爲人剛毅ニシテ膽畧アリ然レモ見聞寡陋ナルヲ以テ大政府ノ方針ヲ知り得サルヲ以テ大事ヲ誤レリ
古松簡二ハ上妻郡溝口村ノ醫士清水某ノ子ナリ小河真文

古松簡二

ノ相談相手タリ初メ清水真卿ト稱ス幼年ヨリ學ヲ好ミ處々ニ遊學シ江戸ニ出テ安井息軒ノ門ニ入レリ後々國事ニ奔走シ筑波山ニ水戸ノ武田耕雲齊カ兵ヲ擧ケシ時之レニ加リ兵敗ル、ニ及ンテ長藩ニ走レリ途中安藝國御手洗ニテ捕縛セラレ廣嶋ノ獄ニ繋カル維新ノ時ニ至リ許サレテ京都ニ出ツ此ノ時ニ當リ大久保參與ノ遷都論出テタリ簡二ハ反對ニテ木戸參與ト激論シ遂ニ不滿ヲ懷キテ久留米ニ歸リ藩校ノ助教タリ暗ニ大政府顛覆論ヲ唱ヘ常ニ小河眞文ト密議ヲナシ大ニ計畫セリ明治三年東京ニ出テ有志ト交リ島原ノ丸山作樂土佐ノ岡崎恭助等ト連結相謀ルトアリシニ大樂源太郎ノ關係ニテ日田ニ護送セラレ遂ニ東京ノ獄ニ移サレ終身禁獄ニ處セラル入獄中十五年六月病

歿ス年四十八其爲人卓犖不羈杭慨淋漓議論風生聽者ヲシテ覺ヘス爽快ヲ呼ハシム其日田獄中ニ在ル時ノ詩ニ曰ク
賦命數奇何所成、南船北馬寄此生、賦詩輒發憤時語、除酒更無驚世名、千里山河如嶮路、滿天風雪宿荒城、一年殊切一年切、三十六回歲晚情、

登鶴飼廣
鶴飼廣登對鷗公ク小性ノリ嘉永五年眞木黨ノ改革論ノ謀議ニ加リシヲ以テ貶黜セラレタリ後々郡奉行及ヒ惣奉行附添役タリ元治元年先手物頭格郡上奉行ニ登ル水野正名ノ藩政ヲ執ルニ及ンテ大ニ登庸セラレ權少參事ニ進ミ刑法軍務ヲ司トレリ大樂源太郎ニ關係セシヲ以テ遂ニ禁獄三年ノ刑ニ處セラレタリ後々久留米郡長ニ任シ又々有馬家ノ家令ニ任ス明治十八年東京ニテ病歿ス爲人文理緻密

田山剛

ニシテ才幹アリ平生勤儉ニテ俗務ニ練熟セリ
 山田剛初メ辰三郎ト稱シ後テ武雄ト改ム大毅ト字シ筑浦
 ト號ス後テ考槃ト改ム池尻葛覃ノ弟子ニシテ伊勢ニ遊ヒ
 齋藤拙堂ノ門ニ入り又々江戸ニ遊ヒ昌平黌ニ學フ文久年
 中々山侍從ノ久留米ニ來リ眞木保臣等ノ幽囚ヲ解ントス
 ルヤ藩議決セス侍從大ニ怒リ去ル藩廳大ニ驚キ剛ヲシテ
 侍從ヲ追ヒ留メシム侍從聞カス剛自ラ鬻ヲ斷テ信ヲ表ス
 侍從乃テ返リ藩内ニ館ス侍從剛ノ奇節ニ感シ終ニ率井テ
 長藩ニ至ル既ニシテ囚解クルヲ得タリ剛爲人磊落丹心報
 國ヲ以テ自ラ任セリ眞木保臣池尻葛覃等ニ從ヒ京師ニ出
 テシニ文久三年京師變動後禁獄セラル維新ノ初メ藩廳ノ
 史官大属タリシニ廢藩ノ際東京ニ出テ敎部省ニ奉職セリ

柴山典

後テ有馬家ノ家扶ニ任シ橋端邸ニ在リ明治十四年三月三
 日歿ス年五十五青山墓地ニ葬ル詩文ヲ能クシ書ニ巧ナリ
 其獄中ニテ書スル所ノ已亥日記三册アリ
 柴山典文平ト稱ス國老有馬主膳ノ家臣ナリ池尻葛覃ノ門
 ニ入り文章ヲ能クセリ江戸ニ遊學シ奥羽ヨリ蝦夷地マテ
 遊歴セリ文久三年京都ノ變動ニテ禁獄セラレ維新ノ時放
 免セラレ京都へ出ツ征東ノ時有栖川大總督宮ノ參謀トナ
 リ江戸城ニ乘リ入レリ其後テ宮崎縣知事ニ任シ幾ハクモ
 ナクシテ司法省判事ニ轉シ有馬家ノ家令タリ後宮内省奏
 任官ニテ東伏見宮今ノ小宮ノ御附タリシニ病歿セリ

久留米小史卷之十九

久留米小史卷之十九終

明治廿八年九月廿二日印刷
全 年九月三十日發行

版權所有

福岡縣筑後國久留米市莊島町七十八番地

著作者 戶田乾吉

全縣全國三浦郡鳥飼村大字大石百四十七番地

發行者 宮原直太郎

全縣全國全郡全村大字白山五百三番地

印刷者 荒卷宗

全縣全國久留米市三本松町七番地

印刷所 株式會社 觀文社

定價金貳拾五錢

